



# 教会学校教案誌

2006.7.8.9月号

日本キリスト改革派教会  
中部中会教育委員会

No.22

## 2006年7～9月カリキュラム (第22号)

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句	対 応 表
	単 元 の 目 標			
7月2日	ヨセフの苦難	創世記39:1-23	マタイ28:20	9
	ヨセフ物語を通して、摂理信仰を養う。主が共におられる幸いを知ろう			
7月9日	ヨセフの勝利	創世記50:15-21	創世記50:20	(10)
	人間の悪を善へと造りかえる主の御業を示し、摂理の主への信頼を養おう			
7月16日	モーセの誕生	出エジプト1:22-2:10	ローマ8:28	11
	主なる神の不思議な導き、御業を通して、歴史を支配しておられる主を仰ごう			
7月23日	モーセの召命	出エジプト3:1-14		12
	主なる神は契約に真実であられる。神の召きに応える信仰の姿勢をつちかおう			
7月30日	主の過ぎ越し	出エジプト12:1-32	出エジプト12:1	13
	主なる神は小羊の血により民を救い出される。願いの御業の恵みを喜ぼう			
8月6日	葦の海を渡る	出エジプト14:1-31	コリントー10:13	14
	主なる神御自身がたたかわれる。神の御業、御力の大きさをほめたたえよう			
8月13日 平和主日	平和を創り出す	エフェソ2:14-22	エフェソ2:14a	
	平和主日として礼拝をささげる。平和の主キリストを礼拝しよう			
8月20日	天からの食べ物	出エジプト16:1-36	ヨハネ6:35	15
	神が御自身の民を養われる。神に養われる幸い、七日目の祝福を知ろう			
8月27日	十戒を与えられる	出エジプト19:20-20:17	詩編119:1	16
	神は愛と恵みの言葉として十戒を与えられた。律法を持つ幸いを味わおう			
9月3日	金の子牛	出エジプト32:1-14	出エジプト20:4	
	神は偶像礼拝をしりぞけられる。主なる神の喜ばれる礼拝をささげよう			
9月10日	幕屋づくりと礼拝	出エジプト40:17-38	出エジプト40:3	
	神礼拝を中心として共同体が形成される。栄光に満たされる礼拝をささげよう			
9月17日 (18敬老の日)	カナン偵察	民数記14:1-10	ヨハネ3:3	17
	人を恐れてたたかわない者を主はさばかれる。主なる神をこそ恐れよう			
9月24日	モーセの死	申命記34:1-12	ヘブライ11:16	
	モーセの死を越えて神の意思は貫かれる。与えられている生を真摯に生きよう			

※「対応表」欄は、『神の救いの歴史』（日本基督改革派教会教育委員会発行、1999年）の該当する単元を示しています。

も く じ

2006年7・8・9月カリキュラム

まえがき	市川康則	4
巻頭説教	風間義信	5
日曜学校・教会学校訪問		
尾張旭教会日曜学校	尾張旭教会日曜学校教師会	7
教師会の学びのために	望月 信	9
教師の声	弓矢容子	13
副読本のご案内		16
自由献金のお願		18

聖書研究・説教展開例・分級展開例

7月 2日	20
7月 9日	27
7月16日	34
7月23日	41
7月30日	48
8月 6日	55
8月13日	62
8月20日	70
8月27日	77
9月 3日	84
9月10日	91
9月17日	98
9月24日	105
成人科	石丸 新 110

いのちのパン (こども聖書日課)	119
------------------	-----

2006年10・11・12月カリキュラム	133
2006年度年間カリキュラム	134
執筆者よりひとこと・あとがき	136

# まえがき

市川康則（神戸改革派神学校教授）

教会の今日・明日を担うのが青少年ですが、今日多くの教会で、若い人々の信仰の養成が大変困難です。青少年の特徴を真摯に受けとめ、それらに適合した伝道と教育が求められているのでしよう。

## 1. 人生の基礎作り—不安定性と柔軟性の中で

青少年期は、人生の基礎作りの段階です。したがって、豊かな人生経験に培われた自身の「哲学」がまだ確立しておらず、自分の判断や決定に不安定要素が多くあります。しかし、これは積極的に見るなら、思考や発想が柔軟で、伝統に捕らわれないということです。考え方や意見に相違があり、物事の解釈や判断などに多様性をもたらします。そこに、教会の今後の改革・刷新の可能性があります。特定の世代の人々の価値観と決定が恒久的に教会を支配すれば、教会は必ず閉塞状態に陥り、伝道は教会内外の状況に適合できなくなるでしょう。但し、思考の柔軟性や発想の自由さは、それだけでは文字どおり「可能性」に終わり、現実とはならないこともあり得ます。だからこそ、今から訓練を積んでおかなければなりません。

## 2. 未来志向—“ヴィジョン”を持つ

人生の基礎作りとは、人生の準備段階ということです。青少年期は、教会形成への責任ある参与という点から見ると、相対的には、その準備段階と言えるでしょう。この時期は、人生がこれから本格的に始まることを意識し、将来に備えることを自覚するという段階で、「未来志向」を特徴としています。それゆえ、若い人たちは自分自身の、教会の、社会の、世界の未来を夢見、幻を抱き、それらについて大いに語り論じ合うことができるし、またそのように奨励されなければなりません。未来志向は目的意識

と結び付きます。若者は将来の前進と飛躍を目指して、何事をするにも目的意識を持つことが大切です。これを広く言えば、人生に、信仰生活に、職業等々に「ヴィジョン」を持つということになります。どんな思想も行動も、その目的（ないし予想される結果）との関連でこそ、意味や価値が生じます。

## 3. チャレンジ精神—試行錯誤の中で

将来への準備段階にある者は、まだ基礎が固まっておらず、当然、様々な不安定要素があります。それゆえ、若者は転んでは起き、失敗しては教訓を学び、これを繰り返しつつ前進していかなければなりません。彼らは試行錯誤を繰り返して成長するのです。失敗することを、大人も若者自身も恐れてはいけません。自分はチャレンジャーであるという姿勢が、失敗や誤りを将来に向けて積極化できる秘訣です。大人は若者を信仰の“優等生”にしようとしてはなりません。また、若者はそんな強迫観念に捕らわれる必要はありません。挑戦者は負けてもいいのです。失敗や挫折の経験は、私たちが“一皮むける”のに大切な役割を果たします。

## 4. 批判精神

青少年期の特徴の一つに批判精神があります。若者の感覚にはしばしば、大人の発想や言動が、また既成の習慣や価値観が不合理なものと思われることがあります。そこから様々な批判が出てきます。しかし、その批判の中には、長い目で見て、若者たちが合理的と思う習慣や制度が将来でき上がることに通じる要素もあります。既存体制に対する若者の批判は、未来指向のものなのです。このような問題意識と批判精神は教会の伝道と教育にとって必要です。

（西部中会、神学教師）

## 「最も小さい者として」

—ルカによる福音書22章24～30節による説教—

風間義信（江古田教会牧師）

また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。そこで、イエスは言われた。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。だから、わたしの父がわたしに支配権をゆだねてくださったように、わたしもあなたがたにそれをゆだねる。あなたがたは、わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いと共にし、王座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる。」

（ルカによる福音書22章24～30節）

教会学校（日曜学校）で教師たちが子どもたちに語る一つのテーマは、イエス・キリストの御生涯です。特に十字架の受難と復活については毎年必ず語られるものです。今年も3月から4月にかけて各教会においてしっかりと学ばれたことでしょう。

受難の出来事を振り返って見ますと、祭司長や律法学者たちの策略が着々と進められている中、キリストは過越の食事によって「主の晩餐」を定められました。十字架を前にして、後に教会が聖餐式として守ることになる厳かな出来事が行なわれるという極めて緊迫した状況がここにあります。

ところが、その時に何と使徒たちは「自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか」ということを議論し始めたというのです。果たしてこの場面を目の当たりにして、キリストの思いはどのようなものだったのでしょうか。そもそもこの議論は9章46節以下にもあり、「あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者で

ある。」(48節)と教えられていました。そこもまたキリストがご自分の死について語られた後の場面です。ましてや今回のところでは一緒に手を食卓に置いている者が裏切ると言われ、身分たちのうちだれがそのようなことをしようとしているのか議論していました。ところが、まるでそれを飲み込むかのようにこの話題になってしまったのです。

いったいだれがいちばん偉いのだろうか、この思いは使徒たちの中にたびたび持ち上がり、まるで十字架と隣り合わせのように位置付けられています。その意味はまことに大きなものではないでしょうか。

キリストご自身がすべてを犠牲にくださったことを、たちまち自分たちの偉さというもの飲み込んでしまう、それは決して弟子たちだけの問題ではなく、私たちも深く問われるものです。

今年も受難週を過ごし、多くの教会では月毎に聖餐式を守ってきたことでしょう。十字架の

恵みをたっぷりいただいているはずですが、それにふさわしくお応えできているかと問われるならば、とても胸を張れるものではありません。むしろ、いったい何と愚かなことを考えているのか、この場から出て行けといわれても仕方ありません。

けれども、キリストはあきらめることなく、語り続けてくださっているところに深い慰めを見出します。しかもこのような中であっても、「あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。」(28節)のように弟子たちのことを御覧になっています。そのように見られている弟子たちだからこそ、キリストはあなたがたの中で給仕する者、仕える者であると語られているのです。

そもそも25節のように「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。」と言われていることは、世の中においては当然のことではないでしょうか。これでどこがいけないのかと言われそうです。使徒たちが「だれが一番偉いだろうか」と議論していた根底にも同じ思いがあったことでしょう。

しかし、キリストは「あなたがたはそれではいけない。」と大きな転換を求めておられます。それは使徒たちに「わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いを共にし、王座に座ってイスラエルの十二部族を治める」(30節)という祝福、つまり、まことの偉い者、上に立つ人、食事の席に着く人になって欲しいからです。こうしてせつかくキリストがその道を開いてくださっているのに、それを踏みにじってしまうのが「自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか」との思いなのです。

子どもたちへの思いを削いでしまうものとして、「あれだけ教えてきたのに」というものがあります。「あれだけ教えても理解できない」

のであるならば、先ず反省すべきは生徒ではなく教師の側です。本来、私たちが神に造られ、仕える存在であることを忘れ、まるで神に成り代わっているかのように偉さを誇ってしまうところに大きな落とし穴があります。

すべての偉大な指導者はよき従者であると言われますように、私たちが神との関係の中で訓練されていきますと、今度はその私たちが神によって立てられた者として、そこに後に続く子どもたちに良い指導が可能となるのではないのでしょうか。

子どもたちに教える者であればあるほど、神との関係をしっかりと深めていく、その人格全体から福音が伝わっていくのでしょうか。でもこのように教育しなければ、こうなって欲しいと強く願うあまり、自分の偉さに頼ろうとする誘惑が襲ってきます。

それは知らず知らずに神に造られた人間の自分を忘れてしまっているからかもしれません。人間の不幸は、私が主役になってしまうことです。主役と主役が並び立てば、当然そこに争いが生じます。神を忘れて自分がいちばん偉い、この神との関係のねじれたものが、十字架をも横に押しやってしまうのです。

この十字架を前にして、キリストはヨハネによる福音書13章で、使徒たちの足を洗われるという仕える姿を、身をもって示してくださいました。語られるだけでなく、そこまで徹底して仕えられ、その極みとして十字架に付けられたのです。

キリストに仕え、御言葉に仕え、教会(教会学校)と子どもたちに仕えていく、そこに教会学校教師としての大きな喜びがあります。もし、子どもたちや親たちに仕えられることに慣れてしまって仕える姿勢が崩れていく時、十字架の恵みを飲み込んでしまうほどの「だれがいちばん偉いだろうか」との思いが出てくるのではないのでしょうか。

## 尾張旭教会日曜学校の紹介

尾張旭教会日曜学校教師会

### はじめに

当教会は1980年11月に林豊彦先生が開拓伝道を開始され、1981年4月から中会の伝道所として承認されました。中部中会と米国CRCミッションとの協力によって伝道がなされました。当教会は中部中会内では、比較的歴史の浅い教会です。日曜学校は、1994年から2000年まで朝の礼拝と同じ時間帯に行っていました。当教会の特別な事情によります。2001年より大西敏雄牧師が赴任したのをきっかけに、小原清子姉を校長に選出して、9時30分から開始し、本来の体制に戻しました。日曜学校出席者は現在教会関係者の子どもだけです。そのうち近所の子はただ一人だけで、他の子は遠くから車で通ってきています。

### 1. 礼拝前の祈禱会

朝9時20分より教師たちが集まって、その日の聖書の箇所や連絡事項など簡単に確認してから祈禱会をしています。

### 2. 礼拝

朝9時30分より礼拝が始まります。教師は6名で、順番にお話と司会をしています。

- ①お話 お話の内容を短くわかりやすく伝えるのが大きな課題です。毎月1回、世界



礼拝風景

に1つしかない紙芝居と銘打って、手作り紙芝居(クイズ入り)を子どもたちとともに楽しんでいます。

- ②賛美 毎月、今月の讃美歌を決めてレパートリーが増えるようにしています。時々手話をしながら賛美することもあります。
- ③暗唱聖句 礼拝の最後にみなで暗唱聖句を練習しています。聖句は毎週新しいものを覚えるのではなく、ひと月かふた月に一つというように子どもたちも教師も確実に覚えることを目標にしています。
- ④皆勤賞 毎月第1主日に、前の月の礼拝出席が4回以上の子どもたちに小さな賞状を渡しています。

### 3. 分級

礼拝が終わった後、集会室で分級が持たれます。子どもの人数が少ないので、一つのクラスだけです。今は聖書物語の絵本を順番に読んでいます。



クリちゃんを  
囲んで

### 4. 年間行事

- ①進級式 子どもたちに小さなプレゼントを渡してから、大西先生に特別にお祈りしてもらいます。

②イースター 毎年、ゆで卵にシールを貼って楽しんでいます。

③ピクニック 春に教会と合同で、近くの公園に行きます。

④クリスマス 朝の礼拝ではビデオを見たり、パネルシアターをしたりします。また、祝会は大人と合同でしています。子どもたちと賛美や暗唱聖句を披露します。

⑤お正月 年賀状を子どもたちに出します。

⑥誕生会 毎月第1主日に、その月に誕生日のある子どもたちに、教師たちが寄せ書きしたカードをプレゼントします。



押し寿司づくり

## 5. あそぼう会

これは、日曜学校への関心を深め、また子どもどうしや教師との交わりを目的としています。不定期に企画します。

今まで企画したことは 染め紙、泥だんご、工作、スライム作り、マーブリング、ヨーヨー風車、紙飛行機、しゃぼん玉、お菓子や食事作り（豆腐団子、チーズケーキ、お好み焼き、サワー寿司、焼きそば、おにぎり、サンドウィッチ



夏休みの遊ぼう会



かるたとり

ち、カレーライスなど)、教会に1泊お泊まり会、コンサートなどです。

## 6. 教師会

毎月第4主日に持っています。今月の讃美歌や暗唱聖句など決めてから、子どもの様子や行事の計画などを話し合います。

## 7. 子育て講座 4回シリーズ

日曜学校に子どもたちが出席するには、親の協力が必要です。そこで親にアピールするための講座を、月1回ずつ、土曜日の午前にもちました。

各テーマは、

- ①まず、自分を好きになろう。
- ②子どもと話そう。
- ③思春期に思う。
- ④思春期に向き合う。

今後も不定期に持ちたいと思っています。これをきっかけに1家族（母子）が礼拝に出席するようになりました。



クリスマスに



## 礼拝共同体としての日曜学校

望月 信（『教会学校教案誌』編集委員）

今回から三回にわたって、「本誌の基本方針～教会（日曜）学校像について～」（相馬伸郎編集長執筆、2006年2月発行の第21号に掲載）を展開するかたちで、教師会の学びのための材料を提供することになりました。教案誌の編集部に属する者たちが交代で執筆する予定です。どれほどのことができるのか、いささか心もとないのですが、皆さんの益となれば幸いです。

本教案誌の発行は2001年に始まりましたが、「本誌の基本方針」という文章を最初に掲げたのは、2002年12月発行の第8号においてでした。創刊からしますとおおよそ二年も遅れるのですが、その間、基本方針が定まっていなかったというわけではありません。基本方針とは教案誌としての方針ということにとどまらず、どのような日曜学校像を考えているのか、ということです。日曜学校像によって教案誌としての性格も決まるからです。この点で、私たちは当初から、「子どもの礼拝共同体」という日曜学校像を掲げて参りました。今回は、この「子どもの礼拝共同体」ということについて、考えて参りましょう。

### 1. 「教会」とは何か

このことを考えるには、子どものことばかりではなく、基本に立ち帰って、「教会とは何か」ということを考えることが大切です。

聖書はいろいろな表現で教会について言い表していますが、その一つに「祈りの家」（イザヤ56:7、マタイ21:13）という言葉があります。教会とは神の民の祈りの家なのであり、もちろん「家」と申しましても建物ではありません、礼拝する共同体です。教会に召し集められてい

る私たちは神の民なのであって、礼拝し祈りをささげるために集められています。改革派教会の20周年記念宣言は、「教会の生命は、礼拝にある」と告白しています。これも、教会が礼拝共同体であるからにはかなりません。

教会は、もちろん、神の御言葉によって建てられますから、御言葉（神の真理＝教理）を教え、学ぶ場所として整えられなければなりません。「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい」（申命記6:6－7）。「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」（マタイ28:19－20）。御言葉がこのように命じるとおり、教会は古くより御言葉の学舎（まなびや）として考えられてきました。

しかし、御言葉の学び、信仰の学びは、学ぶことにとどまるものではありません。「すべての民をわたしの弟子にしなさい」とあるとおり、神を礼拝する共同体を形成することを目指します。御言葉の学びは、御言葉に聴き従う民を生み出すことへと向かいます。主を畏れて礼拝をささげる民の形成を目的とします。「民を、男も女も子供も、町のうちに寄留する者も集めなさい。彼らが聞いて学び、あなたたちの神、主を畏れ、この律法の言葉をすべて忠実に守るためであり、これをまだ知らない彼らの子供たちも聞いて学び、あなたたちがヨルダン川を渡り、入って行って得る土地で、彼らも生きている限り、あなたたちの神、主を畏れるようにな

るためである」(申命記31:12-13)。こうして、御言葉の学び、信仰の学びは、主を畏れて礼拝することを目指す営みにほかなりません。この目的である礼拝の営みを中心にしてこそ、学びは実を結ぶものとなるでしょう。いや、むしろ礼拝の息吹に触れるところでこそ、学びに命が吹き込まれるのです。ですから、教会は「祈りの家」なのです。教会の教育の営みは、祈ること、礼拝することをともなうのであり、またそこに目的があります。

日本キリスト改革派教会に属する者として、教会(日曜)学校について考えるときに確認すべきは、教会規程の礼拝指針でしょう。礼拝指針の第四章が「教会学校」という章であり、第二十八条と第二十九条により教会学校が定義されています。

#### 「第二十八条(教会学校の目的)

教会学校とは、教会の教育事業が主として行われる組織をいう。それには、日曜学校・週日学校・休暇中の聖書学校・その他がある。その目的は、キリスト者の成長と完成であって、……(後略)

#### 第二十九条(教会学校の対象)

教会学校は、その目的に従って、契約の子らを訓育し、成人会員を教え、さらに未信者と未信者の子らに教育的伝道を行うものである。」

長くなりますので、一部を引用するにとどめました。これに示されましたように、「教会学校」とは教会の教育的働きが行われる組織の全体を指す名称です。ですから、確認すべきことは、「教会学校」という名称が用いられていても、これは決して独立したものではないということです。教会の教育的働きをあらわす名称なのです。ですから、「教会学校」を教会の生命的な営みである礼拝から切り離された、何か独立した「学校」のようにイメージすることはできません。

詳しく触れることはできませんが、「日曜学校」という営み、名称は、ロバート・レイクスに始まるイギリスの日曜学校運動に由来しており、もともと教会の手を離れた、福祉的な傾向の強いものでした。アメリカで、この日曜学校運動は超教派運動として進展しました。日本においても、教会を場としながらも教会全体の働きとなるのではなく、子どもの伝道に熱心な一部信徒によって担われることが多かったようです。内容的にも、徳育的な傾向が強いものでした(相馬伸郎、「日曜学校の歴史と日曜学校像」を参照、本誌第18号に掲載)。

礼拝指針が「教会学校」という名称を用いる背景には、一つには、そのような相対的に独立していた日曜学校の営みを教会の働きとして位置づけようとするねらいがあると思われます。日曜学校だけでなく、教会全体に教育的な働きがあるのであり、教会全体で教育という課題に取り組むのです。礼拝指針は、第31条で小会が教会学校を監督することを規定しています。小会が校長を選任するのであり、教会学校教師も小会が任命するのです。これも、教会学校の営みを教会全体のものとするためです。

こうして、「教会学校」という名称が冠せられているからといって、「学校」ではありません。教会の教育的な働きが行われる場なのであって、教会が礼拝共同体であることはいささかも揺るぎません。教会とは礼拝共同体であり、御言葉の真理を学び、主を畏れ、賛美と祈りをささげて生きる信仰者の群れなのです。

## 2. 子どもの礼拝共同体として

礼拝指針は、先に紹介しましたように、「教会学校」という名称で教会全体の教育的営みを包括し、日曜日に行われる子どもを対象とした教育活動を「日曜学校」と呼んでいます。今日、この狭義の「日曜学校」を意味して「教会学校」と呼ばれることも多いのですが、ここでは「日曜学校」の名称を用いて進めます。

私たちの思い描いて参りました日曜学校像は「子どもの礼拝共同体」にあります。「子どもの礼拝共同体」という表現は、誤解を招くかもしれません。日曜学校を「子どもの教会」と呼ぶ教会もありますが、これも同様に、誤解を招きやすい表現でしょう。教会は神の民、契約の民であり、おとな子どもも含まれます。その意味では、「おとなの……」「子どもの……」という区別はできない、してはならないと言うべきでしょう。しかし、これらの言葉には、おとなだけではない、子どもにとっても教会とは礼拝共同体であるという意味が込められています。日曜学校は、この意味で、子どもの教会であり、子どもの礼拝共同体なのです。

こう考えて参りますと、日曜学校の礼拝を礼拝としてどのように整え、聖別してささげているのか、このことが問われることになります。ここに、本誌の日曜学校理解の特徴の一つがあります。日曜学校の中心は礼拝であるということです。これは、すでに述べました教会理解の必然的な結論なのです。

さて、本質的に礼拝は神の民、信仰者の営みです。神の招きと恵みの御業が明らかにされ、信仰による応答がささげられて、礼拝が成り立ちます。そのために、まず必要とされるのは、信仰者たちの存在です。それは、日曜学校の場合、日曜学校教師です。信仰者である日曜学校教師が神を礼拝する共同体を形成し、そこに子どもたちが迎え入れられて、子どもたちの礼拝共同体が成立します。子どもたちが招き入れられるのですから、もちろん、彼らに届く式次第（プログラム）と言葉（説教）を整えて、ささげられます。礼典（洗礼と聖餐）こそ行われませんが、神の御言葉が語られ、賛美と祈りの応答がささげられて、主イエス・キリストが鮮やかに臨在して下さいます。いや、子どもの礼拝も、洗礼と聖餐を目指しているということにおいては同じです。日曜学校の目的は、主イエ

ス・キリストを信じて洗礼を受け、聖餐の食卓に共にあずかることにあります。そこに、主を畏れて礼拝する信仰者の生があるのです。

ですから、私たちの常なる課題は礼拝を主イエス・キリストの臨在の場として整えることです。礼拝の説教者はもちろん、日曜学校教師は礼拝のために祈り備えて集うことが求められます。そのために、日曜学校教師会の形成が大切な課題となります。祈り合う共同体の形成です。教師会の形成については、別の機会に取り上げられることと思います。また、日曜学校の礼拝を日曜学校教師だけにおまかせにするのではなく、教師でない教会員の方々も積極的に出席して下さることが望まれます。とくに、教会学校を監督する務めを負う小会のメンバー、牧師はもちろんのこと長老もぜひとも出席すべきです。そのような信仰者の礼拝の姿によって導かれ支えられて、子どもたちが主を畏れる信仰の姿勢を学び、身に着けていくのです。

一つ難しいことは、契約の子の多くは、日曜学校だけでなく、その後に行われる主日礼拝にも出席するということです。また、日曜学校の目的が洗礼を受け、聖餐の食卓にあずかることにあると申しましたが、それも現実には、主日礼拝に出席しなければ果たせません。

主日礼拝は「共同礼拝」と呼ばれるように、契約の民の中心、まさに教会の生命と言うべき礼拝です。改革派教会は、伝統的に、この共同礼拝に子どもたちも出席するようにと求めてきました。家族みなでこの共同礼拝に出席するのです。これは、礼拝が神の民の行為であるという私たちの信仰理解に基づくならば、当然のことです。二回の礼拝に出席するとは、子どもに余分な負担を強いていると考えるのではなく、それだけ恵みも多く与えられると考えるべきでしょう。しかし、判断の難しいところです。いずれにせよ、共同礼拝として子どもの出席を求めるのですから、子どもを迎え入れるための配

慮が必要とされます。

教会において、このように共同礼拝のみならず、対象が特定された礼拝がささげられることは、実のところ、たいへん大切なことです。普遍と特殊は決して対立しないことを心に留めましょう。神の民としての一致と平和をあらわす共同礼拝がささげられ、また、対象を特定した、たとえば子どもの礼拝がささげられ、あるいは青年を中心にした礼拝、高齢者のための礼拝というものも考えられるでしょう。年齢別ばかりでなく、早天礼拝（イースターなど）や週日の礼拝（水曜礼拝など）がささげられている教会もあります。それらは礼拝の多様なのです。教会の事情に応じたさまざまな礼拝の可能性があるのでないでしょうか。

### 3. 礼拝と分級

日曜学校の働きを子どもの礼拝共同体の形成という視点で位置づけますと、必然的に、日曜学校の働きの中心は礼拝にあるということになります。「教会の生命は、礼拝にある」（20周年宣言）の言葉をそのまま日曜学校に当てはめることができるのです。まさに礼拝によって、信仰者としての命の息吹を養われるのです。

しかし、そのことは、分級の意義をいささかでも減じるものではありません。むしろ分級の意味、目的が明確になるものと信じます。分級とは、いわゆる「学校」のようにして、掲げられている主題を教え、覚え込ませるという場ではありません。もちろん、学びの要素もありますが、中心は、礼拝で与えられた御言葉の恵みを分かち合い、共に祈ることです。本誌は、分

級の目標を「共に祈る」こととしています。これは、牧会のイメージであり、子どもと向き合う姿勢です。

子どもにとりまして、礼拝は多少なりとも窮屈な思いがして、分級を待ち望むということになりがちです。その本質として聞くことが中心にならざるを得ない礼拝より、自らが発言し活動的であることができる分級のほうが好ましいということは、だれもがよく分かることです。だからこそ、分級の時間は、子どもに対して教えることよりも、子どもから聞く、子どもの声に耳を傾けることを大切にしたいほうがよいでしょう。分級で、分級の教師からもう一度説教を聞くということにならないよう、配慮したいものです。そのような分級に、工作などの楽しい要素が加わったなら、子どもたちにとって分級はますます楽しいものとなるでしょう。

ですから、分級は、準備したものをすべてやり終えたかどうかで善し悪しが判断されるものではありません。本誌においても、日曜学校教師の方々の執筆によって、たいへん豊かな分級展開例が提供されています。しかし、これのすべてをそのまま行うことは、考えないほうがよいでしょう。子どもたちとの対話のヒントを得て、祈り備えることを大切にしましょう。

礼拝と分級について、詳しくは、また次回の学びに譲りたいと思います。皆さんの日曜学校のお働きの上に、主よりの豊かな祝福があるようお祈り申し上げます。「子どもたちを主の御前に」と祈り励んで参りましょう。

（高蔵寺教会牧師、中部中会教育委員）

## 名古屋岩の上传道所日曜学校 5・6年女子クラス

弓矢容子（名古屋岩の上传道所日曜学校教師）

現在、このクラスは、教師2名（志水姉と私）、在籍生徒13名（5年生10名／6年生3名……教会員のお孫さん一人を除いて、全て地域からの子どもたち）で、毎週5年生の子ども達が、平均して5～7名、多いときは9名、主の日の朝教会へ集まり、礼拝を捧げています。内3名は自転車、6名は教師の送迎の車で10分ほどかけて、集まります。

先日、受難週の主の日の分級の折、上級科分級展開例（教案誌第21号 4/9「葬られるキリスト」……時間の都合と、もろもろの恐れ(!?)があり、工作は出来ませんでした）にならって、死んだらどうなるか、少し踏み込んで裁きのこと、罪のこと、そしてその罪を担って身代わりに死んでくださったイエスさまのこと、イエスさまの死は誰のためだったのか、を問うたり、話したりしました。最後に、今日はイエスさまに手紙を書いてみようとするめました。手紙を書けるかどうか半信半疑でしたが、礼拝式において聖霊が働かれ、必ず一人一人に何か響いていることを信じて、教師も一緒に手紙を書きました。

一人の子どもは、お話を聞いている回数も少ないため、書けませんでした。「今言葉にできなくても、神さまは〇〇ちゃんのこと全部知っていてくださるからね。」と伝えました。他の子どもたちは、とても一生懸命書いていて、想像をはるかに超えた子どもたちの信仰の言葉を目にすることになりました。次のページに紹介させていただきます。

それぞれに、自分の言葉でイエスさまに応答出来、その言葉が本当に正直で、心からの喜びをもって書かれていて、心打たれました。确实

に、この子どもたちに御言葉の種がまかれ、生きていること、素直な心に、御言葉がどんどん吸収されていること、何よりイエスさまご自身が子どもたちに出会って下さり、生きて働かれていることを目の当たりにして、本当に嬉しく力づけられました。

このクラスは、3年生の初めの時は、ほとんど生徒一人の分級でした。たまに、2人か3人で、4月から2ヶ月半ほどこの状況が続いたのではないかと思います。今でもはっきりと、このたったひとりの子どもと一緒に、この分級のクラスに新しいお友達が与えられるようにお祈りしたことを覚えています。（小さな声で、アーメンと唱えてくれたこの子どもは、今家庭の事情もあり、日曜学校から離れています。とても寂しく思いますが、後に集められた子どもたちと共に祈っています。）

そして、本当に、続々と子どもたちが集められました。まず、朝の祈り会に集まる姉妹たちの奉仕（教会から一番近い小学校で、下校中の子どもたちにチラシ配布）によって、この小学校から3名。2004年サマーキャンプ、クリスマス、2005年サマーキャンプを通して6～7名が集められました。（この中の中核となった、キャンプにお友達を誘った子どもは、ビル時代からお姉さんたちと一緒にキャンプに参加していました）

「子どもたちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。」との御言葉は、様々な状況の中で、具体的なこととして私に響いてきます。そしてそこに一歩踏み出すとき、神様の御業を仰ぎ見ることになります。あまりの神様の御力に、本当に畏れを抱きます。もっと多

くの子どもたちを……と思う反面、こんなにたくさんの尊いのちをあずけられて、私は、本当に真実にこの子どもたちと向かい合っているのか、お世話できるのか、本当に怖じ気づきました。しばしば、弱さに負けそうになりますが、ただ主イエス・キリストの恵みによって守られ、教会の祈りに支えられ励まされて、教師の兄姉と共にこの奉仕を捧げる幸いに与っています。準備が整わないまま（霊的にも、具体的な準備も）、主の日の朝を迎えることもありますが、心がけていることは、礼拝式を子どもたちと真実に捧げること、そこで私自身もイエスさまと出会うこと、子どもたちのために執り成し祈ること、イエスさまを紹介し続けることです。そして、イエスさまご自身がこの子どもたちを養い続けていて下さることを信じて委ね、祈りつつ出来る限りのことを子どもたちにしていくことです。（イエスさまが子どもたちを愛していることを伝えること……週報を届けたり、手紙を書いたり、訪問したり、いつもは見れない子どもの素顔や、ご父兄にも会うことが出来たりして（ちょっとドキドキです）楽しい

です。）

暑い日も寒い日も、時には雪の日も、子どもたち同士で励まし合って、神様の招きの声に応じて教会に来る子どもたち、課題もありますが、必ず、主が洗礼へと導いてくださると信じてこれからも祈り、クラスの先生、教師方と共に、また教会の兄弟姉妹と共に、この与えられた光栄な奉仕を、神様の御前に忠実に捧げていけるよう願っています。

追記

課題のひとつは、初詣。今年の新年は、皆初詣に行ってお参りしてしまったと、正直に話してくれて、とてもショックを受けました。けれども、岩の上教会の日曜学校の地域の子どもの初穂の様な、Aちゃん（今年高校1年生）が数年前から、自分の意志で初詣には行かず、1/1の日曜学校にもひとりりで来ました。5・6年女子クラスも後に続けるように、この愛する子どもたちに、ひとりひとりふさわしい成長が今年も与えられるようにお祈りしています。

### ●十 イエス様へ十●

イエスさまは、私たちが人間としてのちがいに、びくびくに  
つづられて死んでしまふ。私たちが死ぬに死んでしまふ、た  
かんで本当にありかたじけなく、いままで私たちが知らず  
かり死ぬのびくびくをいかにしてできないと思  
います。私はイエス様のことを本当にすばらしいおぼ  
かと思、いままで私たちが知らず、いままで  
ていてください。本当に私はイエス様  
感してしています。 五三より。  
本当にありがとうございます。

イエスさまへ

十しかにつけられ、またのふっかつさ  
れて、まごいせいと思いました!! イエス  
さまは、私たちのために十しかりについてく  
ださって私たちを守ってくれたこと  
を本当にかんしゃしています。ありが  
とうございませう!! いつも私たちを愛  
して守ってくださり本当にありがとうござい  
ます。この花からも私たちをみまもていてく  
ださい!!

ひかりヨリ

イエスさま

わたしたちのつみをすべてゆるしてください

ありがとうございます

今年、5年生になつて、仲のいい友達といっしょに歩いた。

ほんとうにうれしかったです

5年生では、勉強もむずかしくなると思うので、

とてもがんばっています。

でも、がんばらなくていい

みまもってください

丹羽 舞子

イエスさまへ

お元気ですか? 私はすごく元気がない  
おはれの中はどんな気持ちでしたか? 今  
私は死んだ気がするのは、おわりません  
私達の祈りに十字架にたがひ、死んで  
くたさって、ありがとうございます。  
そのお祈りで私達も生きていられると  
思うとすごくうれしいです  
イエスさまのお名前! にあつてアメン。  
みづまヨリ

イエスさま

わたしたちのためにじゅうじかにかが、

てくださいありがとうございます

今、こうして教会にこれるのもイエス

さまのおかげです。これから私たち

をみまもっていてください。よろい

おねがひします。 風野の

# 副読本発行のお知らせ

## 『主は羊飼いい—中高生のための教理入門—』

価 格 500円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集委員・神戸改革派神学校講師)

日本キリスト改革派教会は、契約の子たちへの信仰継承教育に心血を注いでいる教会です。ところが、日曜学校での楽しい教会生活を経て、中高生の時期に、自覚的で明瞭な信仰を告白を、と願いつつ、日曜学校教師はもとより、牧師たちも頭を悩ませつつも、真剣に告白準備のための学びのプログラムを整え、提供しています。

しかしながら、現実には、既成のテキストで、「これは使える！」というものがなかなか見当たらないのが実情です。ウエストミンスター小教理問答の解説を試みるか、牧師のオリジナルなテキストを作成して用いるか、果ては他教派のものをアレンジしながら用いるということが多いかと思えます。

このような現実の中で、ついに！ 中部中会教育委員会『教会学校教案誌』の副読本として、中高生の信仰告白準備のためのテキスト、『主は羊飼いい—中高生のための教理入門—』を刊行することと致しました。

すでに、副読本の『子どもカテキズム』は、2300部が子ども達、教師たちの手元に届けられています。この『主は羊飼いい—中高生のための教理入門—』も中高生、教師たちの手に広く行き渡るなら、必ずや、よき実りを与えられるものと確信いたしております。

廉価に抑えております。子ども達のお小遣いで購入できます。しかし、教会としてお買い求めいただき、契約の子らをはじめ地域の中高生にも、プレゼントできれば、なお、素晴らしいのではないのでしょうか。

著者の木下裕也牧師は、本誌編集委員であるばかりか、「創刊」の中心人物です。前任地の豊明教会での実践のなかから、日本キリスト改革派教会としての「教案誌」の必要性を深く認識され、しかもつぶやいているだけでなく、実際に、同志たちとともに、今日まで執筆、編集、刊行の中心で奉仕しておられます。現在、神戸改革派神学校講師でもあり、日本教会史を講じておられます。煮詰まった編集会議では、必ず、笑いのネタを提供して、場をなごませて下さる楽しい先生です。

教会学校教案誌編集部 (相馬伸郎)



目 次

第一部 人生の目的 ..... 1

一 人生の目的 ..... 3

1 人生の目的——神礼拝 ..... 4

2 主は羊飼い ..... 7

二 聖書 ..... 11

3 聖書 (1) —— 聖書が必要な理由 ..... 12

4 聖書 (2) —— 神のみ言葉 ..... 15

5 御言葉はわが道の光 ..... 18

第二部 信仰の道 ..... 21

一 神 ..... 23

6 神 (1) —— 神とはどのような方か ..... 24

7 神 (2) —— 三位一体 ..... 27

8 近くいます神 ..... 30

二 神のみわざ ..... 33

9 鑑定——永遠の計画 ..... 34

10 予定——恵みによる選び ..... 37

11 創造——よきみわざ ..... 40

12 摂理——み父の配慮 ..... 43

三 人間 ..... 47

13 人間——創造の冠 ..... 48

14 罪——通り主からの離反 ..... 51

15 パウロの叫び ..... 54

四 救い主イエス・キリスト ..... 57

16 恵みの契約——神の誠実 ..... 58

17 イエス・キリスト (1) —— そのご人格 ..... 61

18 イエス・キリスト (2) —— へりくだりの主 ..... 64

19 イエス・キリスト (3) —— 栄光の主 ..... 67

五 信じる者の祝福 ..... 71

20 信じる者の祝福 (1) —— 救とされること ..... 72

21 神の義 ..... 75

22 信じる者の祝福 (2) —— 子とされること ..... 78

23 父の愛 ..... 81

24 信じる者の祝福 (3) —— 聖とされること ..... 84

25 苦しみの意味 ..... 87

26 キリストにある死——聖化の完成 ..... 90

27 復活——キリストの命を生きる ..... 93

第三部 生活の道 ..... 97

一 感謝に生きる ..... 99

28 悔い改めと信仰——神への方向転換 ..... 100

29 十戒——感謝の指標 ..... 103

30 第一戒——ほかに神があつてはならない ..... 106

31 第二戒——いかなる像も造つてはならない ..... 109

32 第三戒——主の名をみだりに唱えてはならない ..... 112

33 第四戒——安息日を聖別せよ ..... 115

34 第五戒——父母を敬え ..... 118

35 第六戒——殺してはならない ..... 121

36 第七戒——姦淫してはならない ..... 124

① 人生の目的——神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に通い始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました「わたしはもう何年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした。と、

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのでは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名声を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名声を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きていくことができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなく私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

## 『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげめます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満5年となり、第22号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ50教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています（2006年4月中部中会第一回定期会にて自由募金願いを可決承認）。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・説教展開例・分級展開例

---

テキスト 創世記39章1～23節

**(1) ヨセフの苦難**

ヨセフはヤコブの12人の息子のうちの11番目の息子でした。彼はヤコブが年を取ってから、最愛の妻ラケルの長い不妊の後に生まれた最初の子であったために、父ヤコブから溺愛ともいえる大変な愛情を受け、それが10人の兄たちのねたみを買うこととなりました。

さらに彼の見たふたつの夢——畑の束の夢と、太陽と月と11個の星の夢が、やがて兄たちが自分にひれ伏すという内容であったため、兄たちはさらに憤って彼を殺そうとはかりますが、結局彼を通りすがりの商人に銀20枚で売り、彼は奴隷としてエジプトに連れていかれることとなりました。

エジプトに連れて来られたヨセフは、ファラオの侍従長ポティファルの家に買い取られますが、そこで主人の厚い信頼を得て、家の全財産を任せられるまでになります。

しかし、そこでもヨセフは試練にあいます。主人ポティファルの妻が彼を誘惑しようとし、彼はこれを退けますが、恥をかかされたポティファルの妻は逆に彼に無実の罪をきせて夫に訴えるのです。ポティファルは怒って彼を投獄し、ヨセフは以後の長い年月を囚人として過ごさなければならなかったのです。

**(2) 主がヨセフと共におられたので**

このようにヨセフがこうむった苦難は不当な、不合理なものでした。信仰を持って生きる者たちにも、ときにそうした不当な苦難がふりかかることがあります。たとえば義人ヨブの苦難もそうであったでしょう。

通常そのような苦難に遭遇したなら、人は神の

恵みを疑い、神をのろうのではないのでしょうか。けれどもヨセフはこの苦難を忍び通します。彼のこの姿勢は驚くべきものです。

なぜ彼はそうすることができたのでしょうか。それを解くかぎとなる言葉は「主がヨセフと共におられたので」という言葉です。この言葉は39章に繰り返し4度用いられています。これは39章のキー・ワードであるのみならず、ヨセフ物語の全体を貫く主題と言ってもよいと思います。

神はヨセフが兄たちに殺されそうになったときにも、奴隷として売り渡されたときにも、さらに獄中でも、彼と共におられました。決して彼を解放されたのではありませんでした。そのことを知っていたからこそ、ヨセフはいかなるときにも信仰による忍耐に生きることができたのです。そして主がヨセフと共におられたので、彼はこの後数々の試練にもかかわらず、エジプトの宰相にまでなるのです。

主が共におられる——インマヌエルの事實は、いついかなるときにも変わることはありません。いかに大きな苦難やわざわいのおりにも揺らぐことはありません。インマヌエルの祝福はイエス・キリストが世に来たりたもうたことによって、私たちのものとなりました。地上の人生の日々の中で、何が私たちが待ち受けているのか、私たちの歩みがどのようなものとなるのか、それを私たちはあらかじめ知ることはできません。けれども私たちのために死んでよみがえってくださったお方が共に歩んでくださること、世の終わりまで共にいてくださることだけは確かです。これにまさる慰め、励ましはないのです。(木下裕也)

テキスト 創世記39章1～23節  
 参照カテキズム 子どもカテキズム問34

### 〔単元のねらい〕

長大なヨセフの物語であるが、一回ずつ独立し完結したエピソードとして扱う。今回の主題は、「困難の中でも主が共にいることを覚えて誠実を求めることの大切さ」を伝えることをねらう。主なる対象を小学生と設定し、聖書の話をほとんど知らない子どもにもエピソードが理解できるようにすることをねらい、全体の最低限の設定を簡略化して伝えることとする。

## 「苦しくても忘れないこと」

### 〔導入〕ヨセフについての基本的な情報を知らせる

今日も聖書のお話を一緒に見て参りたいと思います。

今日のお話には、ヨセフさんという人が出て参ります。ヨセフさんという人は、今からずっとずっと昔に、カナンカナンの地にいた人です。ヨセフさんには、沢山の兄弟がおりました。お兄さんが十人、弟も一人いたんです。全部で何人か分かりますよね。十二人兄弟でした。他にも女の姉妹もいたんです。

ところが、ヨセフさんはお兄さんたちと仲が良くなかったんですね。お兄さんたちは、ヨセフさんのことが嫌いで嫌いで、とうとうある日、ヨセフさんを奴隷ヌレイに売ってしまったんです。今だったら、人間を売ってしまうなんてことは出来っこないのですけれど、昔は、人間を売ってしまうということがあったんです。売られてしまった人間は、もうお父さんとお母さんとも兄弟とも離れて、どこか違う国に連れていかれてしまうのです。ヨセフさんも遠いエジプトの国に売られてしまいました。売られて行って、ある家、ポティファルポティファルという人の家の召使メにされてしまったのです。

### 〔展開1〕不条理な苦難の中でも誠実を貫いたヨセフの姿を確かめる

奴隷になってしまってもヨセフさんは、まじめでした。自分が売られていったその家で、きちんとまじめに働きましたから、みんなヨセフさんの

ことを信じて、色々なことを頼むようになりました。

ところが、ヨセフさんの働いていた主人、ポティファルの奥さんが、ある日、悪いことを考えます。御主人が留守でいない間に、ヨセフさんと浮気して遊ぼうとしたんです。結婚しているのに他の男の人と遊ぶなんていうのは良くないことですね。ヨセフさんは、そんなことをするのは神様がお嫌いになることだと知っておりましたから、きっぱりと断りました。悪いことは、誰に言われてもきっぱりと断るのが、本当に勇気のある正しいことなんですね。ヨセフさんは本当に正しい人でした。

ところが、御主人ポティファルの奥さんは、正しいことをするヨセフさんを憎んで、嘘の告げ口をして、ヨセフさんを牢屋ラウに入れさせてしまうのです。ひどいですね。わたしだったら、「まじめにしても牢屋に入れられちゃうんだったら、まじめにするのはもう止めよう」とか思ってしまうかもしれません。

けれども、ヨセフさんはそうではありませんでした。奴隷に売られてもまじめだったヨセフさんは、牢屋に入れられてもまだまだまじめでした。あまりヨセフさんがまじめなので、牢屋の番人は牢屋の中のことを全部ヨセフさんに任せるようになったのです。本当にヨセフさんはどこにいても、どんなに苦しいときも、決して悪いことはせずに、まじめでいたんですね。

## 〈展開2〉ヨセフの誠実さの背景には神様が共に いて下さることの確信があること

どうしてそんなにまじめにしていたのでしょうか。たとえば皆さんが学校で、先生がいない間にまじめに勉強していたのに、遊んでいた人が嘘について怒られないでいて、逆にまじめに勉強していたあなたが怒られたら、まじめにするのが馬鹿らしくなってしまいますよね。

けれどもヨセフさんは、お兄さんに意地悪をされても、御主人の奥さんにだまされても、まじめにまじめに嘘をつかずに一生懸命自分の仕事をしておりました。

ヨセフさんがそんなにまじめで正直だったのには理由があります。それは、ヨセフさんがどこにいても、何をしていても、神様がヨセフさんとともにいて下さることを知っていたからなんです。奴隷として売られてしまって、大切な家族と別れ別れになってしまったとしても、御主人の奥さんに嘘をつかれて、悪いこともしていないのに牢屋に入れられてしまったとしても、それでも神様がヨセフさんと一緒にいて下さって、必ずヨセフさんのことを見ていて下さる。必ず助けてくださるのです。ヨセフさんはそのことを知っていました。だから、どんなに苦しいときでも、どんなに悲しいときでも、必ず神様が助けて下ると安心していました。

また、ヨセフさんが息けなくなったとき、嘘を

付きなくなったとき、人に意地悪をしたり、いじめたり、悪いことをしたくなったときに、やっぱり神様は、ヨセフさんのことを見ていてくださいました。だからヨセフさんは、がんばることが出来たんですね。

## 〈展開3〉神様は困難の中にあっても共にいて下 さることを知る

ヨセフさんのことを見ていて下さった神様は、みなさんのことも見ていて下さいます。私たちは、奴隷に売られてしまったり、牢屋に入れられてしまったりなんてことはありませんけれども、私たちが家にいるときも、学校にいるときも、どこかよそへでかけているときも、いつでもどこでも、神様は私たちとともにいて下さいます。そしていつでもどこでも私たちを応援して下さいます。勉強をしているときも、遊んでいるときも、神様は私たちと一緒にいます。もしかして私たちが悪いことをしそうになっているとき、人に意地悪をしそうなどき、嘘をつきそうなどき、けんかをしそうなどきも、神様は私たちのことを見ておられます。

ぜひそのことを忘れないで、苦しいとき、悲しいとき、イヤなことがあるときも、神様が応援していてくれることを思い出して下さい。

(長田詠喜)

---

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書28章20節

あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。

---

**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 6/25にお休みの子はいませんか？、どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようにお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 7/2の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……、教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

**〈分級では〉**

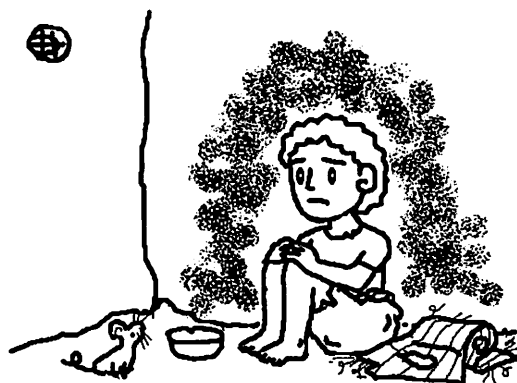
新しい幼稚科クラスが始まって、もう3ヶ月ですね。生徒のみなさん、ずいぶん成長したのではないですか??

幼稚クラスの生徒さんは変化が早く、一ヶ月も会わないと、まるで大人になってしまいます。是非、大切な神様が送ってくださっている子供たちの変化を細かく観察するようにしてください。また、その変化を声に出して喜んであげることを忘れないでください。大きくなったね……の一言でいいと思うのです。また、その子の成長を感謝していっしょに祈ってはどうか。誕生日などであれば、まさにそのタイミングで……。自分の成長を先生はとっても喜んでいてくれる。自分のことを注意して見てくれている。自分は大事に思われている。そんな経験の積み重ねが、後に語

られる神様による平和にもつながっていく大事なことだと思います。

**〈分級のねらい〉**

今週からヨセフさん・モーセさんのお話を始めます。脈々と流れる大きな神様の働きを学べる大変いい機会です。週ごとの単独のお話になるのではなく、前の週のお話と連続させながら進められるといいと思います。共通工作はそのつもりで連続して作業ができるようにしました。活用ください。

**〈祈り〉**

ヨセフさんにそうだったように、神様は私たちといつも一緒にいてくださる神様です。その神様に、いろいろなことを祈り、感謝することをわすれませぬように。

**〈共通工作〉**

**目的：**みんなで紙芝居を作ろう！

族長時代から出エジプトまでの一連のストーリーを約2ヶ月という長期にわたって読んでいきます。聖書ではモーセ五書を通読するようなかたちになるので、ストーリーが途切れ途切れになりやすいところでもありますが、今回はカナン到着までの一連のお話がいきなり読めるかたちに構成されているというメリットを生かして、創世記から申命記までのお話の流れと神様の約束の実現をこどもたちと一緒に理解していくことを目的とします。

**準備するもの：**紙、色鉛筆、くれよん（絵が描ける道具ならなんでもよい）

**作業手順：**その日のお話の終了後に一番印象に残ったところをそれぞれ絵に描いてもらう。描いた絵はとっておきます。工作のない週はぬりえ例としてだされている絵を拡大し、とっておきます。最後の“モーセの死”の単元が終わった時点で、描かれた絵とぬりえ例の絵をすべて集めて、並べると紙芝居ができあがります。最後にみんなで作った紙芝居を使って、お話をしてもよいでしょう。

## 〈子どもたちに伝えたいこと〉

ヨセフは神様がいっしょにいてくださることを知っていたので、どんな状況の中でも「まっすぐ」でいることができた。

## 〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

- ヨセフはお兄さんたちに売られてしまいました。ヨセフは自分のお兄さんたちにうらまれて、奴隷に売られてしまいました。ヨセフにもちよっといやなところはあったかもしれないけれど、お兄さんたちがそんなことをするなんて、ヨセフにはとても信じられないことだったでしょう。それでも、ヨセフはエジプトの役人の家でいっしょうけんめい働いて、ご主人にとっても大切にしてもらえました。ヨセフは、ひどい目にあったのにどうしていじけてしまったりせず、まじめに働くことができたのでしょうか。
- ※「家族」というのは子どもたちにとって無条件で安心できる存在です。その「家族」に売り飛ばされてしまったヨセフはとても大きな絶望の中にいたと思われます。しかし、この聖書箇所にはくりかえし「主が共におられた」ということが書かれています。なんでもできる神様がいっしょにいてくださることが、家族に売り飛ばされると言うこの世の中にはなにも信頼でき

るものが無いような状況の中でも、ヨセフをまっすぐに立たせてくださったということを語りましょう。

- ご主人の奥さんが、ヨセフのおぼえのないことでご主人にヨセフを悪く言い、ヨセフは牢屋に入れられてしまいました。でも、牢屋の中でもヨセフはまじめに働きました。
- ※くりかえし、主が共に居られるということが書かれています。主が共に居られることが大きな力になるのです。
- その神様は、私たちともいっしょにいてくださいます（ローマ8:31）。神様が私たちの味方だから、私たちはどんなことがあっても負けることがないのです。
- ※教師にも「主が共におられた」ということを信じることで、はげましやなぐさめを与えられたことがあると思います。その思い出を語りましょう。

## 〈ちいさなお祈り〉

- ヨセフといつもいっしょにいて守ってくださった神様が、今、私たち一人一人ともいっしょにいてくださるということに「ありがとう」とお祈りしましょう。



## 〈ねらい〉

イエス様を信じている人は、どんなに苦しいことがあっても神様が共にいてくださり、助けてくださることを確信し、誘惑に負けないで、信仰の中で正しく生きることができるように指導する。

## 〈展開例〉

1. 今日の話の中で、ヨセフはどんな人であったのか、もう一度話を思い起こしながら話し合ってみましょう。
2. もし、自分がヨセフだったならば、どんな行動をとったでしょうか。
3. ヨセフが誘惑に負けることなく、苦しみを絶えて、正しく生きることができたのはなぜでしょうか。
4. 今日の聖書の中で、「主が共におられ」という言葉は、何回出てくるのか探してみましょう。
5. ヨセフは、神様を信じる信仰がありました。だから、彼は誘惑や苦しみに負けることなく、正しく真面目に生きて、いつでも、どこでも人に認められる人になりました。あなたにも神様が共におられるのでしょうか。
6. 新約聖書マタイによる福音書28章19、20節を開いてみましょう。  
「28：19 だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、20 あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」
7. イエス様は復活して、天に昇られる前に、お弟

子さんたちにこのような命令と約束をしてくださいました。これは、お弟子さんたちだけの言葉ではなく、イエス様を信じるすべての人に語られた言葉であります。だから、わたしたちもイエス様を信じる信仰を他の人々に伝える人になりたいと思います。そうすると、どんな苦しいことがあっても、イエス様が共にいてくださって助けてくださいます。

## 〈お祈り〉

神様。私たちにイエス様を送ってくださって、私たちの罪を赦してくださったばかりではなく、いつも私たちと共にいてくださることを感謝します。イエス様を信じて、それを伝えるときに、試験や苦しみや誘惑があるかも知れませんが、聖霊によって守ってくださいますようお願い致します。



主が共におられる

## 〈今日のカテキズム〉

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問34が挙げられています。

問34 だれと歩むのですか。

答 私はひとりぼっちではありません。  
私たち、神の民の祈りの家、キリストの体なる教会とともに歩みます。

☆そして、カリキュラムの中で当該カテキズムを教える箇所で、ウ告白25章「教会について」を参照するよう指示があります。6項目あって、ここでは引用しませんが、確認してください。

☆ヨセフはエジプトに奴隷として売られたことにより、家族から、そして自分の民からも引き離され、ひとりぼっちの状態になりました。けれども、そんなヨセフと神さまが共にあってくださったことを、しっかりと心に留めたいと思います。今日で言えば、私たちはキリストの体なる教会に属していて、聖霊なる神さまのお働きによって主イエス・キリストが共にあってくださいますから、そのことを告白している問答を覚えたいと思います。そしてこの問答を読むと、いろいろな罪や悪と戦い、遂にはエジプト全国を支配するに至ったヨセフにもあてはまることが見て取れると思います。

## ハイデルベルク信仰問答

問32 なぜあなたが「キリスト」者と呼ばれるのですか。

答 なぜなら、わたしは信仰によってキリストの一部となり、その油注ぎにあずかっているからです。

それは、わたしもまた この方の御名を告白し、生きた感謝の献げ物として自らをこの方に献げ、この世においては自由な良心をもって罪や悪魔と戦い、ついには全被造物をこの方と共に永遠に支配するためです。

※答の中の「油注ぎ」の油とは聖霊のことです（ヨハネ—2：27参照）。

## 〈今週の聖書日課〉

日曜日 マタイ28：20  
月曜日 コリント—12：12～27  
火曜日 ヨハネ—2：27～3：3  
水曜日 エフェソ6：10～18  
木曜日 テモテ—1：18～2：2  
金曜日 テモテニ2：11～13  
土曜日 詩編23編

先生方へ

今年度の中学科では、カリキュラムの聖書物語の内容に則したカテキズムを、声に出して問答し、できれば暗記して、み言葉を心に蓄えていく、ということを目的にしています。いくつかの問答を挙げていますが、礼拝からの流れをみながら、また生徒たちの様子を見ながら選んでください。（詳しくは、前号の中学科のコラムをお読みください。）なお、今号では、参照カテキズムとして挙げられている子どもカテキズムの問答と、カルヴァンの記したジュネーヴ教会信仰問答からの問答も記しています。ジュネーヴ教会信仰問答は外山八郎訳（新教新書版）を使用しましたが、もしかしたら暗記向きの日本語ではないかもしれません。そう思われた場合には、暗記には使わない方がよいでしょう。暗記を勧めるには日本語の善し悪しの吟味も必要です。三か月なさってみて、いかがだったでしょうか。暗記させる方はさほど準備はいらないのではないか、という錯覚に陥りませんでしたか？

実は、暗記させるには、自分もある程度覚えていなければやりにくいこと、文言の内容を説明できるまでにわかっていないと導けないことを実感されたのではないのでしょうか。祈りをもって準備して参りましょう。

テキスト 創世記50章15～21節

**(1) 主のはからい**

主がヨセフと共におられたので、彼はエジプトの宰相の地位にまでのぼりつめます。そしてそこにはヨセフの家族と、神の選びの民イスラエル（これは父ヤコブに神がお与えになった名です）の歴史に対する、主なる神のくすしいおはからいがあったのです。

おりしも全世界を深刻なききんが襲っていましたが、エジプトの国は宰相ヨセフの賢明な経済政策によって、豊富な食糧を備蓄していました。

父ヤコブと11人の兄弟たちの住む故郷カナンもききんに苦しんでいました。そこで兄たちはエジプトにおもむき、それが弟ヨセフだとも知らずに、エジプトの宰相のもとにひれ伏して食糧を乞います（ここで、少年時代にヨセフが見たふたつの夢がそのとおりになります）。

ヨセフははじめは身元を隠して兄たちにつらく当たりますが、それも計画があつてのことでした。それはこの機会をとらえてヤコブと11人の兄弟たち全員をエジプトに呼び寄せ、なつかしい再会をはたすとともに、ききんのカナンから豊かなエジプトに移住させることで、彼らの命と生活とを救うという計画です。

当初エジプト行きをためらっていた年齢のヤコブも、これによってもう少年の頃に死んだと思ひ込んでいた（兄たちはヨセフは獣に食い殺されたと父には報告していました）最愛の息子に会うことができたのです。

**(2) 悪を善にかえたもう主**

ヨセフの10人の兄たちは、昔自分たちが売り飛ばした弟が今やエジプトの支配者となっているこ

とを知ると、彼が昔の罪の仕返しをするのではないかと恐れます。

しかしヨセフは彼らの罪を責めることもせず、そのことで自分がどれほどの苦しみを受けたのかを語ることもせず、彼らに語りかけるのです——確かにあなたがたは昔わたしに悪をはかりました。けれども神はそれを善にかえ、あなたがたと多くの民の命を救ってくださったのです。だから、どうか恐れなでください（19～21節）。

神は人のはかる悪をも、人をその罪から救うよきみわざのためにお用いになるお方です。そのことは主イエス・キリストの十字架のみわざに鮮やかに示されています。主イエスを十字架に追いやったのは私たち人間の罪です。しかし神はひとり子を十字架につけることによって、私たちの罪を贖い、永遠の命にいたらせるための道を開いてくださったのです。

神は私たち人間の罪や悪、苦しみや試練をもよきことにかえてくださいます。すべてのことが私たちの救いに役立つように周到にはからってください。パウロが神を愛する者たち、神の計画に従って召された者たちには万事が益となって働く（ローマの信徒への手紙8章28節）と語るとおりです。

ヨセフの生涯は、神のこのくすしい、驚くべき摂理のみわざをさやかに映し出しています。私たちの地上のいとなみもまたこの慈愛に満ちたお方、イエス・キリストの父なる神の愛の配慮のもとに置かれています。このお方のみ手にあって、私たちもすべての悪に勝利することができるのです。

（木下裕也）

テキスト 創世記50章15～21節  
参照カテキズム 子どもカテキズム問33

### 〔単元のねらい〕

ヨセフの生涯を概観して、全ての出来事の上に神様の摂理の御手が働いていることを確かめる。小学校高学年から中学生程度を対象とする。小学校低学年以下の場合であれば、単純なハッピーエンドとした方が分かりやすいが、もう少し理解力のある対象であるため、苦難を通して、ヨセフも兄達も変えられたことに触れ、神様の御旨がそこにあること、また私たちの苦難も同様の目的を持つことを指摘する。

## 「勝利をおさめたヨセフ」

### 〔導入〕ヨセフの生涯の変遷を概観する

今日も聖書のお話を一緒に見て参りたいとおもいます。

今日は創世記の一番最後に近いところを読みました。創世記の中には、世界が作られた時から始まって、イスラエルの最初の先祖達がどのように神様に導かれ、恵みをいただいてきたかということが語られています。その中でも37章からおしまいの50章までは、族長ヨセフがどのような生涯を送ったかということが語られています。

ヨセフは十二人兄弟の十番目の子どもでした。お父さんがあまりにもヨセフをひいきして可愛がり、ヨセフも、後から考えれば本当のことだったのですが、両親や兄弟達がみんな自分にひざまずいて挨拶をする夢を見たなど言い出しましたので、兄さん達に憎まれて、奴隷に売られてしまいました。奴隷として売られて行ったエジプトでも色々苦勞をして、無実の罪で牢屋に入れられてしまったりもいたしますが、そこから認められて、最後には王様の次に偉い大臣にまで出世し、エジプトを大飢饉のピンチから救い出します。

そして、ちょうどエジプトに食料を買いにやって来たお兄さん達を見つけ、お兄さん達が自分を奴隷に売ってしまったことを反省しているのを知って、お父さんやお兄さん達、みんなを食料が豊富なエジプトで暮らすことができるようにいたしました。こうして、一度離れ離れになった兄弟達は皆一緒に生活をし、飢饉の心配をしなくてよ

くなったのでした。

### 〔展開1〕ヨセフは、自らの運命が神様の御旨であることを確信している

それでめでたしめでたし、歳をとって息子と再会できたお父さんも幸せに生涯を終えて天国に行くことが出来たのですが、お父さんが亡くなって、お葬式も済みますと、お兄さん達には心配が出来てきました。というのも、弟のヨセフは、お父さんが生きている間は、自分たちに親切にしてくれていたけれど、お父さんが死んでしまったら、昔意地悪をして自分を奴隷に売ってしまった兄達に復讐するのではないかという恐れでした。人に意地悪をしたり、悪いことをしたりすると、後になってもこうやってピクピクドキドキしなくてはならないので、止めておいたほうがよいですね。

ともかくお兄さん達は、弟のヨセフのところに行きますと、亡くなったお父さんがヨセフに「兄達を赦してやって欲しい」と言っていたと言います。すると、ヨセフは、涙を流して、兄達を赦したのです。

### 〔展開2〕神様はヨセフ自身を変えて下さった

たぶん、昔はヨセフもお兄さん達のことを恨んでいたに違いありません。お兄さん達に騙されて、奴隷に売られて、遠いエジプトまで連れてこられて、また嘘をつかれて牢屋に長い間入れられていたり、ずいぶん長い間苦勞をしたからです。けれ

ども、ヨセフは言います。「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」。

ひどいことも沢山ありました、イヤなことも沢山ありました。悪いこともありました。けれども実はそれらはみんな神様がヨセフもヨセフの親や兄弟達もみんなを救うために、みんなが幸せになれるようにしてくださったのです。全てのことは良いことも悪いことも全て神様が私たちを幸せに良くしてくださるために計画し実行してくださることなのです。ヨセフも長い間にそのことがよく分かりました。昔はヨセフもそのことがわからなかったでしょう。けれども、長い間にそのことがわかるようになりました。神様が、神様の計画がどんなものであるかを実際にヨセフに教えてくれたからです。

神様の計画は、悪によっても妨げられたりいたしません。悪いことをたくらんで弟を売ってしまったお兄さん達も反省して兄弟を愛するようになされました。そして、幸せに暮らしていたヨセフにも、その幸せも、また不幸も、全て神様からいただくものであることを教えてくださったのです。

### 〈展開3〉全てのことを決め、導いて下さるのは神様である

神様は、私たちが生きていくうえで必要なものを全てご存じであり、それらを私たちに与えてくださいます。私たちが幸せに暮らしていくうえで大切なものを全てご存じであり、それらを私たちに与えてくださいます。そして、私たちが信仰をもって暮らしていくうえで学ばなければならないことを全てご存じであり、それらを私たちに与えてくださいます。私たちの必要なもの、私たちが欲しいものは全て神様から私たちに与えていただけるのです。

それだけではありません。私たちがあまり欲しがらないものも、神様から私たちに与えられます。それは、私たちが本当に神様を知り、本当に幸せになるために、必要なものなのです。嫌なことがあったり、辛いことがあったりしたからといって、神様が私たちを見捨ててしまったり、私たちのことを嫌いになったりしているわけではありません。私たちが大切に、私たちをもっともっとずっと良くしてくださるために、辛いことや大変なことでも経験させてくださるのです。そんなことも経験できるから私たちは成長することができるのですし、そんな辛いときでも、神様が私たちとともにいてくださることをしているからこそ、我慢して、頑張ることができるのです。

神様が私たちと共にいてくださることを、ぜひ覚えてください。  
(長田詠喜)

---

#### 〔今週の暗唱聖句〕 創世記50章20節

あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。

---

**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 7/2にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 7/9の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……、教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

**〈分級では〉**

夏休みが近づいてきました。子供たちの中には、長期にお休みする子いるかもしれませんね。出かける予定など早めに連絡してほしいと子供たちに伝えましょう。幼稚科の子供にそんなこと無理、無理と思うかもしれませんが、自分のことを注目してくれていると思うと、意外ときちんと対応してくれますよ。ご両親に手紙を書くのもいいですね。夏休みは、教会に来る習慣が途切れてしまう時期です。その間のフォローを今から準備しましょう。

**〈分級のねらい〉**

単純な成功物語ではなく、その背後に神様の働きがあったこと、苦しみの中で神様がヨセフを変え、兄弟たちも変わったこと、神様の御業のすごさ、深さを強調して話しましょう。

**〈共通工作〉**

**目的：**みんなで紙芝居を作ろう！

族長時代から出エジプトまでの一連のストーリーを創世記から申命記までのお話の流れと神様の約束の実現をこどもたちと一緒に理解していくこと

**準備するもの：**紙、色鉛筆、くれよん（絵が描ける道具ならなんでもよい）

**作業手順：**その日のお話の終了後に一番印象に残ったところをそれぞれ絵に描いてもらう。描いた絵はとっておきます。最後の“モーセの死”の単元が終わった時点で、描かれた絵とぬりえ例の絵をすべて集めて、並べると紙芝居ができあがります。最後にみんなで作った紙芝居を使って、お話をしてもよいでしょう。

**〈展開例：共通工作を作りましょう〉**

9月末までの教材は、歴史の流れの中で、脈々と私たちに働いてくださる神様のことを理解する大変いいチャンスです。是非、毎回、絵に残して、9月にはヨセフさん、モーセさんの生涯がひとつの紙芝居になる作業をがんばってやってみませんか。また、完成した紙芝居を、クリスマス祝会や礼拝などで、教会のみなさんやご両親に発表できたら、さらに子供たちの記憶の中に、このすばらしい神様のお働きが心に刻まれるのではないかと期待しています。

**〈祈り〉**

神様は、ヨセフさんをいつも見守ってくださっていました。そして、私たちをも、同じように見守ってくださっています。悲しい時も、苦しい時も、いつでも私たちを見つめてくださっている神様にお祈りすることをわすれませぬように。

**〈子どもたちに伝えたいこと〉**

神様が共にいてくださって守られ、エジプトの大臣にまでなったヨセフは、自分を売ったお兄さんたちをゆるすことができた。それは、神様がすべてのことを益にしてくださるといふ信仰によるものだということ。

**〈展開例〉**

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○神様に守られているヨセフは、エジプトの大臣にまでなることができました。大きな力をもったヨセフは、昔、自分を奴隷に売ったお兄さんたちをどうしたのでしょうか？

※(50:19~21) ヨセフはエジプトの国で大臣として大きな力をもっていたので、自分をひどい目にあわせたお兄さんたちに罰を与えることもできました。しかし、ヨセフはお兄さんたちをゆるしました。なぜ、ヨセフは自分をひどい目にあわせたお兄さんたちをゆるせたかという、ヨセフは自分といっしょにいてくださる神様が、どんなことでも、一番よいことをしてくださるといふことを信じていたからです(50:20、ローマ8:28)。

○私たちは自分にひどいことをした人を、なかなかゆるすことができません。できれば仕返ししてやりたいし、相手が罰をうければいいのと思います。どうすれば、ヨセフのようにゆるしてあげることができるでしょうか。

※私たちは自分の力では、ひどいことをした相手をゆるすことはできません。ヨセフは、お兄さんたちが自分の所に来た時、お兄さんたちではなく、お兄さんたちをここに連れてきてくださった神様の方を見ていたのです。ヨセフは、お兄さんたちをエジプトに連れてきてくださった神様が、自分といつもいっしょにいて、よいことをしてくださったことを知っていたので、その神様が連れてきてくれたお兄さんたちをうらむことができなかったのです。私たちも、神様の方を見ていることができるように、お祈りをしましょう。

**〈ちいさなお祈り〉**

○ヨセフに一番よいことをしてくださった神様は、私たちにもよいことをしてくださいます。そして、自分ではできない人を愛することをできるようにしてくださる神様に「ありがとう」とお祈りしましょう。

## 〈ねらい〉

生きている中で、良いことであれ、悪いことであれ、この世のすべてのことは神様の摂理の中にあり、神様は、すべてのことが益となるように働いておられることを認識させる。

## 〈展開例〉

1. 次の中からあって欲しいことと、あって欲しくないことを選んでみましょう。

- ①健康 ②事故 ③地震 ④合格 ⑤自由 ⑥戦争  
⑦洪水 ⑧平和 ⑨愛

2. 上の項目の中で、お許しのないまま、起ってくることはなんでしょう。

3. この世に起ってくることは、すべて神様の許しなしに、起ってくることは何一つありません。では、なぜ神様は、事故や地震、戦争、洪水などのことをお許しになりますか。

答： それは、それを通して神様の御心がわたしたち人間に現れるからであります。

4. 例話 ヨハネによる福音書9章「生まれつきの目が見えない人」

イエス様の弟子さんたちが、生まれてからずっと目が見えない人指して「あの人が生まれてから目が見えないのは、だれが罪を犯したからなのでしょうか。あの人本人ですか、それとも、あの子の親の罪ですか。」

その質問にイエス様は、「本人の罪や、親の罪のせいでもありません。この人を通して神様が大きな働きをするためです。」と語られました。実際この人は、イエス様によって目が癒され、イエス様の素晴らしさを伝える人になりました。

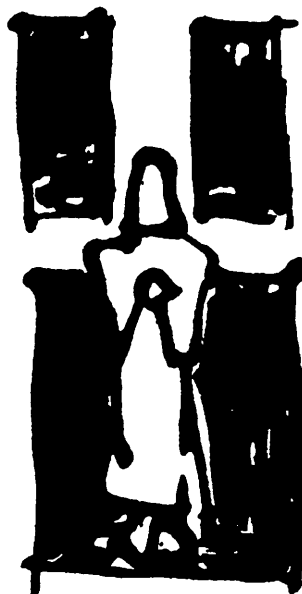
5. ヨセフさんも同じように、いろいろ苦勞することがたくさんありましたが、神様はそのような

ヨセフさんを通して、ヨセフさんとその家族を救ってくださったのであります。

6. 私たちにも、これからいろいろ大変なことがたくさん起きるかも知れません。しかし、どんなことがあっても、全てを良いことに導いてくださる神様を信じて、神様を信頼して歩みましょう。

## 〈お祈り〉

愛する神様。私たちいつも共にいてくださりありがとうございます。これから、私たちにどんなことが起きるか分かりませんが、わたしたちが神様を信頼して、感謝して日々を過ごすことができるように、導き守ってください。



神はそれを昏に変え



**〈今日のカテキズム〉**

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問33が挙げられています。

問33 聖化の歩みとは何ですか。

答 神さまの子どもとして、罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せられていくことです。

神さまに愛されている喜びのうちに、私たちも神様を愛して歩みます。

☆この流れで見ると、ヨセフの生涯の歩みを学ぶことによって、クリスチャンの生き方・姿勢を確認しようとする意図が見られます。つまり、私たちは苦難を通して、神さまの子と呼ばれるにふさわしい者に変えられていくのだ、ということを確認しようとしています。

☆この意味では、既に以前、長いので暗唱までは難しくとも紹介してくださいとお願いしたことがあります。ハイデルベルク信仰問答問26をもう一度、思い出してみるとよいでしょう。今度は少しでも暗唱することに挑戦してみましようか。一度に全部、と思わないで、生徒たちの力に合わせて工夫してみてください。例えば、真ん中の部分（「わたしはあなたにより頼んでいますので……信じて疑わないのです」の部分）だけは覚える、という風に。

**ハイデルベルク信仰問答**

問26 「我は天地の造り主、全能の父なる神を信

ず」と唱える時、あなたは何を信じているのですか。

答 天と地とそこにあるすべてのものを無から創造され、それらを永遠の熟慮と摂理とによって 今も保ち支配しておられる、わたしたちの主イエス・キリストの永遠のおんちち御父が、御子キリストのゆえに、わたしの神またわたしの父であられる、ということ。

わたしはこの方により頼んでいますので、この方が体と魂に必要なものすべてをわたしに備えてくださること、また、たとえこの涙の谷間へ いかなる災いを下されたとしても、それらをわたしのために益としてくださることを、信じて疑わないのです。なぜなら、この方は、全能の神としてそのことがおできになるばかりか、真実な父としてそれを望んでもおられるからです。

☆生き方の指針としては、ハイデルベルク信仰問答の問1も参照してください。

**〈今週の聖書日課〉**

日曜日 創世記50：20

月曜日 詩編55：23

火曜日 マタイ6：25・26

水曜日 ルカ12：22～34

木曜日 ローマ8：28

金曜日 ローマ8：31～34

土曜日 ローマ8：35～39

テキスト 出エジプト記1章22節～2章10節

### 〈救いの歴史における第二の展開〉

創世記3章15節で、神は罪を犯して墮落した人類に原福音と呼ばれる救いの計画を約束された。アダムの子孫の中から、神はアブラハムとその子孫を選んで神の民とし、彼らの神となる契約を結ばれ、救いの計画を明らかに示された（創12章、15章）。アブラハムとの契約の実現のしるしとして、神が示す地を与えること、彼らが大いなる国民となること、地上のすべての氏族の祝福の源となるという三つの祝福を約束された。その約束の成就という点では、創世記は始まりに過ぎなかった。民の数もまだ70名を超える小単位であり、約束の土地も僅かマクベラの墓地を手に入れたに過ぎず、飢饉に襲われ約束の地を離れエジプトに移り住むこととなった。出エジプト記は神がその約束を果たされる第二の展開が示されている。

### 〈エジプトの奴隷となる神の民〉

神の民は「おびたしく数を増し、ますます強くなって国中に溢れ」（1：7）、神の祝福の約束が実現に向かうかに見えた。しかし、「ヨセフのことを知らない王が出て」と王朝交代が発生し、新しいファラオは、神の約束の実現の敵対者として振舞うこととなった。神の民の増大を阻止するため、男子の抹殺を計画した。このための第一の政策は強制労働の命令（1：11）、第二の政策は過酷を極める重労働の命令（1：13-14）、第三の政策は神の民の助産婦に男の子を殺すようにとの命令であった（1：16）。これらの政策が水泡に帰した時、ファラオは第四の政策を命じた。「生まれた男の子は、一人残らずナイル川に放り込め」という国民への命令であった。

### 〈絶滅から神の民を救う神の御手〉

出エジプト記2章は、ファラオの絶滅計画から神の民イスラエルを生かすための神の摂理的働きが特記されている。神の御手は神の民の指導者となるモーセの誕生と生育の上に働いた。イスラエ

ルの男子殺害をもくろむ厳しい命令の中で、一組のレビ人の男女の間に男の子が誕生した。父はアムラム、母はヨケベドであり、すでにアロン（兄）とミリアム（姉）の子持ちの夫婦の第3子としてモーセは誕生した（出6：20）。神は大人の英雄を神の民の救出のために準備されず、幼子を誕生させ、育て、英雄に導かれたのである。

### 〈幼子の生命を守る神の摂理的御手〉

まず、神は両親の愛を用いた。2章2節に三ヶ月間匿った母親の愛が指摘されているが、両親の愛を用いて神は幼子を守られた（使徒7：20、ヘブライ11：23参照）。また、隠しきれなくなったときに両親の配慮を神は用いた。ナイル川沿いに茂っているパピルス（葦）の茎をもって籠を作り、アスファルトとピッチによって防水処置を施して幼子を入れ、葦の茂みの中に籠を置いた（2：3）。これは、葦の茂みの中は流れも緩やかで川岸近くにあり、その側にはファラオの娘たちが水浴びに来る場所があることを両親は知っていた結果であろう。助け出される可能性を考慮した彼らの知恵であった。神聖なナイル川での水浴びは、肉体的な清めをするだけではなく、神の祝福を受けて寿命を長くすると信じられていた。この水浴びをする王女の目に留まったのが、ヘブライ人の男の子モーセであった。次に、王女の心に幼子にたいする「ふびん」な心を神は起こさせた。さらに、幼子の姉の愛と機敏な行動が、幼子の命を守る手段とされた。彼女は母に代わって籠の行方を見張り続け、籠が王女に発見され、ヘブライ人の男の子であるに違いないとの対話を聞くや否や、恐れず進み出て乳母の紹介を申し出て、王女の受け入れ態勢を整えるのに貢献をした。

こうした摂理の下で、命を絶とうとしたファラオの懐にモーセは王女の息子として入り、40年間エジプトの最高の教養を積むと共に、乳母となった母を通して信仰教育も受け、神の民のふさわしい指導者の素養をもつものとなった。（杉山 明）

テキスト 出エジプト記1章22節～2章10節  
参照カテキズム 子どもカテキズム問13

### 〔単元のねらい〕

神様は、ご自分の造られた世界を御手の中で支え、導いておられる御方です。神様の摂理の働きについて、『子どもカテキズム』問13には「嬉しいことも悲しいこともすべてのことが私たちに役立つよう働くのです」とあります。子供たちが、毎日の生活の中に愛を持って深く関わって下さる神様がいることをさらに理解できるよう導きたい。

## 「神様の導き」

ヨセフさんの後の時代、神さまを信じているイスラエルの民はエジプトに住んでいました。イスラエルの民はエジプトでたくさん増えていき、とても大勢で住むようになりました。これも神さまが与えて下さった祝福です。しかし、イスラエルの民が増えていくことを良く思わない人がいました。それはエジプトの王様です。なぜ、エジプト王はイスラエルの民が増えていくのを嫌ったのでしょうか。それは、「イスラエルの民が多くなっていくと、いつか自分たちに刃向かい、エジプトの国を乗っ取るのではないか」と思ったからです。

そこでエジプト王はある方法を思いつきました。それは、イスラエルの民にきつい仕事をさせるということでした。きつい仕事をたくさんさせて、エジプトの権力を振りかざし、イスラエルの民は命令に従っていけば良いんだと教えようと思いました。それに、きつくて辛い仕事をたくさんさせれば、イスラエルの民は増えないだろうとも考えました。しかし、それでもイスラエルの民は減りませんでした。減るところかもっと増えていきました。これを見たエジプト王は、さらにひどい命令を言います。それは、「イスラエル人が生んだ男の子を一人残らず川に投げ入れて殺してしまえ」という命令です。

みんなはどう思いますか。とってもかわいそうですね。やっと生まれた赤ちゃん、家族みんなが楽しみにしていた赤ちゃんが殺されてしまう。イ

スラエルの人々とはとても悲しかったと思います。エジプト王の心はだんだんと悪い方に傾き、イスラエルの民を苦しめるようになりました。

そんな時、あるイスラエル人の家に男の赤ちゃんが生まれました。とってもかわいい赤ちゃんです。両親は赤ちゃんを川に捨てるのが出来ずに隠れて育てました。でも、赤ちゃんは毎日ミルクを飲んで大きくなっていきます。お腹が減ったり眠くなったりすると必ず泣きます。その泣き声もだんだんと大きくなり、3ヶ月ぐらいたった時には隠せなくなってきました。もしエジプト人に見つかってしまえば、赤ちゃんを奪われ殺されてしまいます。そこでこの家の人は、生まれて間もない赤ちゃんを籠の中に入れて川岸に置いたのです。「誰かが拾って育ててくれないか。そうすれば、生まれたばかりの赤ちゃんが死なずにすむのに」と必死になって思ったのでしょうか。

さて、この男の赤ちゃんはどうなるのでしょうか。そのことがとても心配で、その子のお姉さんが遠くから見守っていました。するとどうでしょう。何とそこにエジプト王の娘である王女が水浴びをするためにやって来たのです。その時、籠に入れられた男の赤ちゃんが見つかりました。エジプトの王女に見つかる。みんなは、それが大変なことだと思いませんか。イスラエル人の男の赤ちゃんは川に投げ入れ殺すようにと命令したのはエジプト王です。エジプト王は、この王女にとって自分のお父さんです。そのお父さんが命じたことです。

から、目の前にいる赤ちゃんを川に投げ捨ててもおかしくはありません。でも王女は、籠の中で泣いているイスラエル人の赤ちゃんをかわいそうに思い、何とかしてやりたいと考えていたのです。

その様子を隠れて見ていた赤ちゃんのお姉さんは、王女の前に進み出て行き、「赤ちゃんにミルクをあげることが出来るお母さんを連れてきましょうか」と言いました。するとこの王女は、「そうして欲しい」と答え、お姉さんは自分のお母さんを連れてきたのです。つまり、ここで拾われた男の赤ちゃん、川に捨てられて死ぬかもしれない赤ちゃんの本当のお母さんです。王女は、このお母さんに向かって、「この子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲ませておやり。手当てはわたしが出しますから」と言いました。それで赤ちゃんは、誰かに捕まて殺されることなく、本当のお母さんの所で安心して育てられることになったのです。

これはとても不思議ですね。一人の名もない女の人が王女の前に出て行って話しをするというのは、とても勇気がいることでした。もしかしたら、「あなたは無礼者だ」と言われて罰を受けたかも知れません。また、エジプト王の娘がイスラエル人の赤ちゃんをかわいそうに思い、エジプト王家の子供として育てられることになったことも驚き

です。そして更に、この赤ちゃんが本当のお母さんのところで育てられることにもなったのです。こうして育てられることになった赤ちゃんが、これから先、神さまの大切なお働きをする人になっていくモーセさんでありました。

ここにはとても不思議で驚くことがたくさん出て来ます。でもこれは、神さまが働いて下さっていることの結果なのです。モーセさんだけにはありません。神さまは私たちの目には見えませんが、いつも私たちのことを考えて働いて下さる方です。どんなに悲しく見えることがあっても、どんなに辛く思えることがあっても、私たちのことを決して見放さない神さまがおられ、働いて下さり、全てのことを愛を持って導いて下さるのです。毎日の生活の中に、いつも神さまは働いて下さいます。みんなの周りで起こること、みんなが心の中で考えていること、その気持ちも全て神さまはご存知の上で、みんなにとって一番良いことをなさろうと導いて下さいます。私たちが気づかなくても、いつでもどこでも、愛をもって毎日の生活に深く関わって下さる神さまがいることを、聖書のみ言葉は私たちに教えてくれています。今、その神さまを信じられる幸せを心から感謝しましょう。  
(千ヶ崎基)

---

[今週の暗唱聖句]      ローマの信徒への手紙 8章 28節

神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、  
万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。

---

**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 7/9にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 7/16の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

**〈分級では 夏期学校でちょっと脱線〉**

みなさんの教会学校では、夏期学校がありますか？ 早め、早めで、詳細な日程など分級でお話し、参加してほしい旨話をしましょう。宿泊が伴う夏期学校では保護者同伴でない幼稚科さんは参加できないところもあります。安全面を考えると確かに難しい問題ですね。でも、できたら参加できる前提で計画を考えていただければと思います。遠くに行かなくていいんです。教会で布団を借りてお泊りでもいいではないですか。30分くらいの短い分級では味わえない多くの経験は、幼稚科の子供たちにとっても重要な経験です。

**〈分級のねらい〉**

さあ、いよいよモーセさんの登場です。ヨセフさん、モーセさん、そしてカナンへの旅。何と神様の計画は壮大なのでしょうか。9月までの分級では、前後の話を特に関連付けながら、神様の大きな時を越えた働きをイメージできるよう、子供

たちに語っていただけたらと願っています。

モーセさん誕生の場面は、大変不思議なことの連続です。時々、不思議だね……と言ってお話を終わる先生がいらっしゃいます。でも、そうではなくて、それが神様のお働きの結果なのだということを強調することを忘れないでください。偶然ではないのです。神様の御計画なの中で行われたことなのです。そして、そのご計画は今も、脈々と続き、私たちにも関わっていることだとイメージできればもう、最高なのですが……。でも難しいかな……。

**〈祈り〉**

神様、モーセさんを守ってくださってありがとうございました。しかし、モーセさんだけでなく、私たちをも、神様は大事に思ってください。その歩みを守ってくださっています。ありがとうございます。

**〈共通工作〉**

**目的：**みんなで紙芝居を作ろう！

族長時代から出エジプトまでの一連のストーリーを創世記から申命記までのお話の流れと神様の約束の実現をこどもたちと一緒に理解していくこと

**準備するもの：**紙、色鉛筆、くれよん（絵が描ける道具ならなんでもよい）

**作業手順：**その日のお話の終了後に一番印象に残ったところをそれぞれ絵に描いてもらう。描いた絵はとっておきます。最後の“モーセの死”の単元が終わった時点で、描かれた絵とぬりえ例の絵をすべて集めて、並べると紙芝居ができあがります。最後にみんなで作った紙芝居を使って、お話をしてもよいでしょう。

## 〈子どもたちに伝えたいこと〉

モーセの誕生において、神様はご自身の計画に従って、いろいろな手段を用いてモーセを守られたこと。

今、教会に集められている私たちも神様のご計画の中にあり、守られているということ。

## 〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○あやうく殺されえしもうところだった赤ちゃん、モーセは、大きくなってからどんなことをした人か知っていますか？

※すでに長く日曜学校生活をしている子どもたちは、モーセのことをよく知っているかもしれませんが、これから9月まで「出エジプト」の話に入って行く前に、モーセのしたことをあらかじめ要約しておきましょう。

- ・エジプトで奴隷生活をさせられていた神様に選ばれた民：イスラエル人を解放し、民族の故郷であるカナンの地まで導いたリーダーであること。
- ・私たちが神様に従うためのガイドラインである「十戒」を神様からいただいたこと。

○そのような大きな仕事をするモーセは、生まれた時にいろいろなことによって、守られました。どんなことがあったのでしょうか？

※赤ちゃんモーセの身に起こったことをまとめましょう。

- ・王様から「男の子はナイル川にほうりこんでしまえ」という命令が出ていたのに、両親に愛されてかくされていた。
- ・かごに入れられてナイル川に置かれたモーセが、エジプトの王様ファラオの娘にひろわれたこと。
- ・姉の機転に富む勇気ある行動（ファラオの娘の前に出て乳母を連れてくると言ったこと）によって、もう何の心配も無く母親の手によって育てられたこと。

神様はモーセを選び、神様の考えた大きな仕事をさせるために、いろいろなことをしてモーセを助けられました。

同じように、こうして日曜学校に来ている皆さんも、神様がいろんなことによって守ってくださいます。私たちはモーセのように大きな仕事はできないかもしれないけれど、こうして皆さんが日曜学校に来ているのは、神様を選び、なにか神様の仕事をさせようとお考えになっているからです。ですから、私たちもモーセのように、いろいろなことによって守られています（ローマ8：28）。

## 〈ちいさなお祈り〉

○私たちはモーセのように素晴らしい大きなことはできないかもしれませんが、そんな私たちでも神様はモーセと同じように守ってくださることに「ありがとう」とお祈りしましょう。

## 〈ねらい〉

歴史を支配しておられる方が神様であることを信じて、神様の導きに従っていくことができるように。

## 〈展開例〉

1. 今まで学校で習った歴史の中で、一番良く覚えている歴史というのはどんなことであるのか話し合ひましょう。
2. 歴史の中には、悲しい出来事や、面白いこと、嬉しいこともあります。その歴史を支配しておられる方がいることを知っていますか。
3. ヨーロッパの歴史の中で、宗教改革という歴史の出来事があります。当時は、キリスト教が大きな力をもっていた時代でした。国の王様も教会の一番偉い人（教皇）に従わなければならなかった時代です。

しかし、そのような大きな力を教会がもっていたので、教会はサタンの誘惑に負けてしまい、その力をもって好き放題にしていました。それは神様が喜んでおられないことでした。

神様は、それを変えるために、一人の教会の指導者を用いてくださいました。その人は命をかけて教会の過ちを話しました。そのために彼を非常に多くの苦しみを受けましたが、しかし、それを通して多くの人々が自分達の過ちを気付くようになりました。そして、教会は新しい歩みを始めるようになったのであります。

それはプロテスタント教会です。もし、あの勇気ある信仰的な人がいなかったならば、教会はどうなったでしょうか。神様はそのようにして、人を通して歴史を支配しておられます。

4. モーセのことを考えましょう。モーセは神様が用いられるために選ばれた人です。もし、モーセの両親が子供を愛する心がなかったらばど

うなったのでしょうか。もし、赤ちゃんを入れた籠が水に流されたり、ワニに食べられたりしたらどうなったのでしょうか。もし、エジプトの王女が子供を育てる気がなかったらどうなったのでしょうか。もし、お姉さんミリアムが、そこで王女に声をかけられなかったらどうなったのでしょうか。

5. いろんな可能性がたくさんありましたが、しかし、神様はしっかりと歴史を支配しておられる方ですから、用いられようとするモーセを守ってくださいましたのであります。私たちも信仰の中で神様に用いられる人です。神様がどのように私たちを用いてくださるか分かりませんが、神様を信頼して、神様の御言葉に従って歩みましょう。

## 〈お祈り〉

神様、私たちは自分の心のままに生活していると思っていますが、しかし本当はすべてが神様の導きであることを教えられました。今、教会に来ているのも、神様の導きであることを信じます。どうか、わたしたちがいつも神様を信頼して、神様に従って歩むことができるように、助けてください。



マーシャー

**〈今日のカテキズム〉**

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問13が挙げられています。

問13 神さまの摂理のお働きとは何ですか。

答 今、私たちに働く、神さまの善いお力のことです。

神さまのお許しがなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、神さまは私たちの父として私たちを守ってくださいます。

ですから、健康も病気も、嬉しいことも悲しいことも、すべてのことが私たちの役に立つよう働くのです。

☆ヨセフの死後、奴隷生活の苦しみの中にあるイスラエルの民を救い出すために、「モーセの誕生」の物語は、いろいろなところに神の摂理的な御手が働いていることを知ることができます。エジプトの王女に拾われて命拾いしたこと、乳母として実の母が選ばれたことはもちろんですが、乳離れ（当時は3歳くらい）までの時期を実の母のもとで育てられたということは、ただ自然な親子関係の中で育てられたというだけでなく、イスラエルの伝統の中で育てられたという点で重要であることを見落としてはなりません。乳離れ後はエジプトの王子として異教的な教育を受けることになったのにも関わらず、イスラエルの指導者として立つことができたのは、実の母のもとでの、乳離れするまでの間の信仰教育にかかっていました。母親はただ授乳していただけてはいけません。このことになかなか目が向きませんが、ここにこそ、神さまの

御手が最も大きく働かれたのではないのでしょうか。母が乳を飲ませながらなした信仰教育を、父なる神は有効として下さったようです。

**ハイデルベルク信仰問答**

問27 神の摂理について、あなたは何を理解していますか。

答 全能かつ現実の、神の力です。

それによって神は天と地とすべての被造物を、いわばそのみで御手をもって 今なお保ちまた支配しておられるので、木の葉も草も、雨もひでりも、豊作の年も不作の年も、食べ物も飲み物も、健康も病も、富も貧困も、すべてが偶然によることなく、父親らしいみで御手によって わたしたちにもたらされるのです。

**ウェストミンスター小教理問答**

問11 神の摂理のみわざ御業とは、何ですか。

答 神の摂理のみわざ御業とは、神が、最もきよく、賢く、力強く、すべての被造物とそのあらゆる動きを保ち、治めておられることです。

**〈今週の聖書日課〉**

日曜日 エレミヤ5：24・25

月曜日 使徒14：15～17

火曜日 ヨハネ9：1～3

水曜日 箴言16：33

木曜日 ルカ21：10～19

金曜日 テサロニケニ3：3

土曜日 ベトロロー1：5～7



テキスト 出エジプト記3章1～14節

### 〈召命の時期〉

エジプトの王子として成長したモーセは自分の力によってイスラエルの苦境を救おうとして失敗し、ミディアンの地に逃れ、祭司エトロの婿となり、彼の羊を飼う生活を送っていた。「それから長い年月がたち、エジプトの王は死んだ」(2:23)。神はこのときを利用してモーセを救出のため召された。労働の苦しみにあえぎ、助けを求めたイスラエルの祈りに応じて神は彼らの祖先との契約を覚えて契約の履行を計られたのである。

モーセの120年間の生涯(申命34:27)は、40年ずつ三区区分される。最初は王室における40年(使徒7:23)、ミディアンの地での40年(使徒7:30)、そして荒れ野で救出の指導者としての40年(民数14:34)である。モーセの召命は80歳の頃である。神の顕現は、エジプトに下り、そこで大いなる国民となり、必ず連れ帰るとヤコブに約束された時(創46:2-4)以来である。神はその約束を果たすためにモーセを召した。

出エジプトがいつ起こったかについては二説がある。早期説では第18王朝のトゥトメス三世の後を継いだアメンホテプ二世の時代でBC. 1450年頃、後期説では第19王朝セトスI世の後を継いだラメセス二世の時代で、BC. 1250年頃となる。

### 〈召命の場所〉

モーセが召された場所は、シナイの荒れ野の奥にある神の山ホレブである。シナイ山とも呼ばれ(19:11)、シナイ半島南中央部にあるシナイ連山の一つで Jewel・ムーサー(2285メートル)であろうと推測されている。羊を飼いながらこの地に足を踏み入れたモーセは、そこで神の顕現を体験し、召命を受けた。主のみ使いは、燃える柴の中に、柴を燃え尽くすことのない炎として現れてモーセの関心を引き起こし、更に聖なる土地だから履物を脱ぐように命じた。不思議な光景は奇異な自然現象ではなく、神の顕現であることを悟らせる超自然的現象であった。主のみ使い(神ご自

身)は、「わたしはあなたの父の神」であり、アブラハム、イサク、ヤコブの神であることを告げ、モーセとイスラエル人が神との特別な絆で結ばれていることを悟らせようとした。「神を見ることを恐れて顔を覆った」ことによって、モーセは主の使いを祖先の神として認識したことが分かる。

### 〈逆らうモーセと神の導き〉

神がモーセを呼び出した目的は、「わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出す」(3:10)ことであつた。重労働に苦しむ神の民をファラオの手から救い出す神の器として召し出されたモーセであつたが、過去の失敗のゆえにこの榮譽の受け入れを躊躇した。①自分は召命に相応しくない(3:11)、②モーセを遣わした神の名を知らない(3:13)、③イスラエルの不信任を解く自信がない(4:1)、④弁が立つ者ではない(4:10)という4つの言い訳をして、召命を回避しようとした。神は、モーセの言い逃れに対して、一つ一つ解決策を約束し、召命遂行を促された。救出計画とともに、遂行の力が神にあることを「わたしは必ずあなたと共にいる」と示し、さらに彼を遣わした神を神の民に証しするために、「わたしはある。わたしはあるというものだ」と神の名を告げられた。「わたしはある」(ハヤー)というヘブライ語は、「存在する」という語の未完了態である。時間に制限されずに継続して存続することを意味している。ここから永遠なる神、契約を忘れず果たしたもう神を表すヤハウェ(主)という神の名が由来した。民がモーセに信任を求める時にはしるしを行なう力を神は約束し、彼の讞弁(とつべん)には雄弁な兄アロンを備えると約束してモーセのためらいを取り除かれた。このように、契約の主なる神は主権的な力をもってモーセを召し、ご自分の民イスラエルに真実を示す、救出の御業に備えられた。(杉山 明)

テキスト 出エジプト記3章1～14節  
 参照カテキズム 子どもカテキズム問7、8

### 〔単元のねらい〕

神様は、御自分から結ばれた約束を忠実に守られる御方です。『子どもカテキズム』問7では、「神さまは永遠で、変わらないお方です」とあり、問8では「神さまは生きておられる真の神さまです」とあります。子供たちが、最も信頼できる神様という存在を仰ぎ、神様の約束の言葉に希望を見出しながら歩めるよう導きたい。

## 「神様の招き」

みんなは、お家の人やお友だちと約束をしたことがありますか。多分ありますよね。これまで色々な約束をしたことがあると思います。「明日のお昼1時に遊ぼうね」と言ってその時間に集まって遊ぶとき、約束を守ったことになります。約束はきちんと守るのが普通ですが、でも約束を守れない場合があります。先生は約束が守れなくて周りの人に迷惑をかけてしまうことがたくさんあります。だからいつも神さまに「周りの人との約束を守れなくてごめんなさい」と謝ってばかりです。みんなはどうですか。約束はきちんと守れますか。それとも、あまり守れないほうですか。みんなの中には「約束は全部きちんと守れるよ」という人もいるかもしれませんね。でも、お父さんやお母さんとした約束、お友だちとの約束を守れなかったことが一回はあるでしょう。私たちは完全ではないので、ときどき約束を破ってしまい、人を傷付けたり、悲しませたり、嫌な思いをさせてしまうことがあります。

では、神さまはどうでしょう。神さまは約束を破って、私たちを傷付けたり、悲しませたりすることがあるのでしょうか。いいえ。神さまはそのようなお方では決してありません。

神さまの不思議な導きによって生かされたモーセさんは成長して大人になり、この時はエジプトから遠く離れたミディアンという地方に住んでいました。そして羊を育てる仕事をしていました。ある日、モーセさんが羊を連れていた時、とても

驚くことが起こりました。燃える柴で神さまが現れ、モーセさんに語られたのです。神さまはモーセさんに次のように語られました。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。更に次のようにも語られました。「わたしは、エジプトにいるイスラエルの人々が苦しんで生活しているのを知っています。わたしはエジプト人の手から彼らを救い出し、すばらしい土地へ彼らを導く。今、行きなさい。わたしはあなたをエジプト王のもとに遣わします。わたしの民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのですよ」と、このように語られたのです。

むかし神さまは、モーセさんの先祖であるアブラハムさんに一つの約束をして下さいました。「わたしはあなたの子孫を増やし、あなたとあなたの子孫に素晴らしい土地を与えます」という約束です。アブラハムさんの子孫にあたるのがモーセさんを含めたイスラエルの人々です。でも、この時イスラエルの人々はどのような生活を送っていたのでしょうか。先週のお話を覚えていますか。エジプト王の命令で、とつてもきつい仕事をさせられ、心も体も疲れ果てていました。エジプトで大変な仕事を無理にさせられていたイスラエルの人々は、「神さま、私たちはとても疲れています」、「神さま、助けて下さい」と心から叫んでいました。その声を、神さまはちゃんと聞いて下さっていたのです。なぜでしょうか。神さまは、ご自分がイスラエルの人々を祝福して数を増やし、素晴らしい

土地を与えると約束されたことを覚えておられ、その約束を必ず守ろうとされるからです。神さまは、「わたしは降って行き、エジプト人の手からイスラエルの人々を救い出します」と言われ、ご自分から結ばれた約束を実現させるために、モーセさんを召し出したのです。神さまは、ご自分の約束に忠実であり、その約束を必ず実現されるお方、嘘をつかないお方、裏切らないお方、最も信頼できるお方なのです。

さあ、神さまからこのように召し出されたモーセさんは、それをどう思ったでしょう。「自分は神さまに選ばれて、イスラエルの人々を救い出すリーダーになれるぞ」と思って威張り始めたのでしょうか。いいえ違います。モーセさんはとても不安になってしまったのです。なぜモーセさんは、不安になったのでしょうか。一つの理由は、エジプトで一番偉い王様、イスラエル人を良く思っていないエジプトの王様の前に出るのが怖かったのです。もしかしたら、エジプトの王様に嫌われて、重い罰を受けることになるかもしれないと思ったからです。もう一つの理由は、イスラエルの人々が自分みたいな人間をエジプトから救い出すリーダーとして心から迎えてくれないのではないかと思ったからです。だからモーセさんは、「なぜ私が行かなければならないのですか」、「私

のことなど、誰も喜んで迎えてくれません」と神さまに答えたのです。

このようにモーセさんが落ち込んでいる様子を見て、神さまは何と言われたのでしょうか。神さまは、「わたしはあるという者だ」と言われました。「わたしはある」という言葉は少し分かりづらい言葉ですが、意味は「神であるわたしは本当に存在するのだ」という意味です。ほかの神さまは偽もので本当はいないのです。本当に信頼できる神さま、偽りのない本物の神さまは、聖書の御言葉で教えられている神さまだけなのです。

だから私たちは、神さまの約束を心から信頼して良いのです。神さまが、聖書の御言葉を通して約束して下さる祝福は、必ず実現すると信じて良いのです。イエス様を信じることによって神さまの愛に包まれ、希望と喜びを頂けるといふ救いの約束を私たちは信じて良いのです。何故でしょうか。それは、聖書の神さまが、嘘をついたり、私たちのことを裏切ったりしない、生ける真の神様、永遠に変わる事のないお方だからです。神さまが、みんなに豊かな恵みを与えようとして今日も招いておられます。神さまを信頼して、神さまの約束の言葉をしっかりと握りしめることができるようにお祈りしましょう。(千ヶ崎基)

---

[今週の暗唱聖句]

マラキ書 3章6節前半

まことに、主であるわたしは変わることがない。

---

**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 7/16にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようにお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 7/23の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

**〈分級では〉**

いよいよ夏休みですね。家族で旅行やキャンプなどのために何週も会うことができない生徒さんともいます。そのようなお子さんには、教会学校の様子を伝える手紙を書くなど、いつもより注意を払い、また祈りましょう。なかには、夏休み期間中は教会学校もお休みになるところもあると聞いています。このような場合も特に注意が必要と思います。

**〈分級のねらい〉**

神様のご計画、その計画を実現するリーダーとして、モーセさんが選ばれたこと。しかし、そんなすんなりとした話ではなく……。イスラエルのリーダーとなる決断をするまでのモーセの苦しみ、苦悩を中心に語ってはいかがでしょうか。モーセが決して権力心からイスラエルのリーダーになっていないこと（子供たちが時々誤解している）、自分がそのような大きな働きができないと神様に語っていること、そのモーセを変えたのは、やはり神様であった

ことを子供たちがイメージできればと思います。

私たちはどうでしょうか。モーセがそうであったように、日々苦悩し、もたえ苦しんでおり、神様に、苦悩の言葉を投げかけ、そして神様に祈らずにはいられない存在ではないでしょうか。

モーセさんがそうであったように、先生自身もがき、苦しんでいることを正直に告白することで、一気にお話がリアルに子供たちに迫るのではないかと思います。

**〈展開例 最初の部分だけ書きます〉**

モーセさんは、立派な青年になったんだ。そして、そのモーセさんに神様は、神様の計画を説明されました。イスラエルの人たちを約束の地、カナンに連れて行く、そのリーダーをしなさいっていうんだ。どひゃ……。そんなことできるわけじゃないじゃないですか。イスラエルの人たちは何人いるとおもっているんですか。その人たちは、だれもカナンを見たこともないし、みんなが行きたっていうかわかりませんよ。大体、私にそんな力あるわけじゃないじゃないですか。神様、やめてください。そんなこと私にはできませんよ……。モーセさんはありったけの力を使って、神様にできませんとお断りしました……

**〈祈り〉**

神様は、私たちをいつも見守ってください。困ったことも、苦しいことも神様にお話（お祈り）し、神様のお言葉を信頼して歩めるようにしてください。

**〈共通工作〉**

**目的：**みんなで紙芝居を作ろう！

族長時代から出エジプトまでの一連のストーリーを創世記から申命記までのお話の流れと神様の約束の実現をこどもたちと一緒に理解していくこと

**準備するもの：**紙、色鉛筆、くれよん（絵が描ける道具ならなんでもよい）

**作業手順：**その日のお話の終了後に一番印象に残ったところをそれぞれ絵に描いてもらう。描いた絵はとっておきます。最後の“モーセの死”の単元が終わった時点で、描かれた絵とぬりえ例の絵をすべて集めて、並べると紙芝居ができあがります。最後にみんなで作った紙芝居を使って、お話をしてもらいましょう。

## 〈子どもたちに伝えたいこと〉

神様は、召命に従う自信が持てないモーセに、いろいろな約束をして、従う道を備えてくださったこと。

私たちにも、神様は確かな約束をしてくださって、私たちが神様に従うことができるようにしてください。

## 〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○神様はモーセに、「エジプトで苦しんでいるイスラエルの人たちを救い出すリーダーになりなさい」と言われました。その時、モーセはどうしたのでしょうか。

※モーセは大きな務めに自信が無く、いろいろな理由をつけて(3:11、3:13、4:1、4:10)逃げ出そうとします。しかし、神様はその一つ一つにお答えになって、神様がいつも一緒にいてくださる(3:12)と約束して、大丈夫だとはげましてくださいました。

私たちも、神様からいろんな務めを与られます。それに最初から自信を持って奉仕することができる方は少ないのではないのでしょうか。みなさんが、日曜学校の教師に召された時のことを思い出してください。最初から自信はありましたか？ それでも、神様は約束どおり、毎週毎週、みなさんに必要な助けを与えられて、

子どもたちの前に押し出してくださっているはず。教師のそんな思いを語ってはいかがでしょうか。

○神様がしてくださった約束を、モーセは信じてイスラエルの人々のために立ち上がりました。モーセが神様の約束を信じたのはどうしてだと思えますか？

※今日読んだカテキズムの問7をもう一度読んでみましょう。特に、答の後ろ半分「永遠で変わらないお方です」というところです。モーセは、このことを知っていたのです。

私たちは、友達と約束をしても、気が変わって約束を破ることがあります。また、都合が変わって約束を守れないことがあります。けれども、「永遠に変わらない」神様は、気が変わったり、都合が悪くなったりしないので、絶対に約束を守ってくださいなのです。

私たちを助けて下さるといふ約束も、絶対に守ってくださいなのです。

## 〈ちいさなお祈り〉

○神様から言われた務めをする自信の無いモーセに約束してくださったように、神様はいつも私といっしょにいて、神様に従うことができるように力を下さることに「ありがとう」とお祈りしましょう。

## 〈ねらい〉

神様は、御言葉をとおしてわたしたちと約束してくださったことを、必ず守ってくださることを信じて、神様の御言葉を信頼することができるように指導する。

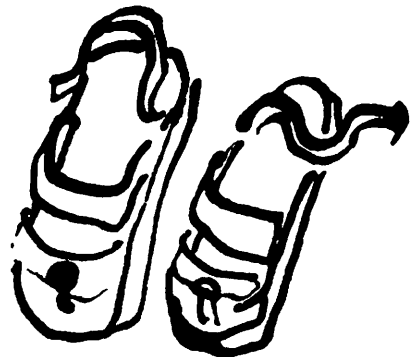
## 〈展開例〉

1. モーセさんとアブラハムさんがどんな関係であるのか聖書から調べてみましょう。(出2:1、1:1、マタイ1:2)  
アブラハム——イサク——ヤコブ——12人の息子(レビ)——……モーセ
2. 聖書を見るとアブラハムは、モーセの祖先であることが確です。では、神様がモーセの祖先であるアブラハムと約束された言葉を探してみましょう。(創世記17:4~8)  
「4 これがあなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。5 あなたは、もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。あなたを多くの国民の父とするからである。6 わたしは、あなたをますます繁栄させ、諸国民の父とする。王となる者たちがあなたから出るであろう。7 わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫の神となる。8 わたしは、あなたが滞在しているこのカナンのすべての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる。」
3. 神様がアブラハムの孫であるヤコブとなされた約束の言葉も確認しましょう。(創世記46:3、4)  
「3 わたしは神、あなたの父の神である。エジプトへ下ることを恐れてはならない。わたしはあなたをそこで大いなる国民にする。4 わたしがあなたと共にエジプトへ下り、わたしがあなたを必ず連れ戻す。ヨセフがあなたのまぶたを閉じてくれるであろう。」

4. 神様はこのようはずっと昔祖先の人々と約束してくださったことを、モーセをとおして約束してくださいました。神様の約束は変わることがありません。
5. では、神様はわたしたちにどんな約束をしてくださったのか探してみよう。  
使徒言行録16:31「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」  
使徒言行録1:11「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」
6. このような約束以外にも、また多くの約束をしてくださいました。どんな約束があるか知るためには、聖書をよく読む必要があります。そして、その約束を神様は必ず守ってくださる方であることを信じて、信頼していきましょう。

## 〈お祈り〉

愛する神様。神様は私たちに聖書をとおして多くの約束をしてくださいました。神様の約束がわたしたちの中に実現されることを信じて、その信仰の中で歩むことができるように導いてください。



私はある

**〈今日のカテキズム〉**

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズムの問7・8が挙げられています。

問7 わたしたちの神さまはどのようなお方ですか。

答 神さまは重なるお方です。  
ですから、わたしたちを包み込んでくださり、永遠で変わらないお方です。

問8 わたしたちの神さまの他に神々はいませんか。

答 神さまはただお一人しかおられません。  
わたしたちをお造りくださった神さま、生きておられる真の神様です。

☆今日の聖書の箇所は、神さまがご自分で「わたしはある」というご自分のお名前を名のられた、という点で重要です。お名前の訳し方はいろいろあって、文語訳では「有りて在る者」、口語訳では「有って有る者」、新改訳「『わたしはある。』という者」、ほかに「いま在すもの」(バルバロ訳)というものもあります。このお名前は神さまのご性質を表わしているわけですが、神さまがご自分についておっしゃったことをわたしたちの言葉で言い表そうとすると、上記のカテキズムや次のカテキズムのような表現になるわけです。神さまは全てであられるので、人間の言葉ではなかなか言い表しきれません。例えば次に記すウェストミンスター小教理問4の答になぜ「愛」が入っていないのだろうか、という疑問はよく出されますが、書かれていないからといって否定しているわけではないのです。神さまを言葉の中に押し込めてしまう誤りに注意したいですね。岡田稔先生はこの7つを少し

修正して「美」を加えたいとおっしゃっています。(『岡田稔著作集2』p. 62。『改革派教理学教本』第一編第四章の「神の本質と属性の教理」の部分は10ページほどですから、読まれることをおすすめします。どうして愛が入っていないのかについても言及されています。) カテキズムとして、この通りに覚えますが、神さまをほめたたえる意味でこれに付け加えることについては、わたしたちには自由が与えられていると思います、岡田先生がなさっているように……。ですから、カテキズムを覚える前に、自分なりの答をみんなで作ってみて、発表し合うのもいいかもしれませんね。

**ウェストミンスター小教理問答**

問4 神とは、こんなかたですか。

答 神は霊であられ、その存在、知恵、力、聖義、善、真実において、無限、永遠、不変の方です。

問5 ひとりより多くの神々がいますか。

答 ただひとりしかおられません。生きた、まことの神です。

**〈今週の聖書日課〉**

日曜日 出エジプト3:13・14

月曜日 黙示録4:8

火曜日 黙示録15:3・4

水曜日 出エジプト34:4~7

木曜日 ヨブ11:7~9

金曜日 詩編90:1・2

土曜日 マラキ3:6

テキスト 出エジプト記12章1～32節

エジプトにおいて奴隷とされていたイスラエルに対して、主はモーセを立て、ここまで9つの災いをもって、エジプト王ファラオにイスラエルの解放を迫ってきました。そしてついに主による最後の災いが、モーセからファラオに対して警告されます(11章)。しかしここで、聖書は、実際になされる最後の災い(12:29～)の前に、今回の記事を挿入いたします。従って、この箇所を取り上げようとする時、一回限りなされた主の過越の行為と、毎年繰り返されるようになる過越祭との関係を理解した上で、子供たちに教えていく必要があります。このことは、現在の私たちに当てはめれば、一回限りのキリストの十字架における救いの御業と、私たちが毎週行う礼拝行為との関係性と重ね合わせることが出来ます。ただ子供たちに説明する場合、救済的に捉えるならば、エジプトにおいて初子の死と主の過越の御業がなされた事実を紹介しつつ、そこにおいてイスラエルに与えられた救いへの喜びと感謝の思いを持って、毎年過越祭が守られるべきであることが教えられていったことを語るとよいでしょう。

「この月をあなたたちの正月として、年の初めの月にしなさい」(2)と語られていることは、二つの点で重要です。第一に、主が時間をも支配しておられ暦も定める権威を持っておられるということです。第二に、これからはなされようとしている主の過越が、重要な意味を持っていることです。

ここで求められる主の命令は、正月の十四日に、傷のない一歳の雄の小羊(もしくは山羊)の血を取って、家の入り口の二本の柱と鴨居に塗ることで(7)。そして肉を火で焼いて食べることで(8)。これらがイスラエルの守るべき命令の中心です。

「傷のない」小羊でなければならなかったのは、

欠陥のないことを意味しており、全きお方である神に完全にひれ伏し、従うことを意味しております。ですから、過越祭の時にイスラエルの人々が、前もって主に献げるべき傷のない小羊を選んでおくことにより、主への信仰を言い表すことにもなるのです。

また、家の入り口の二本の柱と鴨居に塗る血は、命そのものを語っております。主の裁きの故に、エジプトの国のすべての初子は、主によって撃たれ死にます。本当ならば、同じ罪人としてイスラエルの初子も撃たれるのです。ただ主の一方的な召しによって血の塗られた家のイスラエルの初子は、過ぎ越され、救われたのです。これはまさに主の贖いの御業であり、血はそのしるしであります。そしてこの血の贖いは、イエス・キリストの死を象徴していることも忘れてはなりません(参照：ヘブライ9:13,14, 13:12)。

主の過越を覚える時、血のしるしと同時に、忘れてはならないことが、肉を食する事です。一匹の小羊の肉を、家族が一つになり、互いに分け合い食することは、主によって救われ、命が与えられた者としての、主の家族であることを、この晩餐によって確認することができたのです。だからこそ、主イエス・キリストが十字架を前にして、弟子たちと持たれた最後の晩餐に繋がり、それが、新約の礼典としての主の晩餐へと引き継がれていくこととなります。

しかしここを学ぶにあたっては、旧約の人たちがこの主の約束を守り続けなければならなかったことを強調するのではなく、罪人であるイスラエルを、血のしるしの故に、主が過ぎ越し、救いをお与え下さった恵みであることを強調して頂きたいです。

(辻 幸宏)



テキスト 出エジプト記12章1～32節  
 参照カテキズム 子どもカテキズム問14

### 〔単元のねらい〕

私たちが信じている神様は、主イエスにあって罪人の友となって下さった方です。そして、この方は同時に、高ぶる者を罰する、正しい裁きを行われる神様です。この方の前に膝を折ることの重大さをまず覚えましょう。そして次に、力ある主を見上げるならば、希望は失望に終わらないことを覚えたいと思います。

## 「記念すべき日」

「あー、もういやだ」。イスラエルの人々は皆そう思っていました。なぜなら、威張ったエジプトの王様ファラオによって奴隷にされていたからです。

来る日も来る日も、朝から晩まで土をこね、煉瓦を作らなくてはなりません。しかも、定められた通り、一日75個を作り上げなければ酷く鞭打たれてしまいます。もちろん、王様の言い付けに背くことは許されません。死をもって罰せられてしまうからです。それに、この国から逃げ出そうにもエジプトの軍隊が目光らせていますから、それも出来ません。

もしも、皆がこのイスラエルの民の一人だったらどうでしょう。本当に生きるのがいやになってしまいますよね。

けれども、この望みなき民にたった一つだけ希望がありました。「神様の助け」がそれです。主なる神様がみ業をなして下さるのならば、私たちは救い出していただける、というこの希望です。ですから、主がモーセを遣わして下さった時、彼らは大いに喜んだのでした(4:27-31)。

さて、モーセはファラオのもとへ行き、そして告げました。「イスラエルの神、主がこう言われました。『わたしの民を去らせて、荒れ野でわたしのために祭りを行わせなさい』と。」

すると、ファラオはこんな風に答えました。「この俺様に向かって何とたわけたことを。私は主など知らぬ。奴隷のお前たちを去らせなどするもの

か！」。

皆の回りにも、人の言うことを全く聞かないいばりん坊がいるかもしれません。

実は、このファラオは人類最強のいばりん坊の一人だったのです。「この国では私が神である。私に背く者は皆処刑するぞ！」といった具合です。なるほど、王様ですから人に指図することはあっても、誰からも指図されることはありません。それでは、いばりん坊ファラオは神様の言い付けを拒み続けることが出来たのでしょうか。いいえ、出来なかったのです。

主なる神様は、言うことを聞かないファラオとエジプトに次々と災いを臨ませ、これを打たれました。

ナイルの川の水を血に変え、蛙とぶよとあぶの群れを国中に送り込み、さらに恐ろしい疫病を臨ませ、膿の出るはれ物を人と家畜に生じさせました。もちろん、神様がなされるみ業です。塵に過ぎない人間(詩篇103:14)にこれを防ぐ手立てはありません。自分の力で取り去ることも全く出来ません。

遣い上がって来た蛙が国中を覆った時、ファラオはモーセを呼んで言いました。「主に祈願して、蛙が私と私の民のもとから退くようにしてもらいたい。そうすれば、民を去らせ、主に犠牲を捧げさせよう」。ところが、モーセが主に祈って蛙が死に絶え、災いが過ぎるとファラオは民を去らせ

はしませんでした(8:4-11)。

こうして、彼は何度も約束してはこれを破り、民を行かせません。主の前に身を低くすることを拒み続けます(10:3)。

続いて、主は激しい雪を降らせ、作物も草も食い尽くすいなごの大群を送り、エジプト全土を真っ暗闇で覆われました。ついに、家臣たちも黙ってはいられず王に進言したのです。「いつまで、この男は私たちを陥れる毘となるのでしょうか。即刻あの者たちを去らせ、彼らの神、主に仕えさせて下さい。エジプトが減びかかっているのが、まだお分かりにならないのでしょうか」(10:7)。

それでも、ファラオは身を低くしません。すると、主は10番目の最後の災いを臨ませると、モーセを通してファラオに予告し警告を与えられました。その災いとは、エジプトの国中の初子が一夜の内に皆死ぬ、という重い災いです。

これまでの積み重ねられた体験を通して、モーセを通して語られる主の言葉が恐ろしいまでに確かであることはファラオにもよく分かっていたはずですが、それでも、彼はこの警告に従おうとしません。そしてその夜、子供を突然亡くした親たちの泣き叫びの声がエジプト全土にあがったのです。ファラオもその一人です。彼はその夜の内にモーセを呼んで、ついに言いました。「さあ、出て行くがいい。お前たちが願っていた通り主に仕えよ」(12:31)。

そうです。どんなに思い上がった権力者であっても、主のみ業の前では膝を折る以外にありません。主のみ前に身を低くすること、これこそ知恵の初めです(箴言1:7)。

さてこうして、イスラエルは望みがかない、ついに、主によって救いの時を迎えたのでした。そして、エジプトに対する決定的な裁きが下されるこの時、主はみ民に一つのことを命じられたので

した。それは、小羊を屠り、その血をもって過ぎ越しのための印を付けるというものでした。これは、エジプト全土に臨もうとしていた災いからみ民を守るためのものでした。つまり、主はこう約束して下さったのです。「この夜、わたしは滅ぼす者を遣わす。彼はエジプトの国を行き巡り、あらゆる家の初子を残らず撃つ。しかし、鴨居と入り口の二本の柱に小羊の血が塗られている家には、決して入らない。その家を過ぎ越して行く。」そう約束して下さったのでした。

これまで、主はみ民を特別に守ってこられました。恐ろしい疫病によってエジプト人の家畜がすべて死んだ時も、イスラエルの人々の家畜は一頭も死にませんでした(9:6)。激しい雹もイスラエルが住む地には降りません(9:26)。エジプト全土を暗闇が覆った時も、イスラエルの住む所には光があったのです(10:23)。

最後の災いが下されようとしていたこの時、み民は主の言葉を信じ、喜んでこれに従いました。こうして、イスラエルからは泣き叫びの声は一つも聞かれなかったのです。

今を生きる私たちも同じです。

神様はご自分の民を、すなわち主を待ち望む者たちを、特別に守って下さいます。確かに、イスラエルが長い開奴隷であったように、私たちも辛い状況が長く続くことがあります。しかし、暗闇に閉ざされることはありません。そして、小羊の血に印付けられた家にいたみ民が、大人も子供も誰一人として裁きにあわなかったように、主イエス様を信じ、十字架の陰に隠れる者は誰一人として裁きにあうことはありません。

主なる神様は、エジプトの地でなされたのと同じみ業を、何時でもどこでも直ぐにでも行うことの出来る力あるお方です。

主を待ち望みつつ進んで行きましょう。

(小野田雄二)

---

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記12章14節

この日は、あなたたちにとって記念すべき日となる。

あなたたちは、この日を主の祭りとして祝い、  
代々にわたって守るべき不変の定めとして祝わねばならない。

---

**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 7/23にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 7/30の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

**〈分級では〉**

夏休みは子供たちが大きく成長する時期だと思います。普段体験できない様々な経験をするからなのでしょうか？

子供たちは、その成長の結果を先生に見せたくてしようがありません。どうぞ、子供たちの成長した部分に注意を払い、成長をほめてあげ、ともによろこび、ともに祈りましょう。

何度も、何度も書きますが、先生がしっかり自分のことに注目してくれているということは、何にもまして子供たちにとって重要で、励ましになることだと思います。

今、まさに、私たちは、モーセ、ヨセフの話を通して、私たちを見守り続けてくださっている神様の話をしています。どんな時も、見守り続けてくださる神様の存在が、どれほど私たちを励まし、前に進めてくれていることでしょう。同じように、自分が如何に愛され、祈られているか、

注目されているかは、子供たちにとってとても重要で、勇気を持って前に進めるペースとなると思うのです。

**〈分級のねらい〉**

どんなに勢いのある権力者も、主の御業にはかなわないということをもまず強調したい。そして、イスラエルの民がだれも具体的にイメージすることができなかったであろう、エジプトからの脱出がいよいよ始まることを通じて、どんなに無理に思えることも、神様が守り導いて可能にしてくださいることを伝えたい。

もう一点強調したいのは、神様は、今の私たちにも働いてくださっていることです。イスラエルの物語が、単に昔のお話でなく、今の自分の問題なのだとイメージしてもらえたら大成功なのですが……そこまで幼稚科さんに伝わるのは難しいかもしれませんが、がんばってください。祈っています。

**〈祈り〉**

どんなに強い王様も、神様に勝つことはできず、まったく予想もつかない方法を通して、イスラエルの民をエジプトから脱出させてくださったことを知りました。ありがとうございます。今の私たちにも、神様はいつもいっしょにいてくださり、私たちを導いてくださいます。いつも神様がいっしょにいてくださることを忘れることがありませんように……

**〈共通工作〉**

**目的：**みんなで紙芝居を作ろう！

族長時代から出エジプトまでの一連のストーリーを創世記から申命記までのお話の流れと神様の約束の実現をこどもたちと一緒に理解していくこと

**準備するもの：**紙、色鉛筆、くれよん（絵が描ける道具ならなんでもよい）

**作業手順：**その日のお話の終了後に一番印象に残ったところをそれぞれ絵に描いてもらう。描いた絵はとっておきます。最後の“モーセの死”の単元が終わった時点で、描かれた絵とぬりえ例の絵をすべて集めて、並べると紙芝居ができあがります。最後にみんなで作った紙芝居を使って、お話をしてもよいでしょう。

## 〈子どもたちに伝えたいこと〉

エジプトに最後の災い（初子の死＝将来への希望の喪失）がおそった時、神様は選ばれたイスラエルの民の家には「しるし」をして災いが来ないようにしてくださったこと。

私たちも、神様に選ばれてこうして教会に来ることができているので、神様は私たちの「希望」を守ってくださる。

## 〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○なかなかモーセの言うことを聞いてイスラエルの人たちを自由にしようとしないうファラオに対して、神様は最後の災いを下されました。それは何だったでしょうか？

※それは、神様の言うことを聞こうとしないエジプトの人たちの初子（最初の子ども）が死んでしまう（12：12）という大きな災いでした。

その家の子どもというのは、その家族がこれからも栄えていこうという、大きな希望でもあります。日曜学校に集まっている子どもたちも、それぞれのお父さんお母さんの大きな希望です。その子どもが死んでしまうというのは、親にとって大きな悲しみ、苦しみであり、希望を失ってしまうようなできごとです。

○その大きな最後の災いがきたとき、イスラエルの人たちはどうしていたのでしょうか？

※イスラエルの人たちは、神様の指示に従って小

羊をささげ、門に血を塗ってイスラエルの人の家だという「しるし」にしました。その血のしるしのある家を神様は「過ぎ越し」され、イスラエルの家の子どもは死ぬことはありませんでした。イスラエルの希望は守られたのです。

イスラエルの人たちも「神様の言うことを聞こうとしない」こと（罪）については、エジプトの人たちと変わりはありません。しかし、神様はイスラエルの人たちを、ご自分で「神様の民」として選び、災いが来ないようにしていただきました。

私たちも、神様の言うことをなかなか聞こうとしません。しかし、神様は私を「神様の民」としてお選びになっています。こうして、教会に来て神様の言葉（聖書）のお話を聞いていること（信仰が与えられていること）がそのしるしです。神様は、私たちが神様の国でイエス様といっしょにすることができるという「希望」がなくなってしまうようなことは、決してなさいません。

## 〈ちいさなお祈り〉

○神様のいうことをなかなか聞くことができない私たちですが、神様が私を選んで教会に来ることができるようにして下さり、イエス様と一緒にいることができるという「希望」を守ってくださることに、「ありがとう」とお祈りしましょう。

## 〈ねらい〉

イスラエルの最初の過ぎ越しの出来事をおし、イエス・キリストの血と我々の救いとの関係が確実に理解できるように指導する。

## 〈展開例〉

1. 今日の話の中で、エジプトに下された神様の十の災いはどんなことだったのか、聖書を読みながらもう一度整理してみましょう。

第一の災い 血の災い (出7:14~24)

第二の災い 蛙の災い (出7:25~8:11)

第三の災い ぶよの災い (出8:12~15)

第四の災い あぶの災い (出8:16~28)

第五の災い 疫病の災い (出9:1~7)

第六の災い はれ物の災い (出9:8~12)

第七の災い 雹(ひょう)の災い (出9:13~35)

第八の災い いなごの災い (出10:1~20)

第九の災い 暗闇の災い (出10:21~29)

第十の災い 初子の死の災い (出11:1~10、29~36)

2. なぜ、このような多くの災いが与えられながら、エジプトの王はイスラエルの民を行かせなかったのでしょうか。(ファラオの心が頑な心であったので)

3. 十の災いの中で、イスラエルの人々がその災いを避けられる方法は、どんなことだったのでしょうか。

それは、傷のない小羊の血を家の入口の二本

の柱と鴨居に縫ったからです。神様の裁きはその印のついた所には下されることがありませんでした。

4. イエス様の血を考えてください。イエス様は多くの人々の罪を背負って十字架にかけられ、尊い血を流してくださいました。人は、その血によって罪が赦されます。しかし、すべての人ではなく、「イエス様がわたしの罪のために死んでくださったんだ」と信じる人だけです。わたしたち皆、そのようなイエス様の働きを信じて、神様の裁きから免れ、神様のおられる天国に生きたいと思えます。

## 〈お祈り〉

神様。わたしたちの心も頑なになりしないでイエス様を素直に信じることができるように、柔らかい心をお与え下さい。



その入口を過ぎ越される

## 〈今日のカテキズム〉

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問14が挙げられています。

問14 運が悪いと言ったり、占いを気にしたり、たたりを気にすることはできますか。

答 私たちにはできません。  
神さまより大きく強いものはないからです。父なる神さまは私たちを愛してくださるのです。ですから、たとえひとりぼっちでいてもこわくはありません。そんなとき、私たちは、「天のお父さま」とお名前をお呼びします。お祈りすると、神さまがいっしょにいてくださることがわかるのです。

☆エジプトに対して10の災いが下されました。悪しき力と神さまとの関係について教えてくれるカテキズムをご紹介します。

## ジュネーブ教会信仰問答

問28 悪魔や悪しき人々も、やはり神の主権に服しますか。

答 神は彼らを聖霊をもってはお導きになりませんけれども、神が彼らに許された限度でなければ、彼らは活動することができないように、神はその手綱を握っておられるのであります。その上に、たとえ彼らの意図や決意に反してでも、みこころを実行するように彼らを強制されるのであります。

問29 それを知ることは、あなたに何か益がありますか。

答 多くの益があります。なぜならば、もし悪魔共や不義な人々が神の意思に反して何事か行なう力があるとすれば、非常にわざわざ禍いでありませぬ。そしてまた、彼らからおびやかされている限りは、われわれは決して心に安らぎを得ることはできません。しかし神が彼らの手綱を引

き締めて、神の許しによらなければ、何事もできないようにしておられることをわれわれが知るとき、そのことによって、われわれは心を休め喜ぶことができるのであります。それは神がわれわれの保護者であり、またわれわれをまも護って下さることを約束しておられるからであります。

☆過ぎ越しの記事を通してわたしたちは、信じるべきは唯一の生ける真の神のみであることを知ります。十戒の第一戒についてのカテキズムからもそれを確認しましょう。

## ハイデルベルク信仰問答

問94 第一戒で、主は何を求めておられますか。

答 わたしが自分の魂の救いと祝福とを失わないために、あらゆる偶像崇拜、魔術、迷信的な教え、諸聖人や他の被造物への呼びかけを避けて逃れるべきこと。

唯一のまことの神を正しく知り、この方のみ信頼し、謙遜と忍耐の限りを尽して、この方のみすべてのよきものを期待し、まごころ真心からこの方を愛し、畏れ敬うことです。

すなわち、わたしが、ほんのわずかでも神のみむね御旨に反して何かをするくらいならば、むしろすべての被造物の方を放棄する、ということです。

## 〈今週の聖書日課〉

日曜日 エレミヤ17:5~8

月曜日 ヨハネ17:3

火曜日 ペトロー5:5~7

水曜日 コロサイ1:9~14

木曜日 コリントー6:9・10 (以下は偶像礼拝)

金曜日 申命記18:9~14 を避けるべきこと

土曜日 黙示録22:8・9 についての聖句)

テキスト 出エジプト記14章1～31節

イスラエルがスコトから旅立ちエタムに宿営していた時(13:20-21)、主は、引き返してミグドルと海との間のパアル・ツェフォンの前に、海辺に面して宿営するように命じます(1-2)。エジプトを脱出しようとするイスラエルにとっては、自らの逃げ道を失い、エジプト軍が追って来て、捕らえさせようとするような命令です。事実、エジプト王ファラオは、イスラエルが逃亡したことを後悔して、自らが先頭に立ち、すべての戦車を動員して、イスラエルを追いかけ(5-7)、間近に迫ります(10)。イスラエルの人々は、当初は意気揚々と出て行くのですが(8)、エジプト軍が背後に襲いかかろうとしているのを見るや、非常に恐れ(10)、モーセに不平を語ります(11-12)。つまり、初子の死と主の過越という(12章)、主の大いなる御業をもってイスラエルがエジプトを脱出することが出来たことを知った今でも、ファラオもイスラエルの人々も、エジプトを脱出する前と考えは全く変わっていないことを示しています。言い換えれば、主の存在を受け入れ信じている者にとっては主の偉大なる力ある御業であることが示されたとしても、主の存在を受け入れない人々にとっては、信仰の目が開かれておらず、偶発的に奇跡が起こっただけであり、そこに主の介入を知ることは出来ないのです。

しかし主は、御自身が力ある御業を行うことが出来る方であることをお示しになるために、これ

までのエジプトにおける奇跡同様に、モーセにこれから行う主の御業を説明いたします(15-18)。そして次に、主は、今まで部隊の前にあった雲の柱を移動させて、エジプト軍との間に置き、真っ黒な雲が立ちこめる事により、両軍が近づくことが出来なくさせます(19-20)。今にも襲いかかろうとする程接近していた(10)にも関わらず、エジプト軍はイスラエルに攻撃をすることが出来ない状態にされたのです。この一つのことをもってしても、イスラエルは主の加護を覚えることができたのです。

しかし主は御自身の御力を示すと同時に、イスラエルを完全に逃がすために、モーセの手を海に向けて差し伸ばすことにより、海の水を分け、イスラエルの人々が、海の中の乾いた所を進むことが出来るように導いて下さいます(21-22, 29)。それと同時にイスラエルを追ってくるエジプト軍に対しては、水を元に戻すことにより全軍を覆い、一人も残すことなく滅ぼされます(23-28)。

主の御業は、前もって預言され、それが完全な形となって実現することにより成就いたします。従って、この個所を学ぶにあたっては、決して、正義が勝ち悪が滅びると言った二元論で考えてはならず、主が全てを成し遂げる御力を有しておられることと、主がイスラエルに対する一方的な愛により救って下さったことを覚えることが必要であります。(辻 幸宏)

テキスト 出エジプト記14章1～31節  
 参照カテキズム 子どもカテキズム問13

### 〔単元のねらい〕

主の助けは大きく、信頼するならば失望させられることがない。このみ言葉の約束への信頼を強めたい。子供たちの日常の中にも、追い詰められるようなことが時に起こることでしょう。そうした時の拠り所、励ましとなることをねらいとしたい。

## 「落ち着いて、主の救いを見よ」

天の神様は、聖書を通して沢山の約束を私たちに与えて下さっています。何か、思い出せるものはありますか？

そう、「イエス様を信じるなら、誰でも救われる。」これも与えられている貴い約束の一つですね。

実は、コリントー10:13で神様はこのように約束して下さい。「神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることの出来ないような試練にあわせるようなことはなさいません。むしろ、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えて下さいます」。神様は、私たちを教え育てるために、時に試練（とても辛いところ）を通させられます。皆も、病気や事故、あるいは友だちからのいじめなどにあうことがあるかもしれませんが（参照ヘブライ12:1～13、ペテロー1:5～7）。「もう、とても耐えられないよ。どうしたらいいんだらう……」と、涙こぼれる日を、ある時には迎えることでしょう。けれども、神様は約束しておられます。「わたしはあなたを耐えられないような試練にはあわせない。」さらに「逃れの道を備える」と。何と頼もしいことでしょうか。

実は、み民イスラエルもこの神様の約束が本当に確かであると教えられて歩み出したのでした。今日の出エジプト記14章は、それを教えています。順に見て行きましょう。

み民イスラエルは、エジプトの国で長い長い間、奴隷にされていました。けれども、時至って神様は御力を現して彼らを救い出して下さいました。

最後は、追い立てられるようにして、み民はエジプトの地から脱出出来たのでした。もう二度とエジプトに戻ることはないと思いが思ったことでしょう。

ところがです。脱出して間もなく、神様はモーセを通してみ民に命じられました。「引き返しなさい。引き返してエジプトの町近くに帰り、海辺に宿営しなさい」と。ある者は、なぜ、そんな危険な所に行かなくてはならないんだと耳を疑ったことでしょう。それでも、エジプト脱出における主の力強いみ業を繰り返し繰り返し体験してきたみ民です。彼らは意気揚々と海岸へ向かったのです。その場所で栄光を現そうと約束された主の命令に従ったのです。

一方のファラオは考え、言いました。「奴隷のイスラエルを去らせてしまうとは、我々は一体何ということをしたのだ。奴等を連れ戻さなくてはならない……。何？ 奴等が引き返して来たのだ。フッフ、道に迷っているのだらう。ちょうど良い。今直ぐ出陣だ、全部隊に号令を掛けよ！」

海辺で、のんびり宿営していたイスラエルが妙な物音に気付いたのは、それから数時間後のことでした。「何だらう？ この地響きのような物音は……」「どんどん近付いて来るぞ……」。不安に顔を見合わせていると、一人の若者が駆け戻って来て叫びました「エジプトだ。砂煙を上げて騎兵に戦車、エジプトの全軍勢がやって来る！」

何ということでしょう。後ろからはエジプト全



軍が押し迫って来ているというのに、目の前は海。まさに袋のねずみ、逃げ場がありません。しかも、この場所には、主に従ったからこそ来ているのです。

ある者はモーセに食って掛かりました。「我々を連れ出したのは、エジプトに墓がないからですか。荒れ野で死なせるためですか。一体、何をするためにエジプトから導き出したのですか」。無理もありません。状況は最悪、絶体絶命であるからです。

なるほど、もう少し、これまでの体験が生かされても良いように思われます。つまり、彼らは主の大なるみ力を体験してきたばかりなのですから、今度も、主はきっと守って下さると、そう考えてもよいはずですが。しかし、それが出来ません。

どんなにみ業を体験して来ても、脅威が目の前に迫ると、途端にオタオタ、オロオロ……。さらには八つ当たり。「なぜ、こんな所に連れて来たんだ！」。このみ民の姿は私たち自身の姿と変わることがありません。

それにしても、「試練と共に逃れの道を備える」というあの約束はどうなったのでしょうか。

モーセは答えて言いました。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。あなたたちは今日、エジプト人を見ているが、もう二度と、永久に彼らを見ることはない。主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。オタオタせず、口を閉じろと命じます。

そして、主は大なるみ業をもって、逃れの道を備えて下さったのでした。モーセが主に命じられた通りに、杖を持った手を海の上に差し伸ばすと、主は強い東風をもって海を退かせて、水を分けられたのです。こうして、み民は陸地となった

海の底を歩いて渡り、後を追って来たエジプト軍は戻された水にのまれて全滅したのです。

ついさっきまでわめいていたみ民でしたが、今や、確信を持って言うことが出来ました。「我々は救い出された。」「海辺に導き入れられたのは、まさしく主の栄光の現れのためであった。」そして、「試練と共に逃れの道を備えるという主の約束はまことである！」。

こうして、悟りの遅いみ民も、ついに主とその僕モーセを信じたのでした。

この時、この海が割れて、海底を歩いて渡り、対岸へ逃れ行けると、そう思いついた人がいたでしょうか。きっと、一人もいなかったことでしょう。誰一人思いつきもしなかったことです。

しかし主はそれをして下さったのです。

この劇的な出来事は、神の救いの歴史的事例として、旧約聖書の中で、繰り返し言及されます。申命記11章、ネヘミヤ記9章、詩編106,136編などです。

どうか、皆も忘れないで下さい。どんなにか追い詰められ逃げ場がないと思っても、私たちの主は、そこに逃れの道を備えることが出来る方であることを、そして、信じる者たちのためには喜んで海をも分けて下さる方であることを、どうか忘れないで下さい。

「葦の海を二つに分けた方に感謝せよ。

慈しみはとこしえに。

イスラエルにその中を通らせた方に感謝せよ。

慈しみはとこしえに。」

詩編136：13～14

(小野田雄二)

---

【今週の暗唱聖句】 コリントの信徒への手紙一10章13節後半

神は真実な方です。

あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、  
試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。

---

**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 7/30にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 8/6の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……、教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

**〈分級では〉**

本日の「葦の海をわたる」の部分は、子供たちに説明するのに大変苦勞する部分ではないでしょうか。海が割れる??? とってもイメージできませんよね。「十戒」は大変古い映画ですが、そのシーンを大変劇的に表現していると思います。私も教会に行っていなかった小学低学年のころ見ているのですが、このシーンだけはなぜか鮮明に覚えていました。一連のモーセさんのお話を理解するうえでも役に立ちます。教会学校全体でまどまって見ることができるといいですね。(幼稚科さんにはちと長いかな?) 夏期学校の夜などいかがでしょうか。

**〈分級のねらい〉**

あまりにも劇的な、だれも予想もつかない出来事です。どんなに逃げ場がなくなったと私たちに

見えることでも、神様は必ず進むべき道を準備して下さっていることを伝えられればと思っています。

みなさんの中でも、もう自分ではどうしようもなくなって、神様に、本当にひたすら神様に祈った経験はないでしょうか。そのような経験を(幼稚科の子供にわかるように話すのは難しいが)話すことができると、さらに具体的なイメージをもてるのではないかと思います。

**〈祈り〉**

イスラエルの人たちは、絶体絶命のピンチに立たされましたが、神様は予想もしない方法でイスラエルの人たちを救って下さいました。

私たちも、もうだめ……と思うことがあるかもしれせん。でも、神様はその逃げ道をきちんと準備してくださっています。どうぞ、神様に信頼し、歩むことのできる者としてください。

**〈共通工作〉**

**目的：**みんなで紙芝居を作ろう！

族長時代から出エジプトまでの一連のストーリーを創世記から申命記までのお話の流れと神様の約束の実現をこどもたちと一緒に理解していくこと

**準備するもの：**紙、色鉛筆、くれよん(絵が描ける道具ならなんでもよい)

**作業手順：**その日のお話の終了後に一番印象に残ったところをそれぞれ絵に描いてもらう。描いた絵はとっておきます。最後の“モーセの死”の単元が終わった時点で、描かれた絵とぬりえ例の絵をすべて集めて、並べると紙芝居ができあがります。最後にみんなで作った紙芝居を使って、お話をしてもよいでしょう。

## 〈子どもたちに伝えたいこと〉

イスラエルの民が、ファラオの軍隊に追い詰められて絶体絶命の危機にさらされた時、神様は大きな奇跡をもちいて、彼らを救い出された。

神様はご自分が選んだものに対しては、何があるとうと守り通してくださるといふこと。

## 〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○多くの災いにあつて、とうとうエジプトの王様は、イスラエルの人たちを自由にすることにしました。ところが、実際にイスラエルの人たちがエジプトを出て行ってしまうと、王様は急に心が変わつて、軍隊にイスラエルの人たちを追いかけさせました。

エジプトでの最後の夜、子どもが殺されるという大きな災いから守られていたイスラエルの人たちは、エジプトの軍隊に追いつめられた時にどうしたでしょうか？

※イスラエルの民は、海に追いつめられると、ついこの間、大きな災いから守られたばかりなのに、神様とモーセに文句を言いました(14:10・11)。イスラエルの人たちには、神様がいつも守っていてくださる、ということが心から信じられていなかったのです。

○そんなイスラエルの人たちに、神様がくださったことは何だったのでしょうか？

※神様は海を二つに分けて、その間を通つて逃げるができるようにするといふ、大きな奇跡

を行つて、イスラエルの民を救い出してくださいました(14:21・22)。しかも、イスラエルの人たちが通つた後は、またその道を海に戻して、追いかけるエジプト軍を全滅させてくださいました。

イスラエルの人たちは、神様が守つてくださるといふことをすぐに忘れてしまうのですが、神様はそんなイスラエルの人々を守られます。それは、イスラエルの人たちが、神様に喜ばれるようなことをしたので、そのごほうびといふわけではなくて、神様がイスラエルの人たちを、ご自分のものだとして選んでくださったからです。神様に選ばれて教会に来ている私たちも、神様にいつも(神様に喜ばれないようなことをしてしまった時でも)守られています。

教師が、神様に守られていると実感した時のことを子どもたちに語ってください。そして、自分の中で、「神様は耐えられないような試練にあわすような事はなさらず、逃げ道をいつもそなえていてくださる」(Iコリント10:13)といふ御言葉に対する確信を再確認し、神様に守られているといふ喜びを子どもたちに語りましょう。

## 〈ちいさなお祈り〉

○絶体絶命のイスラエルの人たちを助けてくださった神様が、私たちにもどんな時でも助かる道を準備していてくださることを「ありがとう」とおいのりしましょう。

## 〈ねらい〉

神様は神様を信じる人々をどんなことがあっても必ず守ってくださる方であることを確信し、御言葉を信頼することができるように指導する。

## 〈展開例〉

1. 今日はいじい話を聞きました。海が二つに分かれて道が出る何てとてもダイナミックでいじいことですね。

皆の頭の中にはその聞いた話がまだ映像のように頭に残っているかも知れません。では、その場面は皆でスケッチして見ましょうか。

(作業) 皆で、分かれた葦の海を渡るイスラエルの民の姿を、スケッチブックで描いてみます。

2. 作業後、絵の中で特徴のある部分について、なぜそう書いたのか話し合います。

3. 皆は不安になったり、どうしようもなく困ったり、怖くなった時はどうします。

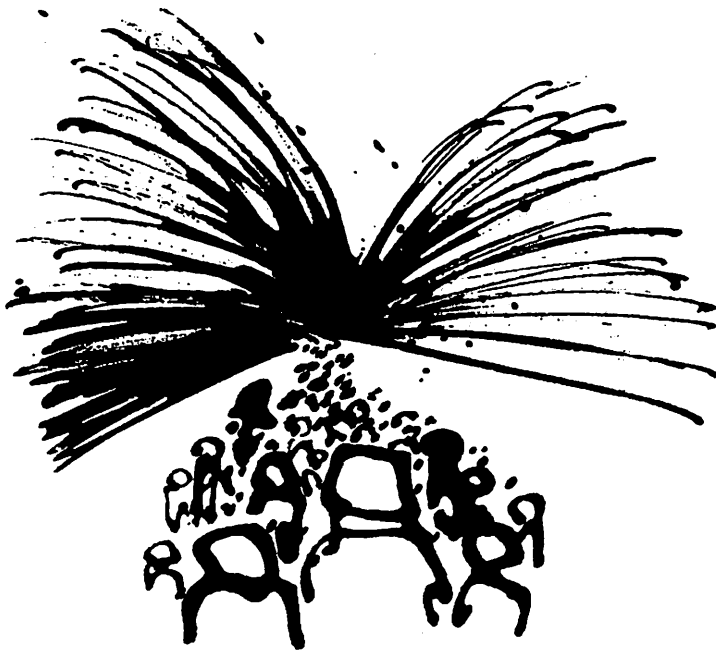
4. 神様の約束の言葉をもう一度読みましょう。

「あなた方を耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」

いつも、この約束の言葉を思い出しながら、神様にお祈りしましょう。

## 〈お祈り〉

神様。いつもわたしたちを守り、助けて下さり感謝します。わたしたちが生きる間に、たとえどんな辛いことがあっても、それを耐えるように力と慰めを与えてくださる神様を信じて、生きることができるようにお願い致します。



主が彼らのためエジプトと戦っておられる

## 〈今日のカテキズム〉

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問13が挙げられていますが、これは7月16日のページを参照してください。

☆大きな海を前にして、民は「もうダメだ」と思ったかもしれません。それでもなお信じ続ける信仰を、次のカテキズムによって養われたいと思います。主の祈り第六の祈願についての問答です。

## ハイデルベルク信仰問答

問127 第六の願いは何ですか。

答 「われらをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」です。

すなわち、わたしたちは自分自身あまりに弱く、ほんのひととき一時立っていることさえできません。その上わたしたちの恐ろしい敵である悪魔やこの世、また自分自身の肉が、絶え間なく攻撃をしかけてまいります。

ですから、どうかあなたの聖霊の力によって、わたしたちを保ち、強めてくださり、わたしたちがそれらに激しく抵抗し、この霊の戦いに敗れることなく、ついには完全な勝利を収められるようにしてください、ということです。

☆次のカテキズムも、主の祈り第六の祈願についての問答です。問287～293までありますが、スペースの関係で2つだけにしました。暗唱用というよりは、理解を深めるための参考カテキズムとしてご紹介します。「どういうこと？」と、尽きない疑問をもつ中学生のような人たちにしっかり答えてくれるカテキズムだと思います。

さすが、カルヴァン先生ですね。

## ジュネーヴ教会信仰問答

問289 その祈りの要点は何ですか。

答 神がわれわれを悪につまずくままに放置し、またわれわれが悪魔やわれわれと戦う肉にある悪しきむさぼり貪りの情に、打ち負かされるのをお許しにならないと言うこと、反対に、われわれを神のみ手をもって支え、またわれわれを護り導くために神の保護の下におくことによって、抵抗する力をわれわれにお与えくださるよにということでもあります。

問293 しかし、何ゆえあなたは神に向かって、決して悪へお導きにならないように求めるのですか。それは悪魔独特の仕事なのですから。

答 神はその憐れみによって彼の信徒たちを護り、悪魔が彼らをそそのかすことも、罪が彼らを征服することもお許しになりません。そのように、神が罰しようとする人々に対しては、単に彼らをすてて、その患を取り上げなさるばかりでなく、彼らを悪魔共にわたして、その暴虐にまかせ、彼らを無知にし、のろわるべき感覚の中に彼らをおとされるのであります。

## 〈今週の聖書日課〉

日曜日 コリントー10:13  
月曜日 ヨハネ15:1～5  
火曜日 エフェソ6:10～13  
水曜日 ペトロー5:8～11  
木曜日 ヨハネ15:18～21  
金曜日 ガラテヤ5:16～21  
土曜日 マタイ10:16～22

テキスト エフェソの信徒への手紙 2章14～22節

毎年、敗戦記念日を控える主日を平和主日として、子ども達と戦争と平和について考えるときを設けております。新しい時代を生き、使命を担う子どもたちに、聖書の平和の教えを身に着けさせることは、教会（学校）の大切な務めです。

ここでは、直接、政治的な平和問題、戦争問題が語られているわけではありません。「キリストの体なる教会の形成」が主題です。このキリストの体は、キリスト者一人ひとりによって構成されます。つまり、キリスト者とは、一つの体（全体）の肢体（部分）を意味します（5：30）。

しかしもともと、私どもは、相互に、異なる存在でした。何より、ここで取り上げられているのは、ユダヤ人と異邦人との問題です。ユダヤ人と異邦人とは、なんら接点がなく、ユダヤ人にとっては、接点を設けてはならない存在に他なりません。異邦人を「割礼のない者」（11）と呼ぶことの中に、彼らへの侮蔑、敵意が込められています。異邦人は、神と無関係な人間、「神を知らず、遠く離れて」（12・13）いたという意味です。そして実際に、異邦人は、割礼のない者に他なりません。

ところが、「今や」（13）と、パウロのいわば叫びにも似たような驚きを込めて、キリストの福音が明らかにされます。つまり、まったく水と油であったお互いを、一人の人間となられた御子キリストが、十字架についてくださったことに「よって」、「双方をご自分において、一人の新しい人に造り上げて、平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされ」（15・16）たのです。今や、キリストご自身が著者であるユダヤ人と読者である異邦人と、さらには異邦人同士をも和解させ、一つの体のなかに結び合わせて下さったのです。このようにして、平和が樹立されたのです。キリストこそ、平和そのものであり、平和の絆（4：3）です。

「私どもの平和であるキリスト」（14）が、すでに、この戦い（神との戦闘とそれゆえに人間同士の戦闘）の只中にある地上に「キリストの体なる教会」を創出してくださり、存続させてくださいました。つまり、人類の究極の憧れ、とりわけ戦争の惨禍に苦しめられている人間の究極の望みである平和を、キリストの教会は、先取りしているわけです。このような聖書に基づく自己理解を深めてゆく教会であれば、平和を創り出すために働くこと、結果的に政治的になる発言と取り組みへの参加を避けて通ることなどは不可能であることも明らか過ぎるはず。この教会が、この世界に存在させられていることの意義を思うなら、教会こそ、「世界の平和・地上の平和」の鍵を握っていることも分かるのではないのでしょうか。ちなみに、筆者の仕える伝道所は、教会の業として、地域に向けて「伝道新聞」（25,000部）を発行し、その中で、「教会は平和憲法を守ります」などとメッセージを発信しています。

大江健三郎氏は、『『新しい人』の方へ』（03年、朝日新聞社）というエッセイにおいて、子ども達に、「あなたたちには、新しい人になってもらいたいし、なる以外に平和や希望をもって生きることはいかなることもできない」と、呼びかけておられます。「新しい人」とは、ここで語られている御言葉の引用に他なりません。しかし肝心の、どうしたら「新しい人」になれるのかは、記されていません。私どもは、知っています。そのために、キリストの犠牲の御血が必要なこと、しかもすでに御血は流され、すでに私どもは神の平和を与えられ、新しい人にされていることをです。教師方は、子ども達に、「平和に生きる倫理」を語ると同時にそれ以上に、福音の勧告、つまり、主イエスを信じ、従うように呼びかけなければなりません。

（相馬伸郎）

## カテキズム 子どものための平和カテキズム

## 子どものための平和カテキズム

問 私たちが平和に生きるために、神様はどのような道をそなえてくださるのですか。

答 すべての争いは、まず人の心にやどります。

ですから、まず人々の心に平和の砦（とりで）が築かれなければなりません。

神は、キリストによって、敵対する者たちの間に、まことの平和をもたらし、

キリストの平和のなかへ、すべての人を招いておられます。

信仰によって、神様とのあいだに、まことの和解（平和）を得た私たちは、

隣人とのあいだにも、平和のまじわりをつくるよう召されます。

その平和が、国と国、民族と民族、

たがいにことなつた人々のあいだにも広げられるよう、祈りもとめます。

(1) 主イエス・キリストは、山上の説教のなかで祝福の言葉を語られました。

「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」。

平和は、神の国に生きるキリストの弟子たちが、日々これを追い求めて生きるべき、生の規範です。その意味で、キリストの教え（教会の教理）のなかに、「平和」の招きを正しく位置づけることは、すべての時代のキリスト者にとって、欠くことのできないキリストの要求なのです。

(2) キリスト・イエスによってもたらされる平和。それは、なによりも神と私たちのあいだに打ち立てられた、和解の福音です。

「こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架において、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました」(エフェソ2章15～17節)。

(3) 神が、主イエス・キリストによって始め、完成してくださった平和。それは、徹頭徹尾、神ご自身のみわざです。そのようにして、神との平和に招かれたキリスト者と教会は、平和をめぐる、種々の新しい次元についても、祈りと使命を受けとめる、「新しい人」に変えられます。

聖書のなかで語られる平和は、さまざまな次元

を含んでいます。武力や暴力で相手をおびやかすことは、最も平和から遠いことです。とくに、現代における戦争が、なにか良いものを生み出すことは決してありません。

(4) けれども表向き戦争が行われていない、というだけで、平和が実現しているといえるでしょうか。人間らしく生きる希望や可能性を摘み取ってしまうような「平和」は、戦争と同じほどに耐えられないものになります。

「平和を実現する幸い」に至る道が、いったいいつ開かれるのか、途方にくれるばかりです。けれども、キリストにある新しい人は、平和の実現にたいして、諦めない人間です。諦めないために必要な、希望の道を、まず最初に歩いてくださったのは、主イエス・キリストです。

(5) キリストが切り開かれた平和の道を、主と共に歩む人々を、神は求めておられます。決して平坦ではない。しかし、すでにキリストは、この道を歩みぬいてくださり、教会と世界を、まことの平和へと招いておられます。

日本の国もまた、平和への道からさらに遠ざかる選択に身をゆだねようとしています。和解の福音を、現代のこの状況とこの次元に、現実的に適用し、平和を求める決断に固く立つことが、わたしたちに求められています。教会は、平和に向かう新しい人として、子どもたちを教育すべき任務を負っているのです。(小野静雄)

テキスト エフェソの信徒への手紙 2章14～22節  
 参照カテキズム 子どものための平和カテキズム

### 〔単元のねらい〕

クリスチャンにとって、平和のために祈り、働くということは、この時期だけでなく、いつも求められていることです。しかし、8月15日は、わたしたちの国が「天皇」の名によって行ったアジアへの侵略戦争が敗戦によって終わった日です。また、日本の教会は戦前、日本の国が無謀な戦争へと突き進んで行く時、見張りの務めを果たすことができず、かえって、戦争に協力するという罪を犯しました。だからこそ、教会はそのことを特に悔い改め、平和への責任を自覚する月として、この8月を覚えることが大切です。

わたしたちクリスチャンは、そして教会は、わたしたちの国が再び戦争の過ちを犯すことが無いように見張って行かなければなりません。そのためにも、わたしたちは礼拝を通して、イエス・キリストこそが、「わたしたちの平和」そのものであるということ、子どもたちと共に確認し、神様への悔い改めと、平和への祈りを共に献げたいと思います。

## 「キリストこそ、わたしたちの平和」

みんなは8月15日が何の日か知っていますか。8月15日は日本の国の敗戦記念日です。今から61年前、日本が戦争に負けて、戦争が終わった日です。

その時の戦争では約二千万人のアジアに住んでいる人たちが殺されました。日本人もたくさんの方が戦争で死にました。もちろん、みんなは戦争を直接は知らないと思います。しかし、あの戦争でたくさんのお子どもたちが死んだのです。子どもたちのお父さん、お母さん、おじいちゃんやおばあちゃんも死にました。本当に戦争は恐ろしいものです。

たまに漫画や映画で、戦争がカッコイイことのように描かれていることがありますが、それはウソです。戦争は全然かっこよくありません。戦争はみんなの楽しい生活をめちゃくちゃにし、家族をバラバラにしてしまいます。自然が壊され、動物たちも殺されてしまいます。戦争はみんなを不幸にし、みんなを悲しくさせるのです。

でも、どうして人間はそんな恐ろしい、バカな戦争をするのでしょうか。神様がわたしたち人間を

造ってくださったのは、戦争をするためですか。違いますね。神様はみんなが仲良く愛し合って、平和に生きるために、人間を造ってくださったのです。それなのに、どうして人間は人を殺したり戦争をするのでしょうか。それは人間に罪があるからです。

みんなはお菓子大好きですね。でも、そのお菓子が一つしかない時、どうしますか。「僕が欲しい」、「わたしが欲しい」、と言って、ケンカをすることはないですか。相手が自分より強い場合は黙っているけど、心の中では相手のことを憎んだり、相手が自分より弱い場合は、自分が取ってしまう、ということはありませんか。たぶん、あると思います。わたしたちの心の中には「人を憎んだり」「自分さえ良ければいい」という気持ちがあります。しかし、それが罪なのです。そして、みんなの心の中にあるそういう罪が集まって、だんだん大きくなって戦争になるのです。

それなら、わたしたちは戦争ではなく、みんなと平和に生きるためにはどうしたらよいのでしょ



うか。そのためには、今お話しのように、みんなの心の中にある相手を憎んだり、自分さえ良ければいいと考えてしまう、その心を変える必要があります。そして、イエス様がマタイによる福音書の5章44節でおっしゃっているように、敵を愛し、自分を迫害する者のために祈ることが大切です。しかし、それはとても難しいことですね。自分の力でできるでしょうか。できません。それなら一体どうしたらよいのでしょうか。

実は今日の聖書の御言葉は、そのために大切なことを教えています。2章14節～16節を見てください。そこで、パウロさんは「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し……」と語っています。ここで言われていることを簡単に説明すると次ぎのようなことです。

イエス様はわたしたちを愛して十字架におかかりになってくださった。それによって、わたしたちの心の中にある、自分さえ良ければいいと思う心、相手を憎んだりする心を取り去ってくださった。だからこそ、イエス様によって、今までケンカしたり、憎しみ合っていた者たちの間にも平和

が与えられるのだ、ということなのです。

でも、なぜそんなことが起ったのでしょうか。それはイエス様の十字架には、わたしたちの罪を赦し、わたしたちに平和をもたらす、素晴らしい神様の愛があるからです。そして、この神様の愛だけが、わたしたちの世界に本当の平和を創り出すことができるのです。だからこそ、パウロさんはここで、「実に、キリストはわたしたちの平和であります」と言うことができたのです。

わたしたちはイエス様を信じていても、つい自分のことだけを考えたり、お友達のことを悪く思ったり、ケンカをしてしまうことがあります。でも、そんな時こそ、わたしたちを愛して十字架にかかってくださったイエス様の愛、神様の愛を思い出してください。そして、そんなイエス様をみんなの心の中にしっかりとお迎えしてください。そうすれば、必ずイエス様の平和がみんなの中に広がって行きます。

どうか、イエス様の平和がこの世界の中で大きく広がって、一日も早く世界中から戦争や武器がなくなって、平和な世界が実現するようお祈りして行きましょう。  
(弓矢健児)

---

[今週の暗唱聖句]

エフェソの信徒への手紙2章14節前半

実に、キリストはわたしたちの平和であります。

---

**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 8/6にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 8/13の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出している家族のみなさんのために祈りましょう。

**〈分級では〉**

お盆休みの週です。正月の休みとあわせて、教会学校の子供たちの出席状況が一番変化する週です。いつも出席している子供たちが、帰省で欠席したり、反対に帰省先の教会では新しい出席者が与えられます。子供たちはそんな環境の変化でちょっとそわそわします。欠席している子供たちのために祈ることを忘れないでください。また新しくきてくれた子供たちも、喜んで向かえ、お名前を伺い、一緒に分級を進めましょう。一回だけで次回から来ないとわかっている子供に関心を持たない先生を見かけます。大間違いです。神様がせっかく与えてくださった大事な出会いです。喜んで向かえ、ともに祈り、貴重な時間をすごしてください。

**〈分級のねらい〉**

「平和」というテーマから、無理をして、戦争

と積極的に結びつけて話す必要はないと思います。受け止める子供たちの様子を考えながら、展開方法を準備しましょう。絶対にはずしていけないのは、「キリストこそ私たちの平和の源なのだ」ということです。

人間は本当に小さな些細なことから、殺しあい、憎みあい、傷つけあう存在です。その醜さの最たるものは戦争なのかもしれません。名前も知らない、憎んでもいない相手を戦争という根拠のもとで、殺しあうのですから。

いつの時代にも消えることのない、人と人の間の憎しみ、それを解決する方法は無いのでしょうか。私たちはその答えを知っています。イエスによる平和です。しかし、それを知っていても、なお憎みあう存在なのです。先生の苦悩を正直に子供たちに話してはいかがでしょうか。幼稚科の子供たちにどのくらい伝わるのでしょうか？ みなさん不安になるかもしれません。でも、私はあんまり心配していません。彼らは幼いかもしれませんが、幼いなりに友達や家族の中で、憎しみの気持ちがあわき悩んでいる存在だからです。したがって、ある程度イメージできるはずですよ。

**〈祈り〉**

神様、私たちは、友達をわざといじめたり、意地悪することがあります。でも、それはぜんぜん楽しいことはありません。周りの困っている人たちのためにお祈りしたり、助けてあげることのできる人にしてください。

**〈みんなでお祈り〉**

**目的：**平和をつくりだすものとしてください

神さまが私たちを平和の使者として遣わしてくださった恵みに感謝しましょう。でも、私たちの力では平和をつくりだすことはできません。ですから、みんなで平和をつくりだすものとしてくださいということを素直に祈っていきましょう。「人を憎む心を取り去ってください」とか、「お友達にいじわるすることがないように」とか「お父さん、お母さんにうそをつくことがないように」など、子どもにとって日常の身近な「罪」をそれぞれにあげてもらい、それぞれが声にだして祈っていくという、祈禱会スタイルをとっていきます。平和は日常のなかで作られていくものであるということを知り、それを求めてお祈りすることができるように、大人も一緒に心をあわせて祈って生きましょう。

**〈子どもたちに伝えたいこと〉**

私たちの教会は、戦争の反省から、まことの神様にしたがって、まことの平和をつくりだすことを願った先輩たちによってつくられたこと。

私たちは、主イエスによって示された「愛」に生きることによって、まことの平和を手に入れることができるということ。

**〈展開例〉**

○8月は私たちの国：日本にとってたいせつな月です。それは、今から70年ほど前に、私たちの国が、お隣の中国や、アメリカや、イギリスなどの国と始めた戦争に負けた月だからです（8月15日）。

負けたことがくやしいから、8月を大切に思うのでしょうか？ そうではありません。私たちの国は、昔、本当の神様ではない、ただの人を「神様」にして、その神様が治める国が他の国よりも優れているとあって、戦争を始めました。その戦争に負けたことで、ただの人を神様にしていた間違いに、私たちの国が気がつくことができたからです。

※敗戦の意義を「現人神」の支配を利用しようとした「大日本帝国」が、真の神の前に打ち砕かれたことに置いて考えてみました。

○皆さんが来ているこの教会の、皆さんのひいおじいさんにあたるくらい先輩たちは、私たちの国が戦争に負けた時、本当の神様とともにいようとするのが、本当の平和のために大切な

ことだと気がついて、私たちの教会を本当の神様に従う教会になるようにしようと考えました。私たちの教会は、「日本キリスト改革派教会」というグループの教会です。むつかしい言葉ですが、「改革」というのは「新しいものになっていく」ということです。私たちは、どんな「新しいもの」になろうというのでしょうか。

それは、神様の言葉である聖書に書かれているような、イエス様といっしょにいることをよるこぶ「新しい人」になることです。

※教師は、改革派教会の創立者である先輩たちの思いを、創立宣言を読んで再確認したいと思います。

○イエス様は、一番大切な神様の命令は、神様と人を愛することだと教えてくださいました（マタイ22:37）。私たちは、神様の言うことを聞こうとしない私たちをも大切に思って、天国に行くことができるようにイエス様を送ってくださった神様の大きな愛を知って、同じように神様に大切の思われている私たちの周りの人たちを、大切にしていきましょう。いつも一緒に遊んでいる友だちばかりではなく、他の国の人たちも、同じように神様に大切に思われている人として、大切に思いましょう。そこから、本当の戦争の無い平和な世界が生まれるのです。

※真の平和は、主にあって互いに愛し合うことから始まります。そのことを、自分が神様に愛されているから、自分の内に有る平和を再確認して、確信を持って語りましょう！

## 〈ねらい〉

神様が人間を創造してくださったのは、お互いに愛し合い平和に生きるためであることを知って、平和に生きるためにどんなことをしたら良いのか考えてみる。

## 〈展開例〉

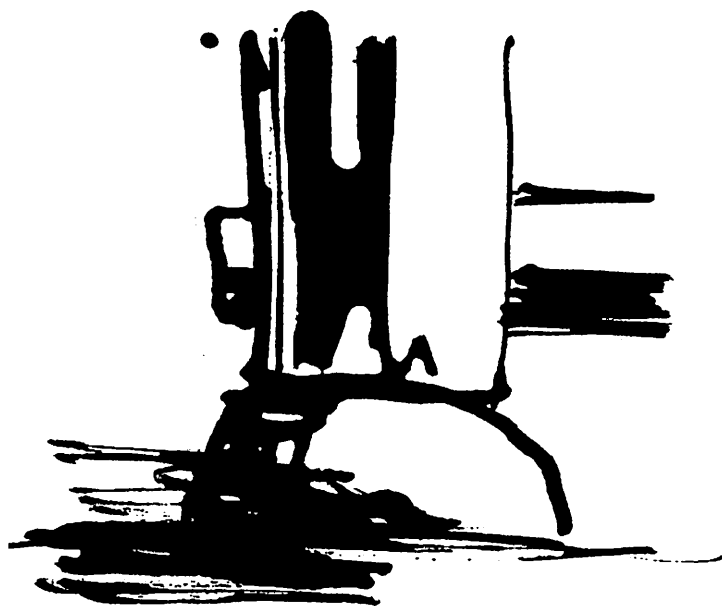
1. 今日の話はとても大切な話でありました。皆さんは平和のことをどれだけ思ったことがあるでしょうか。どんな時、「平和だな」と思いますか。
2. 反対に、皆は戦争のことをどう思いますか。
3. 国と国が戦うことも戦争ですが、一人の人が一人の人と喧嘩することも小さな戦争です。皆が仲良く暮すためには、どんなことが必要ですか。
4. 以前、日本は韓国や中国、アジアの多くの国を苦しめました。そのアジアの人々に対して、わ

たしたちができることはどんなことがあるでしょう。

5. 人々がまことの平和に生きるためには、イエス様の愛が必要です。日本人だけではなく、世界の人々にイエス様を伝えて、皆がイエス様を信じるようになると平和に暮すことができます。だから、わたしたちも皆がイエス様を信じることができるように祈っていきましょう。

## 〈お祈り〉

愛する神様。わたしたち日本は以前、戦争を起こして、アジアの多くの人々を苦しめました。このような罪の多い国ですが、イエス様の十字架の御業によって、わたしたちを救ってください。そして、多くの人々にキリストの愛を伝えることができるようにしてください。



そのかなめ石はイエス・キリスト御自身

## 〈今日のカテキズム〉

カテキズム研究のページを参照してください。

## 〈一緒に読んでみよう！〉

今日は、平和を考える日です。世の中の動きを見る時、神さまが示してくださっている愛が忘れられてしまっている、と思わされます。それは有名なコリントー13章の愛の讃歌をじっくりと読んでみると、わかってきます。

次にご紹介する方法は、南アフリカからの宣教師、デベット先生に教わったものです。

(1)まず、コリントー13:4～7を、聖書に書いてある通りに声に出して読む。

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

(2)次に、同じテキストを、「愛」を「キリスト」に置き換えて、声に出して読む。

「キリストは忍耐強い。キリストは情け深い。ねたまない。キリストは自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

(3)次は、もとのテキストを、「愛」を「私」に置き換えて、声に出して読む。

……

(3)の置き換えた文章は記しません。惨めな思いで告白しますが、それはウソだからです。わたしは、このように読むよう言われ、その通りにした時、「それはウソだ、わたしはそうではない」という思いで胸がしめつけられ、あとからあとから涙がこぼれて仕方がありませんでした。(2)をした時は「本当にそうだ」と思い、感謝の気持ちでいっぱいになったのに、続いて(3)をしたら、惨めな自分の姿を思い知らされることになったのです。平和を考える時、そうではない現実をみて、まず世の中を批判してしまうものですが、本当に反省すべきは、自分自身の中の愛の欠如なのではないでしょうか。

また、このように読んでみることによって、キリストが愛であることがわかり、それゆえにキリストが平和をもたらす方（平和そのものと言ってもいいかもしれません）であることがわかります。

まず、ご自分で同じようにコリントー13:4～7を読んでみてください。もし何も変わらないのなら、分級でこの方法をなさることはおすすめしません。

御言葉の力を感じてくだされば、と思います。

## 〈今週の聖書日課〉

日曜日	ローマ12:9～21
月曜日	ローマ14:17～19
火曜日	コリントー1:10
水曜日	ガラテヤ6:10
木曜日	ヨハネー2:7～17
金曜日	フィリピ2:1～11
土曜日	マタイ22:37～40

テキスト 出エジプト記16章1～36節

我々のテキストは、「民が不平を言う」というモチーフから始まる(2,3節)。それは民数記にも見られるものであるが、我々のそれとは、民に対する神の反応が明らかに違う。民数記では、神は民の反逆に対して激しく怒り罰したもう。そしてマナの物語、メリバの泉の物語は、今度は神の恵みを忘れた民の反逆を際立たせる意図を持って語りなおされる(民数記11:1～34,20:1～13)。我々のテキストにはそのような意図はまだない。それゆえ、ここでの「民の不平」は、むしろこの前の出エジ14:10～12と似ている。あの海渡りの時と同様に、神は彼らの不平を飲み込んで救いを与え、その恵みの大きさを彼らの記憶に刻み付けられる。契約締結直前にして、ぶつぶつと文句ばかり言う極めて人間くさいイスラエルを愛しく守り続ける神の姿がここにも見られる。やがてそのような恵みも忘れて、反逆を企てる民の愚かさを知りながらも、神はこの物語によって、恵みの記憶を残してくださるのである(32～34)。

ここでは「天から与えられたパン」としてのマナの異常性に目が向けられがちだが、むしろ注目すべきはその自然性であるだろう。マナとは何かについては諸説あるが、ギョリュウ科の低木の果実から樹液を吸うアブラムシの一種が排出する、黄白色の薄片や球状の分泌物だとする見解が有力である。それはでんぶん質や糖分が豊富であり、シナイ半島に住む人々は今でもそれを集めて一種のパンに焼き上げる(また、それをマナと呼ぶ)とのことである。またうずらについても、アフリカや地中海からの渡り鳥は、飛ぶのに疲れているために、人が手でつかめることがしばしばある。このように、この物語において示された神の恵みは単に異常な出来事ではなく、むしろ普通ありうることであり、日常生活の中で十分に見出しうるものであったという認識が重要であろう。神は日

常生活において繰り返し祝福を与えられる方である。神の奇跡の御手は、我々が見出しうるところにある。神は世界を創造された大いなる力と同じ力を持って日々摂理され、「いつもと変わらない今日」を用意し、我々を養ってくださる。イスラエルもまたそのようにして、荒野での40年の歳月を養われたのである。

そしてここでは、一日に必要な分だけの食料を神が確かに与えてくださるといふ恵みが豊かに示される。我々は日毎のパンを求めればよい(マタイ6:11)。有り余るほど富を積んでも神の前に豊かになることはない(ルカ12:13～21)、また明日は何を食べるか思いわずらう必要もない(ルカ12:22～30)。この恵みに裏付けられてこそ、「むさぼることなかれ」という第十戒もまた説得力を持つ。そしてこのテキストで実は最も問題になっているのは、日毎の必要を神に委ねる信頼にたてるかどうかであると言うこともできるだろう。神はまさにそのことを試すために、この出来事を起こされるのである(4節)。

またこのテキストに示された安息日の祝福についても触れねばなるまい。神は安息日の前日だけは、食料の貯蓄をよしとされた。それは我々を安息日に休ませるためである(29節)。神はエジプトでの休みなしの隷属生活からイスラエルを解放し、「休む」ことを要求されている。その意味で安息日の休息の恵みは、この世界のあらゆる抑圧に対する神の宣戦布告であり、神の民の身体的・精神的平安を奪わせはしないという、慈しみ深い神の御意志の先鋭化だと言うことすらできよう。それゆえ我々はこのテキストから「休む」ことを教えられるべきである。安息日を神と共に休み、神のもとに憩う日として聖別することへと招かれた幸いを思い、この祝福された神の民のリズムへと幼な子たちを招きたいものである。(坂井孝宏)

テキスト 出エジプト記16章1～36節  
 参照カテキズム 子どもカテキズム問82

### 〔単元のねらい〕

イスラエルの民は奴隷状態だったエジプトを脱出し、救いを体験した。さらにイスラエルの民は何もない荒野で肉の糧を必要としていた。彼らは神が神の民を養われることを忘れ、神に対して疑いを持ち、不信仰をあらわにした。しかし憐れみに富む神はイスラエルの民を、天からの食物であるマナをもって養われ、神様は彼らに一日一日の分を与えられ、安息日の前には二日分を与えられ、安息日には食物の心配をせずに神のみを礼拝できるよう配慮された。この神からの食物こそ霊の糧、キリストをさしている。

## 「天からの食べ物」

皆さんはお腹がすいた経験をしたことが何度もあるでしょう。食べるものが何もない、どこにもないとしたらどうでしょう。こんなにつらいことはありませんね。

奴隷状態だったエジプトを脱出したイスラエルの民も、荒野でこのような経験をしました。このとき、彼らは何をしたのでしょうか。自分たちを救ってくださった神様に信頼して祈り、願ひ求めればよかったです。しかし彼らはそうせず、なんと「エジプトで腹いっぱい食事をして死んだほうがましだった」と、文句を言い出したのでした。こんな不信仰をあらわにした彼らでしたが、神は彼らに憐れみをかけるのをお忘れになりませんでした。なんと、神は「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。」とお約束されたのでした。神はイスラエルの人たちを、この天からのパン、すなわちマナをもって養われたのでした。

彼らは神様の約束を信じてマナを集めに出かけました。ある人々は沢山、あるものは少なく集めました。しかし、ここで不思議なことが起こっていたのです。沢山集めた者も少ししか集められなかった者も、ちょうど一人に一オメルずつの割合で、家族の数に従って必要なだけありました。しかも神様は、イスラエルの人々に一日一日の分をあたえられただけで、決して一週間分を一度に与

えられることはなさいませんでした。もう一つ不思議なことは、六日目には二日分のマナを集めることが出来、多くも少なくもありませんでした。こうして彼らは七日目に休むことが出来たのでした。

また、マナは、毎日朝早く拾い集めなければなりません。太陽が昇り、日が熱くなるとマナは溶けて消えてしまいました。ですから早朝にマナを集める働きを息ると、拾うことが出来ませんでした。

この箇所から教えられることがいくつかあります。

その第一は、神は天からの食物をもって私たちが養ってくださるということです。このマナは確かに体を支える食物ですが、同時に私たちの魂を養う食物でもあるということです。つまり「霊の糧である」ということです。なぜならこのマナは天から下ってきたパンだからです。イエス様ご自身も「わたしは、天から降ってきた生きたパンである」(ヨハネによる福音書16:51)とっておられます。使徒パウロも「霊的な食物」(コリントの信徒への手紙一10:3)と語っています。

第二の教えは、このマナは一日に一日分だけ与えられたということです。これは、私たちにとって、どういう意味があるのでしょうか。……神様

が与えられる恵みによって、今日一日を十分に生きなさい、ということでしょう。この点、イエス様は私たちにとってよい模範となるでしょう。イエス様には絶えず迫害や試練が待ち受けており、いつ、どんなことが待ち受けているかわかりませんでした。また、彼を捕まえ、命を奪おうとする者に、絶えずつけねらわれておりました。しかし、イエス様はいつも心の平静さを保っておられました。弟子たちが心配したときも、「わたしのときはまだ来ていない」と言われたように、一日一日を生き抜いておられました。イエス様は、「明日のことまで思い悩むな、明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」(マタイによる福音書6:34)と語っておられます。

皆さんには昔の出来事、また反対に、これから将来自分に何が起こるか心配でいっぱいの人もあるでしょう。でも安心してください。神様にそれらを全てゆだねてください。(マタイによる福音

書11:28)。神様はその昔イスラエルの人たちを天からのマナで養ってくださったように、皆様にも今日を精一杯生きる天よりのマナをもって養っていただきます。

第三の教えです。マナは朝早く集めることです。皆さんは早起きですか。あわただしい朝ですが、その日、一日生きるための魂の糧は、朝早く起きてキリストと交わるときに、御言葉から受けることができます。朝少し早く起きて、イエス様と交わる時間をとってください。きっとすばらしい一日となるでしょう。

最後は、神様がイスラエルの人たちに六日目に二日分のマナを備えてくださったことから教えられましょう。神様のほうから、七日目の休みのため必要な糧を六日目に二日分備えてくださったのです。ですから、土曜日を主の日への備えの日として日曜日の分まで準備し、日曜日、主の日は全ての業を休み、神様に会い、本当の安息を実現いたしましょう。(片岡正雄)

---

[今週の暗唱聖句]

ヨハネによる福音書6章35節

イエスは言われた。

「わたしが命のパンである。

わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、

わたしを信じる者は決して渴くことがない。」

---



**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 8/17にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようにお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 8/20の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教室の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

**〈分級では〉**

夏休みも、残り2週間となりました。お盆休みで帰省した子供たちも帰ってきて、分級ももとのメンバー構成に戻ったのではないのでしょうか。みんな真っ黒な顔しているんでしょうね。子供たちの健康を守ってくださった神様に感謝します。子供たちは、欠席していた間に起きたことを話したくてしょうがありません。何度も書きますが、準備していた内容をすっ飛ばしてでも、子供たちの話に耳を傾けてあげましょう。(でも、毎週、こればかりでは、雑談会になってしまいますので注意が必要です)

**〈分級のねらい〉**

個人的な話をして申し訳ないのですが、私はこのマナの箇所が大変好きです。何度、この箇所から救われたことでしょう。自分の力に頼ってしま

い、あれこれ悩む自分、いらだつ自分を、何度も、何度も助けてくれました。

神様は、マナを私たちにくださいました。それも絶妙な方法で、朝早く取りにいかねばならず、それぞれ必要なものを一日分くださいました。ただし、安息日の前の日には二日分くださり、安息日に集中できる環境を作ってくださいました。神様は、日々必要なものを私たちに与えてくださり、私たちを豊かに養ってくださる方なのです。まず、その部分が子供たちに伝わればと願っています。

しかし、私たちは、これで満足しない存在です。神様の恵みを当たり前のように受け取るようになり、しまいには必要以上に富を増やすことに熱中し、自分中心的な行動に走ってしまう者です。それぞれの神様からのマナに満足できなくなった時、平和がくずれ醜い争いが各所で生じるのです。自分中心でなく、神様にゆだねて、神に従って歩む時、私たちは平和を得ることができるのではないのでしょうか。

**〈祈り〉**

神様は私たちに必要なもの、必要な量をご存知なかつたです。神様が与えてくださる食べ物、飲み物、空気……。すべてに不満をいうことなく感謝することができますように。世界には、食べることができず困っている人がいます。その人たちを助けることができますように。

**〈共通工作〉**

**目的：**みんなで紙芝居を作ろう！

族長時代から出エジプトまでの一連のストーリーを創世記から申命記までのお話の流れと神様の約束の実現をこどもたちと一緒に理解していくこと

**準備するもの：**紙、色鉛筆、くれよん（絵が描ける道具ならなんでもよい）

**作業手順：**その日のお話の終了後に一番印象に残ったところをそれぞれ絵に描いてもらう。描いた絵はとっておきます。最後の“モーセの死”の単元が終わった時点で、描かれた絵とぬりえ例の絵をすべて集めて、並べると紙芝居ができあがります。最後にみんなで作った紙芝居を使って、お話をしてもよいでしょう。

## 〈子どもたちに伝えたいこと〉

神様は、私たちに必要なものを必ず準備してください、ということ。

それは、私たちの思いではなく、神様の御心によって決められることだが、それで私たちに不足が生じることは無い、ということ。

## 〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○旅の途中で食べるものがなくなってきたイスラエルの人たちは、文句を言いはじめました。葦の海で絶体絶命のところを、神様の大きな力で助けられたというのに、ちょっとおなかですいただけで、「あ～あ、奴隷でもエジプトにいた方が、おなかいっぱい食べられたからよかったなあ～」と言うのです。エジプトにいたときは、奴隷なんていやだと思っていたのにね。

神様は、そんな自分勝手なイスラエルの人たちをどうしたでしょうか？

※神様は、思知らずなイスラエルの人々に腹を立てることもなく、マナとうずらを与えて彼らを満足させてくださいました。

神様は、私たちが神様の大きな恵みを忘れてしまった時でも、私たちに必要なものを確かに与えてくださいます。それは、神様からの恵みが、私たちのしたことのごほうびだからではなく、神様が私たちを大切に思っていてくださることのあらわれだからです。

教師の皆さんには、思わぬところで神様からの助けを与えられた経験がありませんか？

あったら、そのことを子どもたちに話してあげてください。

○イスラエルの人たちは、自分のほしだけ、マナを集めました。ところが、マナは多く集めすぎた分は虫がわいたり臭くなってしまいました。そして、少ししか集めることができなかつた人にも、その人がおなかいっぱいになるだけのマナはあったのです。

※マナの量は、イスラエルの人々の欲しい量ではなく、神様の決めた量が与えられました。しかし、それでみんなが満足できるだけの量はあったのです。

神様からの恵みを、私たちは自分のほしだけを求めますが、神様はいつもそれに応えてくださるわけではありません。しかし、私たちは、自分の欲しいだけは与えられなくても、神様の下さったもので確かに満足できるのです。それが、神様に信頼を置く者の幸いでもあります。

## 〈ちいさなお祈り〉

○神様は、私たちのいるものをよく知っておられて、私たちのいるだけのものを与えてくださいます。そのことを「ありがとう」とお祈りしましょう。

**〈ねらい〉**

わたしたちが日々生きるのは、肉のパンだけではなく、神様が与えてくださる霊の糧（御言葉）が必要であることを覚え、御言葉の大切さを認識させる。

**〈展開例〉**

1. この世の中で私たち人間が生きるのになくはないものというのは、どんなことがあるか話し合しましょう。

例) 水、空気、食べ物、人（仲間）、お金

2. もちろん、そのようなことがなかったならば生きることができない、あるいは難しいことでしょう。しかし、もう一つ、イエスを信じるわたしたちに忘れてならないことがあります。それは何でしょうか。

3. それは神様の御言葉です。先生の話の中にありましたように、私たちは毎日パンやご飯を食べますが、それと同時に神様は私たちに霊の糧

（パン）である御言葉を与えてくださいました。それは、天から降ってきたマナのように、天におられる神様が与えてくださったイエス様についての話です。わたしたちが毎日食事をするように、御言葉を毎日食べる（読む）ためには、どうすれば良いでしょうか。

4. 家の人々が皆教会に来ているならば、毎日家庭礼拝を持つことを勧めます。自分一人で教会に来ている人であるならば、寝る前に聖書を少し読んで、お祈りして寝るようにしましょう。この御言葉は必ずこれから生きるために役に立つことになります。

**〈お祈り〉**

神様。イスラエルの人々に必要な食べ物を与えて下さったように、わたしたちもつねに神様の御言葉を必要に応じて与えてくださって、わたしたちが神様の御心に生きることができるようになってください。

## 〈今日のカテキズム〉

☆参照カテキズムとして子どもカテキズム問82が挙げられています。

問82 「我らの日用の糧を今日も与えたまえ」では、何を祈り願うのですか。

答 神さまこそが、私たちのすべての必要を備えて、楽しませてくださるので、私たちの毎日の食べ物をください、神さまにのみ頼らせてください、ということです。

☆ハイデルベルクとジュネーヴの、主の祈り第四の祈願についての問答を抜粋しておきました。

## ハイデルベルク信仰問答

問125 第四の願いは何ですか。

答 「われらの日曜の糧をきょうも与えたまえ」です。

すなわち、わたしたちに肉体的に必要なすべてのものを備えてください、それによって、わたしたちが、あなたこそ良きものすべての唯一の源であられること、また、あなたの祝福なしには、わたしたちの心配りや労働、あなたの賜物でさえも、わたしたちの益にならないことを知り、そうしてわたしたちが、自分の信頼をあらゆる被造物から取り去り、ただあなたの上のみ置くようにさせてください、ということです。

## ジュネーヴ教会信仰問答

問276 神はわれわれに、われわれの手の働きによって糧をえることを命じておられるのに、どうして、あなたの糧をお与え下さいと神に求めるのですか。

答 たといわれわれは生きるために働かなければならないとしても、われわれの労働ややりくりや勤勉がわれわれを養うのではなく、ただわれわれの手や労働の上であってこれ

らを実らせる神の祝福のみによるのであります。さらにまた、われわれがどんなに自由にしうる食肉をもっている、われわれを養うのは肉ではなく、それを手段としてお用いになる主のみ力のみであることを理解しなければなりません。

問277 あなたに与えられるように祈るのですから、何ゆえそれを、あなたと呼ぶのですか。

答 それがわれわれのものどされるのは全くわれわれにもとづくものではなく、神のご好意によるのであります。また同時にそこからわれわれは、他人のパンを求めずに、われわれが神の命に従って、正当な手段でえるべきパンを求めることを知らされるのであります。

問279 この祈りがあらゆる人に共通であるとすれば、貯蔵物や長年のための豊かな財産をもっている富める者たちが、どうして一日分を求めることができますか。

答 富める人々も貧しい人々も、彼らの所有しているものは、主が彼らにその使用を許し、また主の恵みをもってそれが役立つようになさらないならば、何の役にも立ちえないことを理解しなければならないのであります。従ってわれわれが所有しているものでも、神がそれをわれわれにお与えにならない限り、われわれは何も所有しないのであります。

## 〈今週の聖書日課〉

日曜日 詩編145：14～16

月曜日 マタイ6：25～34

火曜日 使徒14：17

水曜日 使徒17：25

木曜日 申命記8：3

金曜日 詩編37：16・17

土曜日 詩編55：23

テキスト 出エジプト記19章20節～20章17節

いよいよ19章から出エジプト記は後半に入り、イスラエルの宗教制度の根本が記される。特に大切なのはこの19～24章までの契約締結、律法授与の場面である。「ここはモーセ五書だけでなく、旧約聖書全体の心臓部に当たる」（フランシスコ会訳脚注）。そしてそれは神とイスラエルの結婚式にも例えられる爆発的な喜びの出来事である。救い、救われたという神とイスラエルの蜜月の関係は、ただの恋人関係で終わることなく、互いに責任を分かち合う夫婦の関係へと移行する。エジプトの手から救い出した種々雑多なイスラエルの民を、名実共に神を礼拝する『神の民』とするために、神が民と契約をむすばれる。そのような崇高な場面がシナイ山で展開される。その中心がこの十戒授与の場面であろう。

言い尽くされたことではあるが、十戒を語る上で欠かすことの出来ないのは序言である(20:2)。我々にとって神の戒めに従うとは、冷ややかな律法主義的生活の強制に服する冬を意味しない。そんなことは決してありえない。そう言い得る根拠は唯一つ。この十戒が、解放という神の恵みによって創り出された、喜びに溢れる出来事に基づいているからである。だから我々はそこに温度を感じる。神の愛の温度である。申命記7:6～8, 32:10～11、またエゼキエル書16:2～6を必ず読んでいただきたい。この愛深き主に選ばれた神の民が、この十戒にはじまる律法において、契約が要求している神の意志を聞き取ることが許された。これを受け取ることで、彼らは神との特別な関係に入る。「わたし」と「あなた」の濃密な関係である。我々もまたこの人格的關係に自覚的に踏み込んで、自覚と責任を伴った神の民のアイデンティティーを確保すべきである。「十戒は聖なる国民のよく練られたプロフィール(B.チャイル

ズ)」である。「私たちはこの戒めを与えられた神の民だ」という自己紹介ができてしまうほどに、我々にとって十戒に集約された神の意志に従うということは、本質的かつ生命的なことなのである。

また主イエスは律法の要約として、「神を愛すること」と「人を愛すること」を挙げられた(マタイ22:34～40など)。十戒の構成を考える際に、第一戒から第四戒を前者に、第五戒以降を後者に結びつける見方が一般的であるが、また、前半の五つの戒めが前者に、後半の五つが後者に関係するとする見方もある。その理解に基けば、「心を尽くして神を愛する」とは、あらゆる領域における神の主権(第一戒)と、自由と超越性(第二、三戒)を重んじ、時間・空間における宗教的秩序(第四、五戒)を重んじることとされる。また「自分を愛するように隣人を愛する」とは、個人主義的・主観的な倫理を超えた、共同体形成を志向した社会倫理の領域の問題として捉えられるべきであり、それは隣人＝共同体成員の生命(第六戒)、結婚の権利(第七戒)、行動の自由(第八戒※近年の研究では、この戒めは物を盗むことではなく、誘拐の禁止を命じたものだと言われている)を重んじ、他人の名誉と法的場での共同体の基本秩序を維持し(第九戒)、共同体成員の財産の不当な所得を慎む(第十戒)ことだと言える。いずれも「神を愛し、人を愛する」という事柄の深さ・広さや、それを生活の中で具体化していくための道筋が一層明瞭にされる点で、意義深く重要である。

また十戒のそれぞれの戒めについては、ウェストミンスター大教理問答(問91～152)、同小教理問答(問42～81)に詳しいので、私が付言するまでも無いだろう。(坂井孝宏)

テキスト 出エジプト記19章20節～20章17節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問39,40

### 〔単元のねらい〕

奴隷状態だったエジプトを脱出することが出来たイスラエルの民は、神の救いを体験した。彼らは、さらに約束の地に向かって荒れ野を進んだ。この旅においてイスラエルは救いの神をイスラエル民族の神とし、自分たちは神の民として歩むようになる。この民は、これから神の民としてどのようにして間違った道にそれずに正しく歩むのかを示すおきてを与えられた。そのおきての中心的なものが十戒である。このおきてを通してイスラエルの民は神様の御心を知り、神様にどのようにしてしたがって歩むかを教えられた。神様は他のどの民でもなくイスラエルを救いの民として選ばれて、世界中の人々にご自分の救いのお考えと道をこのおきてを通して示された。人間の幸せは神様の救いを知り、この救いに感謝と喜びをもって従うことである。このような歩みこそ神の子、神の民として恵みを得る唯一の歩みである。

## 「人に恵みと幸せをもたらす律法」

皆さんは人から何かを命令されたり、指示されたりすることをうれしいと思いますか。自分は人に干渉されずにもっと自由に生きたい、行動したいと思うでしょう。実は私もそうでした。でもちょっと考えてください。人からの助言を聞こうとせず、それを無視して自分のわがままを通そうとして自由に行動したらどうでしょうか。とんでもない失敗をしてしまうこともあります。たとえばお母さんと一緒にデパートやスーパーに買い物にいったら、お母さんが「迷子になってはいけないから、必ずお母さんと一緒にいて離れてはいけませんよ」という約束をしたとします。けれども、その約束を無視して勝手におもちゃ売り場やお菓子売り場に興味がそそられて動き回ってしまったとします。その結果はどうでしょうか。お母さんを見失い迷子になって不安で悲しくなって泣いてしまうことになるかもしれませんね。

実は私も人の勧めや約束を破って大失敗をしたことがあるのです。体の健康のために規則正しい生活をし、適度な運動、からだの健康のために良いと思われる食事をとるようにいわれておりました。さらにはみんなから人間ドックといわれるからだのための健康チェックのために健康診断を一

年に一回は受けるようにと言われておりました。私も、そのときはみんなと約束をしながら、「自分の体は自分が一番よく知っている。自分は他の人よりも健康であるはずだ」とうぬぼれており、約束をいつしか忘れてしまいました。このように私を愛し健康を心配してすすめてくれた人の忠告や助言を無視して生活してきた結果どうだったでしょうか。……私のからだの中の見えない部分はだんだんと悪くなってきて、ついには胸が急に痛く苦しくなり、救急車で病院に運ばれるようになってしまって、緊急手術、入院となってしまい、しばらく不自由な生活が続くようになってしまったのです。

神様も同じです。私たちがこれから歩む道を見失い、人生の迷子にならないように、またいつも心と魂の健康をそこなわずに健康が守られ、幸せに暮らすことが出来るようにと望んでおられます。そのために神様はおきてを与えられたのです。このおきては神様の私たちに対する愛と恵みの表れなのです。ですから、このおきてを、神さまからのすばらしいプレゼントとしてしっかりと受け取り守るとき私たちは安全であり幸せになれるのです。

昔、神様はシナイ山で指導者モーセを通してイスラエルの民にこのおきて与えられました。それは十の戒めからなっていたので十戒と呼ばれました。戒めの内容は大きく分けて二つです。一つ目は、第一戒から第四戒までで、人はどのように神様を愛しお従いして行くかということです。また二つ目は第五戒から第十戒までで、どのように隣人を愛してゆくかということです。

新約聖書ではイエス様がこの二つのおきてをまとめて次のように言っておられます。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の戒めである。第二もこれと同様である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」

昔、ある先生がこんなことを言われたのを今でもはっきりと覚えています。「もしもあなたが不幸になりたいと思うなら神様や隣人のことを考えずに一生懸命、自分の欲望を満たすために、自分のためだけに生きなさい。必ずその先には不幸という人生が待っています。」逆に「もしもあなたが幸福になりたいと思うなら神様や隣人のことを考えて一生懸命に生きなさい。結果的には必ずその先には幸せという人生が待っています。」……

何かこう聞くと妙な気持ちになりますね。神様や人を愛し仕えて行くことがどうして自分の幸せにつながるのか。不思議なことに、この世での幸せの法則と、神様から与えられる幸せの法則は正反対であるのです。この世では自分さえよければという考えがはびこっており、その結果、隣人が犠牲になっていることが多いのです。この神様の律法に反した自分中心の心の思いや実際の行動を罪と呼んでいます。この罪こそが人間の不幸の原因なのです。

でも、神様の願いは、みんなが神様からの救いと恵みに生き、幸せになることです。だから私たちも神様の愛のお心を知り、この救いと恵みを多くの人々に伝えなくてはならないのです。

イエス様は人を罪から救うために、幸せに暮らしておられた天から降られ、十字架において人間の不幸の原因である罪から開放して下さり、救いを与えてくださったのです。この恵みに感謝し、私たちもこれからは、感謝と救いの喜びを持って、神様から律法、つまり神様を愛し仕え、神様が大切にしておられる人々を愛し仕えてゆきましょう。

(片岡正雄)

---

[今週の暗唱聖句]

詩編119編1節

いかに幸いなことでしょう。

まったき道を踏み、主の律法に歩む人は。

---

**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 8/20にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようにお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 8/27の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教室の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

**〈分級では〉**

いよいよ今週で夏休みも終わりですね。早いところでは、新学期が始まっているのではないのでしょうか。夏休みは本当に子供たちが大きく成長する時期と思います。前にも同様のことを書きましたが、口に出して、子供たちをほめることを忘れないでください。

**〈分級のねらい〉**

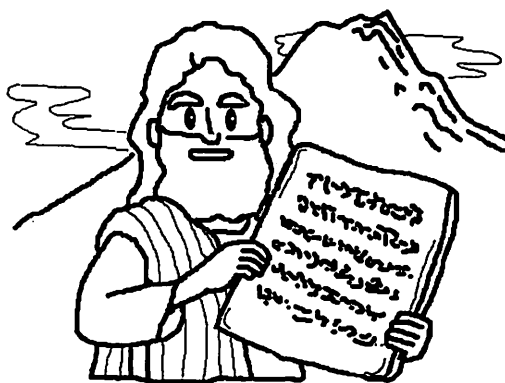
十戒とは私たちにとって何なのか。この部分をお子たちと話せたらと思っています。

この際、十戒が私たちを縛る単なるルール・決まりでないこと、むしろ十戒による恵みを強調できたらと思います。

私たちは十戒を通じて、「心を尽くして、神を愛すること」、「自分のことのように隣人を愛すること」のとても大事なふたつのテーマを学びます。

私たちは十戒により明確に、これが神様の御心であると知ることができるのです。私たちには生きる明確な道しるべがあるのです。なんと大きな恵みでしょう。道しるべがないで旅することを想像してみてください。

十戒は決して私たちを縛るものではありません。私たちが神様の恵みのもと豊かに、平和に生きて行く上での道しるべ、神様の恵みなのです。

**〈祈り〉**

神様、神様は私たちに十戒を与えてくださいました。そうして、神様を愛すること、私たちの周りの人たちを愛することが、神様の御心であることを教えてくださいました。大事な二つのことをいつも忘れることがありませんように助けてください。

**〈共通工作〉**

**目的：**みんなで紙芝居を作ろう！

族長時代から出エジプトまでの一連のストーリーを創世記から申命記までのお話の流れと神様の約束の実現をこどもたちと一緒に理解していくこと

**準備するもの：**紙、色鉛筆、くれよん（絵が描ける道具ならなんでもよい）

**作業手順：**その日のお話の終了後に一番印象に残ったところをそれぞれ絵に描いてもらう。描いた絵はとっておきます。最後の“モーセの死”の単元が終わった時点で、描かれた絵とぬりえ例の絵をすべて集めて、並べると紙芝居ができあがります。最後にみんなで作った紙芝居を使って、お話をしてもよいでしょう。

また、字が書ける生徒さんには、十戒を書いて作ってもらいましょう。



## 〈子どもたちに伝えたいこと〉

十戒は、私たちをしばりつけるものではなく、私たちが道に迷わないようにしてくださる「ガイドライン」であるということ。

## 〈展開例〉

十戒をみんなで読んで見ましょう。

○みなさんは、この十戒を読んでどんな気持ちができるでしょうか。

「なんだか堅苦しいなあ」と思ったかもしれませんね。もっと好きなようにしていきたいのに、神様は決まりばっかり作って、面白くないと思うかもしれません。

神様は何のために、この十戒を下されたのでしょうか。神様は私たちを規則でしばりつけてしまいたいのでしょうか。

※私たちは「自由であること」が何よりも大切なことと思っています。確かに、人が他人の自由を奪って奴隷のようにしてしまうことは許されることではありません。しかし、私たちは本当にどこまでも自由であることができるのでしょうか。

○私たち人間が神様に造られてからのことを、少しおさらいしてみましょう。

- ・人間は、神様から「地球を支配する」という役目をいただいて、神様に従うように造られました（教案誌21号4月30日参照）。
- ・しかし、人間は、神様に従うより、自分が神

様みたいになって好きなようにしていたくて、神様の言いつけを破ってしまいました（5月7日参照）。

- ・けれど、神様はそんな人間を「もう知らない」と見捨てたりすること無く、サタンに打ち勝って守られる道を準備していただきました（同）。

※人間が造られた時のことを見てみると、人間というものが神様に従うように造られていることがわかります。従うように造られた人間は、自分の好きなようにできる完全な自由には耐えられないのです。神様に従わないなら、罪に従うことになってしまい、私たちは滅びへの道をたどります。

○神様は、私たちが、また神様に従って神様のところに行くことができるように、神様のところへ行く道からそれないように、この十戒をくださったのです。

※十戒は私たちを縛り付けるものではなく、私たちが神様への道からそれないようにするためのガイドラインです。

## 〈ちいさなお祈り〉

○神様に従うように造られた私たちが、神様のところへ行く道からそれないように、「十戒」というガイドラインを下された神様に、「ありがとう」とお祈りしましょう。

## 〈ねらい〉

神様から与えられた十戒は、わたしたちの生活を縛るための戒めではなく、私たちを愛し、わたしたちにまことの幸せを与えるための愛の記しであることを知り、神様に感謝することができるように指導する。

## 〈展開例〉

1. 皆の身の周りがある何か決まりや規則などを一緒に話し合しましょう。

例) 学校の規則、家庭の決まり、部活の決まり、交通法規など

2. このような規則や、決まりを守らなければどうなると思いますか。
3. 規則や決まりなどは、皆が正しく生きるために定めたものです。だから、ちゃんと守っていきたいと思います。
4. 十戒も同じように、わたしたちが幸せに暮すことができるために、神様が与えてくださった戒めです。

特にこれはすべての人々にではなく、神様の信じる人々に特別に与えてくださった愛の戒めです。

どんな戒めなのかももう一度書いて見ましょう。

第一戒 あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。

第二戒 あなたはいかなる像も造ってはならない。それに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。

第三戒 あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。

第四戒 安息日を心に留め、これを聖別せよ。

第五戒 あなたの父母を敬え。

第六戒 殺してはならない。

第七戒 姦淫してはならない。

第八戒 盗んではならない。

第九戒 隣人に関して偽証してはならない。

第十戒 隣人の家を欲してはならない。

5. この十の戒めが、どんな意味であるのか知らない人は、先生にその話を詳しく聞いてみましょう。そして、このような戒めを与えてくださった神様に感謝しましょう。

## 〈お祈り〉

神様。私たちが神様を正しく信じて、神様の御心に生きるために、私たちに十の戒めを与えてくださって感謝します。どうか、この戒めを感謝して守っていくことができるようにしてください。

## 〈今日のカテキズム〉

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問39、40が挙げられています。

問39 神さまの御心の、明らかにされた規準はどこにありますか。

答 十戒の中にあります。

問40 イエスさまが教えてくださった十戒の要約は何ですか。

答 「わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、貴方の神である主を愛しなさい」と、「隣人を自分のように愛しなさい」です。神と人への愛、二つで一つの愛に生きることです。

☆子どもカテキズムでは十戒の要約が取り上げられていますが、中学生なので、まず、十戒そのものを覚えているかを確認しましょう。簡易なものは子どもさんびかなどに載っていますが、序言（「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隸の家から導き出したものである」）を含めた全文を、ウェストミンスター小教理問答などを参照して、きちんと見てみましょう。長いですが、こちらを覚えておきたいものです。

☆そして、次のカテキズムによって、なぜ十戒が与えられているのかを理解しましょう。

## ハイデルベルク信仰問答

問115 この世においては、だれも十戒を守ることができないのに、なぜ神はそれほどまで厳しく、わたしたちにそれらを説教させようとなさるのですか。

答 第一に、わたしたちが、全生涯にわたって、わたしたちの罪深い性質を次第次第により深く知り、それだけより熱心に、キリストにある罪の赦しと義を求めようになる

ためです。

第二に、わたしたちが絶えず励み、神に聖霊の恵みを請うようになり、そうしてわたしたちがこの生涯の後に、完成という目標に達する時まで、次第次第に、いよいよ神のかたちへと新しくされてゆくためです。

☆ジュネーヴ教会信仰問答では、信徒とそうでない人と二種類の間が存在するため、律法にも二重の役目があり、信じない人には責めるものだが、信徒には別の用途がある、と教えます。次の問答はその信徒たちに対する律法の用途を教えています。

## ジュネーヴ教会信仰問答

問228 どんな用途ですか。

答 第一に、律法は信徒たちに、彼らは自己の業によっては義とせられることができないことを彼らに示すゆえに、彼らを謙遜にし、その救いをイエス・キリストの中に求める者となさせます。次に、律法は彼らに、行ないうる以上のことを要求することによって、主が彼らに力と能力をお与えになるよう、主に祈ることを彼らに教えます。しかし、決して傲慢になることのないために、自らが罪ある者であることを常に認識させるのであります。第三に、律法は信徒にとって、彼らを神に対する畏れにひきとめておくための手綱のようなものであります。

## 〈今週の聖書日課〉

日曜日 出エジプト20：1～17

月曜日 申命記5：6～22

火曜日 詩編32：5

水曜日 ローマ3：19～26

木曜日 ローマ5：20

金曜日 ローマ7：7

土曜日 ヨハネー3：1～3

テキスト 出エジプト記32章1～14節

モーセは神様の命令でシナイ山に上り、神様から十戒の板と様々な掟を授けられた。この間イスラエルの民は山のふもとに残されることになった。モーセの不在が四十日四十夜の長きに及んだことで（出エジプト24：18）、民は不安にかられ、ついには「我々に先立って進む神々を造ってください。……モーセがどうなってしまったのかわからないからです。」とアロンに要求するに至る（1）。この言葉から、イスラエルの人々は目に見えない神様でなく、目に見えるモーセを頼っていたこと、だからこそモーセが不在になると不安がつわり、代わりとして目に見える「神々」を求めたことがわかる。

アロンはモーセと共に主のために働いてきたが、大勢の人々からの要求という目に見える脅威に圧倒されて主の道からはずれてしまう。アロンは人々から集めた金の耳輪を材料に、若い雄牛の像を作り上げてしまった。若い雄牛の像は、古代近東の各国において神として崇められ、エジプトでも最高神アモン・ラーが雄牛の形で現された。イスラエルの人々がエジプト滞在中によく目にして身に染みついていたものが、ここで顔を出したと言えよう。

完成した金の雄牛の像に向かって人々は「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き出したあなたの神々だ」という、本来はただお一人の主なる神にのみ捧げるべき信仰告白の言葉を、「神」の代わりに「神々」と言って）捧げた。アロンは像の前に祭壇を築き、像が崇拜対象であることを明確にした。そして完成翌日には主の命令がないにもかかわらず「主（ヤハウェ）の祭り」と称する礼拝を布告し、実行した。6節のうち「焼き尽くす献げ物」・「和解の献げ物」は出エジプト20：24で主が示されたものだが、その後の「民は座って飲み食いし、立っては戯れた」行為は、昔も今も、世界各地の異教の祭りに見られるもので、人間の楽しみを一番の目的とした行為で

ある。

こうしてみると、偶像礼拝とは偶像をつくるに留まらず、礼拝の仕方に至るまで主なる神様の御心に背き（十戒の第一戒、第二戒違反）、人間の感覚の方を優先させる、つまり人間自身を神とするところに生じる礼拝様式であることがわかる。従って主なる神様は偶像礼拝に対して激しく怒られ、イスラエルの民を滅ぼし尽くすまでおっしゃることになった（7-10）。

この時モーセは主なる神の怒りをなだめようと必死に訴える。もしイスラエルを滅ぼせば、エジプト人に「あの神は、悪意をもって彼らを山で殺し、地上から滅ぼすために導き出した」と主なる神をそしる機会を与えてしまう（12）、またイスラエルの父祖であるアブラハム、イサク、ヤコブに神自ら誓われた、「わたしが与えると約束したこの土地をことごとくあなたの子孫に授け、永久にそれを継がせる」との約束（13）が果たされない、だから「どうか、燃える怒りをやめ、ご自分の民にくだす災いを思い直してください」とモーセは懇願したのであった。

主はモーセの訴えを聞き、イスラエルの民に災いをくだすことを思い直された（14）。もっともこの思い直しは、アロンが人々の要求に屈して信仰の筋を曲げてしまったのとは性質が違う。神ご自身が以前なされた約束に改めて堅く立たれたことが「思い直し」という形になったのである。また「思い直す」と訳された言葉は、「憐れむ」という言葉と親戚の言葉である。（新聖書注解参照）主なる神様はころころご意志を変えられる方ではなく、むしろ「憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべきは罰せずにはおか」ない（出エジプト34：6,7）ことで一貫しておられるお方である。このことを私たちは、神の言であられるイエス・キリストにおいて見いだす。（吉田 崇）

テキスト 出エジプト記32章1～14節  
参照カテキズム 子どもカテキズム問45,46

### (単元のねらい)

聖書の神はただお一人の神、唯一なるお方である。主なる神は、御自身が礼拝されることを喜ばれ、ご自身以外に対してささげられる礼拝をすべてしりぞけられる。また、礼拝とは生けるまことの神との霊的かつ人格的な交わりであり、神は言葉と霊によってささげられる礼拝を喜ばれる。それゆえに、いわゆる像を用いてささげられる礼拝は拒絶される。これは、十戒の第二戒の教えることである。聖書の民は、十戒に代表される律法、神の言葉を与えられ、言葉による礼拝へと招かれている。言葉と霊による神との生ける交わりにこそ、真実の礼拝がある。

## 「神に喜ばれる礼拝を目指して」

今朝の御言葉は、イスラエルの人たちが神さまの御前に大きな罪を犯した出来事です。イスラエルの人たちからすると、たいへん都合の悪いことであり、イスラエルの歴史から消し去りたい、聖書の中から削除してしまいたい出来事に違いないでしょう。ですけれども、聖書はそれを隠すことをしていません。それは、この出来事から学ぶべきことがあるからでしょう。イスラエルの人たちがどのような罪を犯したのか。そして、神さまは何を求めたのでしょうか。

エジプトから導き出されたイスラエルの人たちは、荒れ野の中にいました。そして、イスラエルの人たちの指導者、リーダーであったモーセが、このとき、彼らと一緒にいませんでした。留守にしていたのです。神さまが、モーセに、山の上に来なさいと命じて、モーセは山の上に登っていました。四十日間、山の上において、神さまの御言葉を聞いていたのです。

モーセがいない、その留守の間に、イスラエルの人たちは不安になりました。今までは、モーセが神さまのことを教えてくれました。神さまが何を求めておられるのか、どうすれば神さまが喜ばれるのか、モーセがみな教えてくれたのです。でも、モーセが山に登って、なかなか帰って来ない。それで不安になってしまいました。そうして、イスラエルの人たちは、神さまと一緒にいてくださ

るといふ、そのしるしが欲しくなったのです。それは、目に見えるしるし、目で見分けるしるしです。それを見て、神さまと一緒におられないという不安を少しでも取り除きたかったのです。

そのために、イスラエルの人たちは、金の子牛の像を造りました。みんながエジプトから持って来ていた金の飾り物を集めて、若い雄牛の像を造ったのです。どうして子牛なのか、ですって。それは分かりません。ひょっとすると、エジプトで牛が拝まれていたのかもしれない。長い間エジプトで生活していたので、エジプトで神さまとされていた動物の姿で、神さまを目に見えるかたちにあらわそうとしたのかもしれない。そして、これもエジプトの人たちがしていたことなのでしょう。その金の子牛を囲んでみんなで飲み食いし、おどったのです。それは、神さまを礼拝することから遠い、バカ騒ぎだったのです。神さまを畏れるという気持ちから遠い、自分たちが楽しむことにしかならないものでした。

いったい、生けるまことの神さまは、このとき、本当に、イスラエルの人たちから離れておられたのでしょうか。モーセがいないからといって、神さままで一緒におられなくなってしまったのでしょうか。いいえ。神さまはこのときもイスラエルの人たちと一緒におられました。イスラエルの人たちは、不安になってしまう必要などちっとも

なかったのです。そして、イスラエルの人たちは、神さまの教えを知っていました。それは、十戒の教えの一つ、「あなたはいかなる像も造ってはならない」(出エジプト20:4)という教えです。ついこの間、イスラエルの人たちは、この教えを聞いたばかりでした。ところが、もうそれを忘れてしまっていた。大切な教えを忘れて、自分たちの不安から、神さまが禁止しておられた、像を用いる礼拝をすることになってしまったのです。イスラエルの人たちは、このとき、まことの神さまが見えなくなってしまっていました。神さまを見失っていました。神さまは、イスラエルの人たちのその不信仰を嘆き、お怒りになったのです。

聖書の神さま、生けるまことの神さまは、いつもわたしたちと一緒にいてくださるお方です。私たちの目には見えないのですが、私たちと一緒にいてくださることを約束してくださいました。その神さまを信頼いたしましょう。そして、神さまは、像を造ることを禁止されました。それは、像を用いて礼拝すること、かたちあるものを用いて礼拝することの禁止です。絵を描いたり、彫刻をしたり、そういうことみんなが禁止されるのではありません。絵や像を使って礼拝することが禁止されたのです。それは、神さまは目に見えないお方で、かたちであらわすことができないからです。かたちであらわすと、それは、神さまをおとしめることになりかねないのです。

神さまは生きたお方で、動くことのない絵や像であらわすことのできるお方ではありません。また、神さまは、私たちとの交わり、人格的な交わり、霊的な交わりを求めるお方です。そのために、御言葉を与え、私たちの讚美と祈りを求められま

す。礼拝とは、言葉による交わりなのです。像を眺めていても、神さまの教えは私たちに響いてきません。神さまが何を求めておられるのか、それもはっきりとは分かりません。魂の救いということも実現しません。像によっては人格的な交わりは成り立たないのです。生ける神さまは、言葉によって、神さまがどんなお方なのか、何を喜ばれるのかを明らかにしてくださいました。言葉によって語りかけ、生きて働かれるお方です。ですから、その御言葉に耳を傾けて、私たちも言葉で応答して、礼拝をいたします。言葉によって、何がよいことで、何が悪いことなのか、示されますし、言葉によって、私たちの罪が指摘されて、打ち砕かれることも起こります。だからこそ、魂の救いが与えられるのです。

神さまの御言葉は、私たちの内に働き、真理を教えます。私たちの内で芽生えて、私たちの血となり肉となります。私たちの心を造りかえて、新しくするのです。御言葉には、そのような命、人を新しく生かす命があります。この御言葉の命に養われて、私たちは、暗闇の中でも光の道を歩むことができます。

神さまは、そのためにこそ、イスラエルの人たちに、命の御言葉である十戒を与えられました。私たちにも、その十戒が与えられています。さらには、主イエス・キリストの御言葉も与えられています。礼拝とは、この命の御言葉に養われる恵みのときにはほかなりません。この大切な礼拝を、言葉と霊以外のものに売り渡してしまってはならないのです。言葉と霊による礼拝を守り抜いて、その幸いとどまるよう、私たちは、神さまによって招かれているのです。(望月 信)

---

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記20章4節前半

あなたはいかなる像も造ってはならない。

---

**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 8/27にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようにお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 9/3の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……、教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

**〈分級では〉**

新学期が始まりました。夏休みを過ぎると、春の最初の分級のころに比べて、個々の（身体的にも、精神的にも）成長具合に随分差がでてきているのではないのでしょうか。子供たちの微妙な変化に気をつけて、それぞれの子供たちに対応していきましょう。年長さんと年少さんが一緒になっているクラスは、年長さんがぐーんと大人になりますので、この時期から分級の運用をどこに合わせるのか結構大変になるケースがあるようです。場合によっては、クラスを分けることも考えたほうがいいのかもかもしれません。

（でも先生が不足して大変なんですよ……）

**〈分級のねらい〉**

十戒というすばらしい神様の恵みをモーゼさん

がいただいている最中に、イスラエルの人たちは、決してしてはいけないことをしてしまいました。子供たちになぜしてはいけないのか、その結果、神様はどうされようとしたのかを伝えることができればと思っています。

私たちは、今回のイスラエルの人たちの愚かな行為を他人の話として片付けられる存在ではありません。むしろ、私がイスラエルの民であり、指導者なのです。神様に愚痴をこぼし、神様に従うどころか、神様をそむく行為をしてしまう。先生のみなさんはどうですか。まさに自分の問題なのだ……ということ切り口に子供たちに話をすると、一段と具体的なイメージを持ってもらえるのではないかと思います。

では、そんな存在の私が、神様に滅ぼされても仕方の無い私が、なぜ今神様に守られ、愛されているのでしょうか。イエス様の十字架も語れるといいのですが、欲張りでしょうか。

**〈祈り〉**

イスラエルの人たちは、モーゼさんがいない間、心配になって、金の子牛をつくって拝んだ話を聞きました。私たちも、神様のことをすっかり忘れてしまうことがあります。いつも、神様のことを忘れることなく、神様にお祈りする人とならせてください。

**〈共通工作〉**

**目的：**みんなで紙芝居を作ろう！

族長時代から出エジプトまでの一連のストーリーを創世記から申命記までのお話の流れと神様の約束の実現をこどもたちと一緒に理解していくこと

**準備するもの：**紙、色鉛筆、くれよん（絵が描ける道具ならなんでもよい）

**作業手順：**その日のお話の終了後に一番印象に残ったところをそれぞれ絵に描いてもらう。描いた絵はとっておきます。最後の“モーゼの死”の単元が終わった時点で、描かれた絵とぬりえ例の絵をすべて集めて、並べると紙芝居ができあがります。最後にみんなで作った紙芝居を使って、お話をしてもよいでしょう。

## 〈子どもたちに伝えたいこと〉

イスラエルの人たちは、リーダー・モーセがしばらくいなくなると、不安になって目に見える像を作ってしまった。それは、目には見えなくてもいつも共にいてくださる神様に信頼を置く事ができなかった、ということ。

## 〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○イスラエルの人たちは、モーセが山の上で神様から十戒をいただいている間に、自分たちで金の子牛の像を作って、勝手に拝み始めました。モーセのいただいた十戒には「どんな像も作ってはならない」と教えられているのに、イスラエルの人たちは、どうして子牛の像を作ってしまったのでしょうか。

※イスラエルの人たちは、リーダーとして今までイスラエルの人たちを導いてきたモーセの姿が見えなくなって、心細くなってきたのです。みなさんも、どこか初めての所に家族で行ったときに、お父さんやお母さんの姿が見えなくなったら、とっても心細いでしょう。イスラエルの人たちはそんな気持ちだったのです。

頼りになる人が見えなくなることは大きな不安です。しかも、イスラエルの民にとっては初めての土地ですから、不安はなおさらだったでしょう。

○神様は、そんなイスラエルの人たちをどうしようとなさいましたか。

※神様は、ご自分を信頼しようとしないうイスラエルの人たちを、一度は滅ぼしてしまおうと思

いになりました(32:10)。

イスラエルの民は、エジプトでの過越しや葦の海での奇跡を通して、目には見えなくても確かに一緒にいてくださる神様に守られていることを、何度も実感しているはずでした。それなのに、イスラエルの民は、神様を全面的に信頼することができず、不安におそわれてしまったのです。

○イスラエルの人たちは、そのとおり、神様に滅ぼされてしまったのでしょうか。

※神様は、モーセの訴えを聞き入れられて、イスラエルの人たちと結んだ約束を思い返して、人々を滅ぼすことを思い直されました(32:11~14)。それは、モーセのとりなしの祈りが聞かれたということですが、神様は、アブラハムと結ばれた契約(創世記15章)、またモーセに告げられた約束(出エジプト3:7~8)に従って不従順なイスラエルの民をゆるされたのです。

神様は、罪をはげしく憎む方ですが、ご自分の民として選んだ人々には、約束を必ず果たされます。神様のゆるしが、選ばれた者(イスラエルの民・教会に導かれている私たち)に対する確かな約束の結果であること、神様はそのように約束に対して真実な方なので、どこまでも信頼できることを語りましょう。

## 〈ちいさなお祈り〉

○私たちが、神様の言う事を聞かなくても、神様はお怒りになっても、私たちを守ってくださることに「ありがとう」とお祈りしましょう。



## 〈ねらい〉

わたしたちが信じている神様は唯一の神様であり、人間が造った像を神として拝むことは、何の力もないものを拝む無駄なことであり、さらに、それは神様に喜ばれることではないことを認識させる。

## 〈展開例〉

1. 先週教えられた十戒のことを覚えていますか。  
第二戒はどんなことであったのか、聖書を開いてみましょう。(出20:3~5)
2. イスラエルの人々は、この第二の戒めを守ることができませんでした。とても神様が怒っておられましたね。それは神様が一番嫌いになることの一つであります。
3. 私たちの周りにも何かの像に拝むことがあります。どんなことがあるのか話し合みましょう。
4. 私たちの身近なところにもたくさんの人々が、

人間が造った像を拜んでいます。また、わたしたちの家族や親戚もそのように、人が造った像にお祈りする人がいます。わたしたちはどうすればよいのでしょうか。まず、わたしたちは、そのような人間が造った像には祈らないようにしましょう。そして、像にお祈りをする家族や親戚などがあるならば、その人のために神様に祈りましょう。本当の神様を信じていることができるように。

## 〈お祈り〉

愛する神様。わたしたちの周りには多くの人々が、人が造った像にお祈りしたり、お守りをお願いしたりする人がたくさんいます。しかし、それは何の力もないものをお願いする行為であることを皆が知り、まことの神様にのみ礼拝することができるように、その人々の心を導いてください。



直ちに下山せよ

## 〈今日のカテキズム〉

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問45・46が挙げられています。

問45 第二戒は何ですか。

答 「あなたはいかなる像も造ってはならない」です。

問46 第二戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 私たちは、真の神さまを忘れるときに、必ず、自分のために神々を造り出します。私たちは、お守りや占いに頼ったり、自分を喜ばせるために礼拝してはいけない、ということです。

☆今日の箇所では偶像礼拝が問題になっています。

神さまは、十戒第二戒において、最も長い文言をもってこれを禁じておられます。次のカテキズムで確認しましょう。

## ウェストミンスター小教理問答

問50 第二戒では、何が求められていますか。

答 第二戒が求めている事は、神が御言葉のうちに指定されたとおりの宗教的礼拝と規定のすべてを、受け入れ、実行し、純正完全に保つことです。

問51 第二戒では、何が禁じられていますか。

答 第二戒が禁じている事は、象による神礼拝、または神の御言葉に指定されていないあらゆる他の方法による神礼拝です。

問52 第二戒に加えられている理由は何ですか。

答 第二戒に加えられている理由は、神が私たちに君臨する主権者であられること、神が私たちの所有者であられること、神が御自身への礼拝に熱心をもっておられることです。

☆次のハイデルベルクの問答は、ずばり、偶像礼

拝とは何かを問うています。

## ハイデルベルク信仰問答

問95 偶像礼拝とは何ですか。

答 御言葉において御自身を啓示された、唯一のまことの神に代えて、またはこの方と並べて、人が自分の信頼を置く何か他のものを考え出したり、所有したりすることです。

☆ジュネーヴ教会信仰問答では、第二戒の目的を問うています。

## ジュネーヴ教会信仰問答

問149 この戒めの目指すところを要約すれば何ですか。

答 神は、彼が人の礼拝しなければならない唯一のお方であって、他にはないことを第一の戒めで宣言なさったように、今度は、神はわれわれを、あらゆる迷信と肉の儀式とから救い出すために、どれが正しい礼拝形式であるかをわれわれにお示しになります。

☆ハイデルベルク信仰問答やジュネーヴ教会信仰問答では、カトリックや正教の聖像・聖画・聖遺物を意識していると思われる問答があります。ハ問80、98、ジュ問147、148など。

## 〈今週の聖書日課〉

日曜日 申命記4：15～19

月曜日 申命記12：29～32

火曜日 詩編95：3～6

水曜日 出エジプト34：11～17

木曜日 ローマ6：12～14

金曜日 使徒17：24・25

土曜日 出エジプト32：7～10

テキスト 出エジプト記40章17～38節

**(1) 幕屋が主の臨在の場となる**

主なる神様は出エジプト以来イスラエルと共におられた。しかし主は目に見えない霊でいらっしゃるため、そのままでは人間には分からない。そこで主はご自身の臨在を雲によって示された。イスラエルの旅の先頭にたった雲の柱（出エジプト13:21）、シナイ山のふもとにイスラエルが到着した時、山を覆った厚い雲（出エジプト19:16）がその実例である。モーセは主の臨在の雲が包むシナイ山の頂に登り、主から十戒など種々の掟や命令を受けた。

出エジプト記40章はシナイで受けた命令の一つ、幕屋の建設について記している。1～15節は主がモーセに仰せになった命令を記し、16～33節は2～8節の命令の実行を記録する。（なお9～15節の命令の実行はレビ記8章で記される。）その際命令を少しも違えず実行した事を示すため、17～33節は2～8節をなぞるように記され、建設過程が一つ終わる度「主がモーセに命じられたとおりであった」という言葉で締めくくる。なお建設過程一つ一つは、2～8節の各一節に対応する。第一過程は2節「第一の月の一日に幕屋、つまり臨在の幕屋を建てなさい。」で、その実行が17～19節「第二年の第一の月、その月の一日に、幕屋が建てられた。……主がモーセに命じられたとおりであった。」第二過程は3節の掟の箱を幕屋の奥に入れ、幕で区切って至聖所とすることで、実行は20～21節。4節のみ二過程となり、第三過程が22～23節のパン机の設置、第四過程が24～25節の燭台設置である。第五過程が香壇の設置（26～27）、第六過程が祭壇の設置（28～29）、第七過程が洗盤の設置（30～31）である。最後に幕屋の周囲に庭を設け、全過程が終了した（32～33）。

神様はイスラエルのそばに住むことを願われたが、聖なる神は人の罪を目の当たりにされると怒りを燃やされる。そこで外界と幕で隔てた場所を設け、いけにえを献げるなどして身を清めた祭司のみが近づくことが許された。

34～38節には幕屋完成後の事が記される。主の臨在を示す雲が幕屋を覆い、主の栄光が幕屋に満ちた（34）。雲が幕屋を離れない時には、イスラエルは留まった（37）。またイスラエルが旅立つ時には、雲は幕屋を離れて昇るが（36）、なお幕屋の上にあった（38）。この一連の出来事を通し、幕屋完成以後、主は幕屋（中でも至聖所）を住まいとされることが示され、主が神の民のもとに臨在されることの証となった。

**(2) その後、現在までの神の臨在**

幕屋が神の臨在の場であったのはダビデの時代までであった。ソロモン王の時に神殿が作られ、契約の箱（掟の箱）が運び入れられると、神殿が幕屋に取って代わる。

神の臨在のあり方は、神の御子イエス・キリストによって劇的に変化した。キリストは人となってこの地上に生まれられた。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはこの方の栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理に満ちていた。」（ヨハネ1:14）キリストは、高い山で白く輝く栄光の姿となり、主の臨在の雲に包まれた。雲からは「これはわたしの愛する子、これに聞け」という父なる神の声が響いた（マルコ9:2～7）。キリストは十字架にかけられ、神様が人と共に住む上で妨げだった人の罪を取り除かれた。そしてキリストが昇天された後、聖霊なる神様が降臨し、この世界に住んでくださった。そのため、神殿は不要となった。キリストが十字架の上で息を引き取られた時に神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けたことがそれを示す（マタイ27:51）。

またキリストは「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」（マタイ18:20）と約束された。この約束に基づき、現在ではキリストを救い主と信じる二人、三人、またはそれ以上の人々が集う礼拝の場に主は臨在される。（吉田 崇）

テキスト 出エジプト記40章17～38節  
参照カテキズム 子どもカテキズム問65,66,68

### 〔単元のねらい〕

出エジプト記は、幕屋建設の次第を詳細に書き留めている。25章から31章までが幕屋建設を命じる神の御言葉であり、35章から40章にかけては、モーセが神の命令を民に告げ知らせ、幕屋建設が実行されるというかたちで書き記される。神の命令をなぞるかたちで忠実に実行されたことが明らかにされる。どうしてここまで詳細に書き留められなければならなかったのか、とも思う。実のところ、幕屋の建設とは、イスラエルの民が礼拝共同体として建て上げられることにほかならない。金の子牛の像の事件により、神に背いた民であったが、罪赦されて、幕屋を建設することによって神を礼拝する共同体として整えられ、建て上げられるのである。その中心には、神礼拝が据えられなければならない。私たちも、礼拝を中心にして、礼拝共同体を造り上げる神の民とされている。私たちの献げ物、奉仕が用いられて、神の栄光に満たされる礼拝をささげる幸いに、また神の栄光をあらわす共同体とされる幸いに、共にあずかるのである。

## 「神の栄光に満たされる礼拝」

イスラエルの人たちは、金の子牛を礼拝して、神さまの大きな怒りを受けることになりました。ですけれども、モーセが神さまにお祈りしましたし、神さまもイスラエルの人たちを愛しておられたので、神さまは、イスラエルの人たちを憐れんで、赦してくださいました。イスラエルの人たちに、もう一度チャンスをくださったのです。神さまは、神さまを礼拝することで失敗したイスラエルの人たちに、神さまを礼拝するために奉仕して、悔い改めと感謝をあらわす道を与えたのです。

イスラエルの人たちは、神さまに命じられて、幕屋を建設することになりました。幕屋っていうのは、テントのことです。神さまを礼拝するためのテントです。今みんなは、教会に来て、教会の建物の中で礼拝しています。イスラエルの人たちも、同じようにして、神さまを礼拝したのですけれども、イスラエルの人たちは、荒れ野を旅してましたから、今の私たちのような建物を建てることはありませんでした。自分たちの住まいもテントであり、だから、礼拝する場所もテントだったのです。神さまは、生けるまことの神さまを礼拝するにふさわしいテントを建てるようにと、イ

スラエルの人たちにお命じになりました。

どんな礼拝する場所、テントであったのか。今日は、図があったほうがよいかもしれませんね。ぜひ、分級のときに、幕屋の図を見てもらいたいと思います。

神さまがイスラエルの人たちにお命じになった幕屋、テントは、細長いテントなのですが、今日は、テントそのものよりも、その敷地のことを少しお話ししましょう。テントのある敷地は、正方形を二つ並べてできた長方形のかたちをしています。正方形が二つ並んでいるのです。そして、その片方の正方形に、テント、幕屋が建てられます。その幕屋、テントの一番奥、大切な場所に、契約の箱が置かれ、その中に、十戒が刻み込まれた石の板がおさめられました。その契約の箱の場所は、実は、テントのある正方形の中央になるようにできているのです。それは、ですから、神さまがこうおっしゃっているということです。イスラエルの皆さん、神さまを礼拝するというのは、神さまの御言葉を中心にして生きるということですよ。神さまの御言葉を大切にすることですよ。神さまは、テントのかたちを通して、イスラエル

の人たちにそうおっしゃったのです。

それが、二つ並んだ正方形の片方のことです。それでは、もう一つの正方形の中央には何があるのでしょうか。

もう一つの正方形は、幕屋の前庭、テントの前に広がる大きな庭なのですが、その中央には祭壇が置かれました。いけにえをささげる祭壇、いろいろな献げ物を焼いてささげる祭壇なのです。この祭壇で献げ物をささげるとは、自分たちに罪があることを認めることです。神さまは、私たちの罪をとがめて、罪を償うための献げ物、動物のいけにえをお求めになりました。イスラエルの人たちは、神さまの憐れみによって罪を赦されたのですが、その感謝のしるしとして、献げ物をささげるよう命じられたのです。もう一つの正方形の中央にこのような祭壇が置かれたのは、自分の罪を認め、罪赦された幸いを知ることが礼拝なのであるということにほかなりません。神さまを礼拝するとは、罪赦された恵みを味わい、神さまに感謝することなのです。

イスラエルの人たちは、こうして、神の御言葉を中心とする、そして、罪赦された恵みを味わい知る、そのようなテント、幕屋を建設することへと導かれました。神さまに対する罪を犯して、神の怒りを身に受ける者であった彼らが、こうして、今や罪の赦しに生かされて、神礼拝のために奉仕できることは、どれほど大きな喜びだったでしょうか。彼らは、ですから、自分たちの持ち物も時間もすべてささげて、この幕屋の建設のために働きました。たくさんの方をささげたのです。

そして、そのことによって、ただ幕屋を建設するだけではない、イスラエルの民そのものが、神を礼拝する礼拝共同体であることへと導かれまし

た。礼拝する民として整えられたのです。神の御言葉に耳を傾け、罪の赦しに生きる共同体として建て上げられたのです。今日の御言葉で大切なことの一つは、「主がモーセに命じられた通りであった」という言葉が繰り返されることです。イスラエルの人たちは、御言葉に背いたところから、神さまによって造りかえられて、神さまの御言葉に忠実に歩むことへと変えられていたのです。

神さまは、神さまに背いて罪を犯す私たちを、決して放り出したりされません。むしろ、私たちを造りかえて、ご自身を礼拝する者として新しくしてくださるのです。そのために、御言葉を与えて励まし、また、さまざまな奉仕に召し、私たちを用い、訓練し、整えてくださいます。私たちは、自分をささげて奉仕することによって、神さまに用いられ、喜ばれる者として成長することができます。それは、テントが多くの部品からできており、それが一つにされて幕屋が完成するように、神さまは、私たちみなを組み合わせて、私たちを一つにまとめて、神さまの民、礼拝する共同体を造り上げてくださるのです。

そして、そのような礼拝する私たちを祝福して、私たちの礼拝をご自身の栄光で満たしてください。イスラエルの人たちは、幕屋に栄光が満ちた、その有り様を目にいたしました。それは、神さまの栄光、光輝きを見て、神さまを信じる信仰を強くされる出来事でした。私たちの礼拝にも、そのような神の栄光があらわされ、神さまの御業を見るようにされます。神さまは、私たちが心を込めてささげる礼拝を祝福し、私たちと共にいてくださると、確かに約束してくださっているのです。 (望月 信)

---

【今週の暗唱聖句】 出エジプト記40章34節

雲は臨在の幕屋を覆い、主の栄光が幕屋に満ちた。

---

**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 9/3にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようにお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 9/10の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……、教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

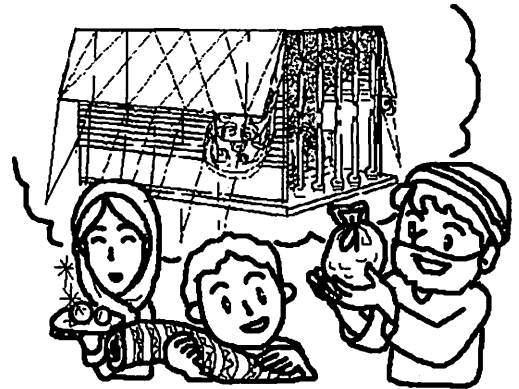
**〈分級では〉**

夏休みを境に教会学校に来なくなるお子さんがいます。中学生などに特にその傾向があるように思います。幼稚科の場合は、習いごとがあたらたに入って、時間が合わなくなるといったケースもあるようです。いずれにしても、欠席する子供をそのままには決してしないでください。手紙等でご両親、お子さんに教会の様子をお知らせするなど、教会学校が休んでいる子を待っていることを伝えましょう。また、その子のために祈ることを忘れないでください。(ただし、しつこく連絡するのは注意要です。牧師とも相談しましょう)

**〈分級のねらい〉**

幕屋は何をする所か、幕屋を作ることで、イスラエルの人々の何が変わるのかを子供たちにイメージしていただければと願っています。

神様は、先週の金の子牛の出来事で、イスラエルの民を見放すこともできました。滅ぼすこともできました。しかし、神様はそうなさいませんでした。むしろ、驚くことに、イスラエルの人々を、神様を礼拝する者として、幕屋建設に導いてくださいました。ともに集まり神様を礼拝することで、いかに多くの恵みをいただいたことでしょうか。また、その準備の過程の中で、多くの訓練を受けたはずで、私たちも、神様を知るだけでなく、教会に集まり、神様とともに礼拝することでより多くの恵みをいただいています。

**〈祈り〉**

神様、今日は幕屋のお話を聞きました。神様は、イスラエルの人たちを大切に守り、神様を礼拝する場所を作ってくださいました。私たちも教会に集まって神様を礼拝します。みなさんとともに礼拝できますことを感謝します。

**〈共通工作〉**

**目的：**みんなで紙芝居を作ろう！

族長時代から出エジプトまでの一連のストーリーを創世記から申命記までのお話の流れと神様の約束の実現をこどもたちと一緒に理解していくこと

**準備するもの：**紙、色鉛筆、くれよん (絵が描ける道具ならなんでもよい)

**作業手順：**その日のお話の終了後に一番印象に残ったところをそれぞれ絵に描いてもらう。描いた絵はとっておきます。最後の“モーセの死”の単元が終わった時点で、描かれた絵とぬりえ例の絵をすべて集めて、並べると紙芝居ができあがります。最後にみんなで作った紙芝居を使って、お話をしてもよいでしょう。

## 〈子どもたちに伝えたいこと〉

イスラエルの人たちは、神様の命令どおりに神様を礼拝する幕屋（テント）をつくったが、その奥に置かれたのは、十戒（神様の言葉）を刻んだ板だった。このテントは、私たちが今も集まる教会の会堂のはじまりだけれど、今の私たちにとっても、教会の礼拝の真ん中にあるのは「神様の言葉」であること。

## 〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○金の子牛の像を作って神様におこられたイスラエルの人たちに、神様はご自分を礼拝するためのテントを作るように命令されました。イスラエルの人たちはその命令を守ったでしょうか？

※イスラエルの人たちは、テントを神様の言うどおりに作りました。出エジプト40:17～32の間に「主がモーセに命じられたとおりであった」という言葉が7回もくりかえされています。

イスラエルの人々は、金の子牛を作って本当の神様のことを忘れたような礼拝をしたのですが、神様はそんなイスラエルの人々を見捨てず、本当の礼拝の仕方を教えようとされ、神様に導かれたイスラエルの人たちはその導きにこたえました。

○その神様を礼拝するためのテントの奥に置かれ

たのは何だったのでしょうか？

※テントの奥、その中心部には「掟の板」を入れた箱が置かれました。「掟の板」とは、モーセが神様からいただいた十戒、神様の言葉が刻まれた石の板です。

神様が、神様を礼拝する場所の真ん中に置くように命じられたのは、神様の言葉を刻んだ板でした。神様は礼拝の中心に「御言葉」を置くように命じられたのです。

○私たちの教会は、私たちが神様を礼拝するために集まる場所、イスラエルの人たちが作ったテントと同じです。この教会の真ん中、会堂の前の壇の上には神様の御言葉「聖書」が、今も置かれています。その教会は、イスラエルの人たちのテントと同じように、神様のすばらしさに満ちているのです（40:34）。

※私たちの教会にも、御言葉が中心にあり、神様のすばらしさ（栄光）が満ちあふれています。そのすばらしい場所に、私たちは毎週、神様からおいでと招かれています。

## 〈ちいさなお祈り〉

○今も神様のすばらしさがあふれているこの教会に、今日も神様が連れてきてくださったことを「ありがとう」とお祈りしましょう。

## 〈ねらい〉

罪人にとって、神様に礼拝をささげることがいかなる喜びであるのか、子供たちがそれをしっかりと覚えて、礼拝を大切にしていけるように指導する。

## 〈展開例〉

1. もう一度今日の話を整理してみましょう。

イスラエルの人々はどんな罪を犯していたのでしょうか。（偶像崇拜）

そのような人々に、幕屋建設を命じられた神様の命令は何を意味しているのでしょうか。（赦し）

2. 幕屋は神様を礼拝する場所ですから、今のわたしたちの教会堂と同じであります。教会は神様を礼拝する場所であり、礼拝とは生きておられる神様と出会う場です。神様は私たちが神様と出会う場として、教会を与えてくださったのであります。

3. 神様はどこにもおられる方だから、それぞれ家で礼拝することもできるのですが、なぜ教会を

立ててくださったのでしょうか。それは、神様を信じる人々は信仰共同体だからです。ただ、個人で神様を信じて礼拝するばかりではなく、集団になって同じ信仰を持つ人が神様を礼拝し、互いに神様を偉大さを分かち合うことによって、神様を信じる人々が同じ信仰を持っている兄弟姉妹であることを確認することができます。

4. では、礼拝はなぜ喜ばしいことでしょうか。それは、わたしたちは罪人であり、罪を持つ者は神様と出会うことのできないが、イエス・キリストの故にその罪が赦され、神様と和解し、神様と交わることができるからであります。

5. 罪人であるわたしたちの礼拝を快く受け入れてくださる神様に感謝し、喜びをもって礼拝をささげるようにしましょう。

## 〈お祈り〉

神様。罪人である私たちが礼拝に与ってくださり感謝いたします。わたしたちがいつも、喜びと感謝の心をもって神様を礼拝することができるように、わたしたちの心を導いてください。



主がモーセに命じられたとおりであった



## 〈今日のカテキズム〉

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問65、66、68が挙げられています。スペースの関係上、問65のみを記します。

問65 神さまの戒めを守ることができない罪人が、どうして十戒を喜んで生きることができるのですか。

答 聖霊なる神さまが、私たちを造り変えて主イエス・キリストと一つに結び合わせ、キリストの体なる教会として建て上げてくださいます。

私たちには、教会において、罪から救い出され、十戒を喜んで生きる道が与えられています。

☆長年礼拝生活を送っていると、誰もが自分たちのしているように礼拝できるもの、と錯覚するようになってしまいます。教会に新しい子どもたちが来た時、礼拝の流れに沿わせることのなんと大変なこと！でも実は、今日の箇所がこれほどまでに詳しく幕屋づくりと礼拝の仕方が指示されていることや、新約聖書でイエスさまが丁寧に、祈る時にはこう言いなさい、聖餐式はこのように行ないなさい、と教えてくださっていることを思い起こすと、私たち人間は、神さまを礼拝するためには、細部にわたって丁寧に、時に厳しく「教えられる必要がある」ということです。罪人である私たちが神さまを礼拝する民となるために、神さまが私たちに求めておられることを、子どもたちと一緒に確認しましょう。

## ウェストミンスター小教理問答

問85 罪のため私たちに当然な神の怒りとのろいどを免れるために、神は、私たちに何を求めておられますか。

答 罪のため、私たちに当然な神の怒りとのろいどを免れるために、神が私たちに求めて

おられる事は、キリストがあがないの祝福を私たちに伝えるのに用いられるすべての外的手段を、忠実に用いて、イエス・キリストを信じ、命に至る悔い改めをすることです。

問86 イエス・キリストへの信仰とは、何ですか。  
答 イエス・キリストへの信仰は、救いの恵み

です。それによって私たちは、救いのために福音において提供されているままにキリストのみを受け入れ、彼にのみより頼むのです。

問87 命に至る悔い改めとは、何ですか。

答 命に至る悔い改めも、救いの恵みです。それによって罪人は、自分の罪をほんとうに自覚しキリストにある神のあわれみを理解して、自分の罪を歎き憎みつつ、罪から神へと立ち帰り、新しい服従をはっきりと目指し努力するようになるのです。

問88 キリストがあがないの祝福を私たちに伝えるのに用いられる外的な手段とは、何ですか。

答 キリストがあがないの祝福を私たちに伝えるのに用いられる外的な普通的手段とは、キリストの規定、特に御言葉、礼典、祈禱です。このすべてが、選民にとって救いのために有効とされます。

※これらがどう救いに有効となるのか。問89以下も参照してください。

## 〈今週の聖書日課〉

日曜日 箴言2:1~5

月曜日 箴言8:33~36

火曜日 イザヤ55:3

水曜日 使徒20:19~21

木曜日 ヨエル2:12~14

金曜日 エゼキエル36:25~32

土曜日 ローマ10:13~17

テキスト 民数記14章1～10節

民数記には、その表題のようにイスラエルの民を数えた表が二度出てくる。一度目は1章のところであり、二度目は26章においてである。全体の人数や各部族の数に多少の変動はあるが、大きな違いは、一回目はシナイを出発する時であり二回目はカナンを目前にしたモアブの野に於ける人口調査であって、全く世代が交代している事である。その理由・原因は、カデシからのカナン偵察の悪報とその結果としての38年に及ぶ荒野の放浪による。つまり民数記においてこのカナン偵察の失敗とその裁きは、約束の地カナンへの入植を果たす神の約束の実現におけるイスラエルの民の大いなる躓きと試練の始まりと言える。

#### 〈信仰の分岐点であるカデシ・バルネア〉

族長アブラハムへの神の約束は、モーセを用いてイスラエルの民を奴隷の地エジプトから脱出される「出エジプト」のみ業をもって具体性を現す。エジプトを意気揚々と出発した彼らは、紅海の奇跡やシナイ山での律法授与により、神の民として整えられていく。そしてカナンの南部、カデシ・バルネアに達した時、神は約束の地カナンを偵察すべく斥候を送ることを命じられる。けれどもカレブとヨシュアを除く他の斥候たちのもたらした報告は、確かに良い地ではあるが町の城壁は堅固で住民は大きく力強いとの不信仰なものであった(13:27～33)。このカデシ・バルネアは、かつてイスラエルの族長たちが住み、祭壇を建てて主を礼拝した地でもある。この町は、カナンとエジプトを結ぶ交通の要所であり、分岐点でもあった。ここからカナンへと前進することは、この時のイスラエルにとっては信仰の服従であり、再びエジプトへと引き返すことは約束への背反であった、と言える。まさに信仰の分岐点に彼らは、神によって立たせられたのである。

#### 〈エジプトをなつかしむ古き人〉

斥候の報告を聞いたイスラエルの民の応答は、悲しくもエジプトへの帰還であり、民の指導者モーセやアロンへの不平、つぶやき、即ち神の導きへの拒否であった(14:1～4)。神の約束を強く信じて前に進むよりも、古き罪の生活をいつまでも懐かしみ、離れない不信仰が、彼らの心を強く支配していたのである。そのため主なる神は、彼らに38年間の荒野の放浪を命じられ、又不信仰な報告をもたらした斥候を裁き、更にその責任をとらされてモーセとアロンのカナン入植拒否という厳しい神の裁きがかかることとなる。この38年の荒野の旅は、イスラエルの民にとっては、試みの時であり、その試みに破れる不信仰とつまずきの連続であったのである。その最も決定的な最大の裁きが、このカデシ・バルネアからの偵察の出来事であった。神の約束を強く信じ、神に従って前進する者にのみ、神の約束の実現という大いなる祝福がもたらされるのである。

#### 〈始めの愛としての荒野の旅〉

確かにイスラエルの民にとって38年間の荒野の放浪・彷徨は、神による裁きであり、不信仰への大いなる警告であった(ヘブライ3:7～12、Iコリント10:5～11)。けれども預言者ホセアは、この荒野の旅を「始めの愛」と呼んで、イスラエルの民の神への従順と愛とみなしている(ホセア11:1～4)。神はイスラエルの民を大いに憤られたが、しかしモーセの執り成しにより、彼らを全く根絶することはなさらず、エジプトを出た最初の世代は荒野で死んだが、なお次の新しい世代を残されたのである。また先の指導者モーセに代わってヨシュアを選ばれ、アロンに代わって大祭司としてエルアザルが立てられることとなった。神の裁きは、ただ裁きだけでなく、新たな導きと祝福とを含むものである。この豊かな主の救いの愛に立たせて頂き、主の約束の真実を信じて、主と共に歩んでいきたい願う。(山下朋彦)

テキスト 民数記14章1～10節  
参照カテキズム 子どもカテキズム問37,38

### 〔単元のねらい〕

主の命令によってモーセが偵察隊として遣わしたイスラエルの代表者たちの中で、カレブとヨシュア以外は、神が与えようとしておられるカナンの土地に対して、否定的な評価を下した。この結果、神の怒りと裁きを受ける。実に、救いの歴史の進展のためには、選びの民の信仰の応答が求められている。神がどれほど神の民、信仰の民を熱心に、切実に求めておられるかをここから学びたい。さらにまた、同じ出来事を体験し、遭遇しても、信仰の目が閉じていれば、神の御心を見損なってしまふ。常に、主なる神を仰ぎ見ながら、現実を見、信仰的な判断を下すことの祝福と大切さを教えたい。しかし、キリストによって新しく生まれられない限り、見るべきものを見ることはできない。聖霊のお働きを祈り求めたい。そして、子どもが提供する信仰の知識が子ども達の実生活のなかで生かされるように、信仰的判断力を訓練してあげたい。

## 「神さまを信じたら、違って見えてくる！」

モーセさんによって、エジプトを脱出させていただいたイスラエルの人々は、一年余りは、その場に留まっていた。しかし、「第二年の第二の月の二十日」、神さまの雲が幕屋を離れて行きました。遂に、イスラエルの人々は、主なる神さまの命令によって、隊列を組んで出発したのです。

200万人近い人々が、荒れ野を出発します。すばらしい光景です。ところが、彼らは、荒れ野において、神様に不満ばかり言っていました。「誰かお肉を食べさせてくれないか。エジプトでは魚をただで食べていたし、きゅうりやメロン、ねぎやたまねぎやんにくがおいしかったなあ。あの味が忘れられない。今では、天から降って与えられるマナばかりで、もううんざりだ。ああ、エジプトの奴隷であったほうがよっぽどましだった。ああ、戻りたい。」神さまは、このような不平、不満をずーっと聞いておられました。しかし、これは、決して小さな罪ではありません。神さまの恵み、祝福を軽んじることは、大きな罪なのです。しかし、そのような罪をイスラエルの人々は何度も何度も犯したのです。

さて、その後、神さまは、モーセに言われました。「わたしがあなたがたに与えようとしている約束の土地、カナンに、人をやって偵察させなさい。」そこで、モーセは、イスラエルの部族の代表者を、偵察隊にして、送り出しました。「皆さん、神さまが与えようとしておられるカナンの土地がどんなところが調べて来なさい。どんな人が住んでいるのか、力の強い人たちか、大勢いるのか、どんな町なのか、収穫が豊かな良い土地か、そうでないか、きちんと調べて報告してください。そして、証拠に、果物をとって来て下さい。」

40日が経ちました。偵察隊は、戻ってきました。イスラエルの人々は、待ちに待った報告を聞くために、一同、集まっていました。さあ、カナンの地は、どんな土地、どんな人が住んで、どんな町なのでしょう。

彼らは言いました。「モーセさん、この果物をご覧ください。命じられた土地で育ったものです。」それはそれは大きなぶどうを見せてくれました。そして言いました。「あの土地は、乳と蜜が流れているような、夢のようなすばらしい土地です。……でも、残念ですが、その土地に住んでいる人たちは、強くて……、そればかりではあり

ません、大勢の民が住んでいます。さらに、町という町は城壁に囲まれて、とてもではありませんが、攻め落とすことは……。」

この報告を聞いていた、イスラエルの人は最初のうちは、「うわぁー、大きなぶどうのふさだなあ。乳と蜜が流れるような土地だってさあ、この荒れ野とは、まったく違うよねえ、すばらしい土地なんだね。」と歓声があがりました。ところが、しばらく聞いているうちに、その喜びの声は、失望の声に変わってゆきました。「エーッ、そんな強い人たちが住んでいて、城壁で囲まれている町を攻めることなんか、できやしないよ。」不安の声が大きくなってゆきました。

そのときです。若いカレブが、立ち上がって、「皆、静かにしなさい。」と言って、モーセに力強くこう言いました。「断然上ってゆくべきです。そこを占領しましょう。必ず勝てます。」ところが、他の者たちは、最初の報告者のように、どんどん、悪い知らせ、難しい、だめだ、という情報を流して、カレブの声をとどめました。イスラエルの人たちは、一斉に、モーセとアロンに文句を言いました。「エジプトで死ぬか、この荒れ野で死んだほうがまだましだ。カナンで、剣で殺されるくらいなら、今からでもエジプトに引き返そう、さあ、モーセなんかには頼らないで、別の指導者を立てて、エジプトに帰ろう。」

しかし、ヨシュアとカレブは、そのような人々の叫びに負けていません。「あの土地はすばらしい土地でした。もし、わたしたちが神さまの御心になうなら、神さまが必ず、あの土地に入らせて、与えて下さるのだ。主なる神さまがわたしたちと一緒にいて下さる限り、わたしたちは負けぬ。彼らを恐れてはならない。」と訴え続けました。

神さまは、このときのイスラエルの人々の不平、神さまの御心に反抗したことを軽くは考えでおられませんでした。神さまは、彼らの不信仰を裁か

れました。40年間、荒野をさまよわせたのです。それは、神様に逆らった者たちが約束の地に入らせないためでした。イスラエルの若い人たちは、40年間の信仰の訓練を受けて、ようやく乳と蜜の流れる土地に入ることができたのです。

さて、今日のお話のなかで、いくつかの信仰の真理を学び取ることができます。一つは、偵察した人たちは、同じ町を見ましたね。ところが、くだした結論は違っていました。乳と蜜の流れるすばらしい豊かな土地であることは、同じ意見なのですが、そして、強い人たちがいることも事実でした。ところが、多くの人々は、そんなところに攻め込むことは、殺されることだ、負けるに決まっているとしました。カレブやヨシュアだけは、勝てると言いました。同じものを見ても、カレブたちは、神さまの御心にしたがって、見たわけです。そのときに、正しい判断が下せました。ただの目と信仰の目とは違うのです。カメラだって、先生の目よりもこの光景をよく映し、見ることができます。でも、先生のこの目は、神さまが与えて下さった目です。そればかりか、目に見えないものすら見ることができる信仰の目も与えていただきました。先生は、イエスさまにお会いして、救われたとき、今まで見ていて空も道の景色もまるで色が変わったように見えた経験をしたことがあります。神さまと一緒にいて下さったからです。

今、問題や悩みを抱えているお友達もいるでしょう。でも、イエスさまと一緒にいて下さることに気づいたら、変わって見えてくると思います。神さまに喜ばれるような、判断、考え方で決められると思います。そのような目がパッチリと開かれるために、僕たち私たちは御言葉を学び、聴き、お祈りしてゆくのです。礼拝をささげるのは、そのためでもあるのです。 (相馬伸郎)

---

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書3章3節

イエスは答えて言われた。

「はっきり言うておく。

人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」

---

**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 9/10にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 9/17の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……、教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

**〈分級では〉**

暑さも少しおさまり、だいぶいい季節になってきました。時には、気分を変えて教会の庭など、屋外で分級するのもいいのではないのでしょうか。少し脱線しますが、教会学校のみなさんで、礼拝後にお弁当やカレーを食べるといったミニミニピクニックなども、楽しいと思います。

**〈分級のねらい〉**

私たちは、神様の約束を信じることによって、困難と思えることでも、一步を踏み出せるようになること。神様は何度も、何度も進むべき道を示されているのに、ゴールも見えているのに、その途中でうまくいかなくなると、私たちは途端に愚痴をいう罪深い存在なのだということをこの物語から感じてほしいと思っています。

いよいよ約束の地、カナンが目の前です。モーセは偵察隊を派遣しました。偵察隊の見たカナン

の地は確かに、豊かですばらしい土地でした。しかし、そこには、すでに人が住んでおり、当然、戦いが必須となることもわかりました。偵察隊の多くは、カナンへの侵攻が無理であることを報告し、それを聞いたイスラエルの人たちは、愚痴を始めます。

私は、この箇所が大好きなです。なぜって。まさに自分のことだからです。神様は「カナンを与える」とおっしゃっているのです。約束されているのです。なぜこれ以上ない約束があるのに、躊躇するのでしょうか???

でも、もしも自分が、その立場だったらどうですか。たぶん躊躇してしまいますよね。イスラエルの人たちのように神様にいっぱい愚痴をいいますよね。そうなんです。イスラエルの人たちの姿は、まさに、私の姿なのです。振り返ると、私は、今回のようなことの連続でした。神様の御心と違っているとわかっていながら現実を思うと、自分の中で曖昧に納得してすませていたり、自分の思いだけにとらわれて、前に進めないでいることばかりです。みなさんはいかがですか。神様に祈り求め、神様を信じて一步を踏み出す。そのような存在になりたいと、子供たちにお話ができたらと願っています。

**〈祈り〉**

神様、イスラエルの人たちが、カナンに偵察に行ったお話を聞きました。神様にお祈りして、しっかり正しいことができる子供にしてください。

**〈共通工作〉**

**目的：**みんなで紙芝居を作ろう！

族長時代から出エジプトまでの一連のストーリーを創世記から申命記までのお話の流れと神様の約束の実現をこどもたちと一緒に理解していくこと

**準備するもの：**紙、色鉛筆、くれよん（絵が描ける道具ならなんでもよい）

**作業手順：**その日のお話の終了後に一番印象に残ったところをそれぞれ絵に描いてもらう。描いた絵はとっておきます。最後の“モーセの死”の単元が終わった時点で、描かれた絵とぬりえ例の絵をすべて集めて、並べると紙芝居ができあがります。最後にみんなで作った紙芝居を使って、お話をしてもよいでしょう。

## 〈子どもたちに伝えたいこと〉

同じものを見ても、神様をたよりにしている時と、そうでない時とでは、全く違って見えてしまう。神様が喜ばれるのは、神様をたよりにして先へ進んでいくことである、ということ。

## 〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○カナンの様子をさぐりに行った人たちは、二人でかつがなければならぬほど大きなブドウの房を持って帰ってきました。そして、その土地へ行くことを、モーセたちにどんなふうの説明したでしょうか。

※彼らは、「そこは素晴らしい土地だが、強そうな住民がいて、とてもせめていけるようなところではない」と説明しました(13:27~29)。

○イスラエルの人たちはみんな同じ意見だったでしょうか。

※カレブとヨシュアは、「素晴らしい土地だったが、神様が私たちにあの土地を与えてくださるだろう」と言いました。同じ「素晴らしい土地」を見てきたのに、カレブたちと他の人たちの考えはまるっきり正反対でした。

カレブたちは、神様は自分たちにいつもよいことをしてくださる(ローマ8:28)ということを知っていました。だから、神様がこの土地を下さると約束してくださるのだから、強そうな人たちと戦っても神様が勝たせてくださると信じました。

しかし、他の人たちは神様のことを考えずに、自分たちがあの強そうな人たちと戦って勝てるわけが無い、と考えたのです。

○同じものを見ても、神様が一緒にいてくださると思っただけで見るのと、神様のことなんか忘れてしまっただけで見るのでは、たいへんなちがいはあります。

※神様は何でもできる方です。その神様がいっしょにいてくださるのですから、私たちも、神様を頼りにして、神様の道を歩んで行きましょう。

## 〈ちいさなお祈り〉

○神様は、いつも私たちと一緒にいてくださり、私たちが神様の道を歩んでいくことができるように助けてくださることを「ありがとう」とお祈りしましょう。

## 〈ねらい〉

信仰の目をもって見ることの大切さを教える。

## 〈展開例〉

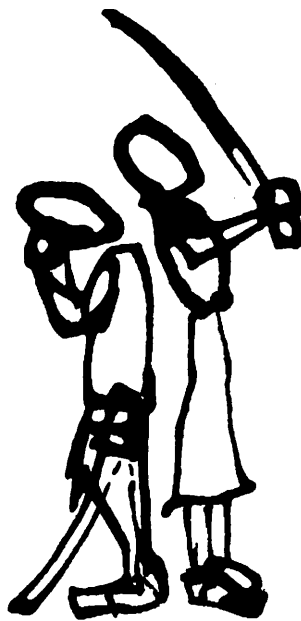
1. 今日のお話を良く聞きましたか。カナンの地に偵察に行ったのは何人だったでしょう。
2. 12人の偵察者の内、10人は否定的に結果を報告しました。しかし、二人は肯定的で積極的な結果を報告しました。なぜ、同じことを見てこのように違う結果を言ったと思いますか。
3. 友達など言い合ったことがありますか。自分は正しいことを言っているのに、相手の子を応援している人が多くて、自分の意見が通らなくて悔しくなったことはありますか。数が多いから必ずしも正しいことではありません。
4. 二人の偵察者が正しいこと言ったのはその人の中に、神様を信頼する信仰があったからです。信仰なしにものごとを見ることと、信仰でものごとを見ることはやはり違うでしょうか。違うならどんなことが違うでしょう。
5. (実験) 準備物：赤い色眼鏡  
ここに赤い色眼鏡があります。眼鏡をかけないで見ることと、眼鏡をかけて見ると、何が違いますか。
6. 赤い色眼鏡で見ると、すべての世界が赤く見えます。同じように、眼鏡という信仰を通して、世界を見ると、今まで見えなかったことや見えるようになり、今までとは全然違う形で見える

こともあります。だから、信仰を持つことはとても大切ですね。

7. イエス様は信じることによって、信仰の目が開かれますようにお祈りしましょう。

## 〈お祈り〉

神様。私たちがイエス様を信じて、信仰の目が開き、信仰によってこの世界を見ることができるよう、御霊の助けをお与えください。



恐れてはならない

## 〈今日のカテキズム〉

☆今日の箇所から、神さまの御心になかった判断・行動をするにはどうすればよいのか、ということを考えさせられます。まず、神さまが人に求めておられることを次のカテキズムで確認しましょう。

## ウェストミンスター小教理問答

問39 神が人に求めておられる義務は、何ですか。

答 神が人に求めておられる義務は、神の啓示された御意志に服従することです。

☆啓示された御意志に服従し、神さまの御心になかった行いをするためには、まことの悔い改めが必要であることをハイデルベルク信仰問答は教えてくれています。まことの悔い改めが古い人の死滅と、新しい人の復活から成る、ということを教え（問88）、それによって生き方がどう変わっていくものなのかが示されています。この生き方が、カレブに表れていることを確認できるでしょう。

## ハイデルベルク信仰問答

問90 新しい人の復活とは何ですか。

答 キリストによって心から神を喜び、また神の御旨に従ったあらゆる善い行いに心を打ち込んで生きる、ということです。

問91 しかし、善い行いとはどのようなものですか。

答 ただまことの信仰から、神の律法に従い、この方の栄光のために為（な）されるものだけであって、わたしたちがよいと思うことや 人間の定めに基づくものではありません。

☆同じことを、ジュネーヴ教会信仰問答は次のような流れで記しています。

## ジュネーヴ教会信仰問答

問128 悔い改めとはどんなことですか。

答 それは神へのおそれから生まれてくる、悪に対する嫌悪と善に対する愛であり、またそれは、われわれをしてわれわれの肉の勢力を失わせるように誘導し、われわれが聖霊によって支配され導かれて、神に仕えるようにならせるのであります。

問129 これが、キリスト者の生活についてわれわれが述べておいた第二点です。

答 その通りであります。そして神に対する真の正しい奉仕は、われわれがみ心に服従することにあると申し上げた通りであります。

問130 何ゆえですか。

答 神はわれわれの気まぐれで仕えられることをお望みにならず、神が喜ばれるように仕えることを、望まれるからであります。

☆そして、神を喜ぶ道、この方の栄光のために為す行いとは何かを教えるものが聖書であることを、次のカテキズムは教えています。

## ウェストミンスター小教理問答

問2 神は、私たちに神の栄光をあらわし神を喜ぶ道を教えるため、どんな基準を授けていてくださいますか。

答 旧新約聖書にある神の御言葉だけが、私たちに神の栄光をあらわし神を喜ぶ道を教える、ただ一つの基準です。

## 〈今週の聖書日課〉

日曜日 イザヤ57：15

月曜日 ローマ14：17・18

火曜日 ローマ6：10・11

水曜日 ガラテヤ2：20

木曜日 ヨハネ15：5

金曜日 サムエル上15：22

土曜日 イザヤ29：13



テキスト 申命記34章1～12節

イスラエルの民をエジプトから約束の地カナンを目前とするモアブの野へと40年間導いたモーセは、ネボ山にて死に葬られる。彼の働きは後継者ヨシュアに託され、新しい世代の民と共に約束の地カナンへ入っていくこととなる。一つの時代の大きな区切り・節目を示すのがモーセの死と葬りの出来事である。

### 〈カナンに渡ることはできない〉

主なる神は、モーセに、あなたは約束の地を見るが、そこに渡っていくことはできない、と彼の任務の終わりを告げられる(34:4)。モーセは最後に、ネボ山のピスガの頂に登り、約束の地の全土を見渡すことが赦された。彼が目にしたのは、まさに族長アブラハム・イサク・ヤコブへの神の約束通りの良い地であり、神の祝福される嗣業の地であった。けれどもモーセ自身、その地に入っていくことは出来ない。それは、何よりも先の世代の罪と咎の責任をとってである。しかし、それだけでなく、彼個人としては体力も気力も充分であったが、民全体を導き、新しい使命(カナン入植)を果たすには限界があったと考えられる(34:7)。新しい任務は、新しい指導者により、新たな世代の民が負い果たすべきものである。どんなに偉大な指導者と言えども、その働きには制約があり、終わりがあることを示される。神の救いのみ業、神の約束のみ業は、世代を重ねて為していかなければならない遠大な性質のものである、と言える。

### 〈主がモーセを葬られた〉

モーセは、神が彼に与えられた働きを全うし遂にネボ山で死に、恐らくヨシュアの手によって墓に丁重に葬られたと思われる。けれども聖書(申命記)は、あたかも主御自身がモーセを葬られたかの如くに述べ、従って彼の墓の場所は誰も分からないと記している(34:6)。あまりにも偉大な指導者故に、かつてのエジプトでの埋葬のごとく

神格化されることを、神が案じられての特別な配慮であろう。

後継者のヨシュアも、そして出エジプトや紅海の奇跡を知らない新たなイスラエルの民も、本当に畏れ従わなければならないのは、モーセではなく彼を用い御自分の約束を真に実現される神御自身に対してである。先の指導者への敬意や哀悼は現さなければならないが、しかしそのことが主なる神御自身に代わってしまったり、いつまでもそこに思い留まることは、むしろ不信仰である。先立ち給う主に従って新たな歩みをなしていくことが大切である。

### 〈モーセのような預言者〉

最後に、申命記は、モーセの生涯とその働きに対しての神による評価を記して閉じている(34:10)。このモーセへの賞賛は、彼の為した業績や人間的な価値に対してでは決してない。彼は、やはり神に仕える一人の僕であり、又主が用いられた器の一つでしかない。あまりにもモーセその人自身を過大に評価することは、おおいに慎まねばならないであろう。全ての栄光は、神御自身がとられるものである。

ではこのモーセに対する神の評価は、どういう意図をもってのものなのか。それは、何よりも彼の全生涯とその働きを主が覚えていて下さる、その働きに対する報いは主御自身が豊かに備えて下さることを示す。ここに神の僕としての光栄と喜びとがある。そしてこのモーセの役割と働きは、やがておいでになる真の救い主イエス・キリストが神の家においてなされるお働きのひな形であり、予型であった。その点でモーセよりも偉大な預言者は起こらなかったと言える。ただ一人、真の神の御子イエス・キリストだけが、神の約束を真に実現される真の仲保者であられることを明示している(申命記18:15、ヨハネ1:17～18、ヘブライ3:2～6)。(山下朋彦)

テキスト 申命記34章1～12節  
 参照カテキズム 子どもカテキズム問80

### (単元のねらい)

モーセは、120歳で死ぬまで、現役の神の民の指導者であった。神は、このモーセを通して、ご自身の栄光、神の民の救いを進められた。しかし、この旧約聖書中、最大の預言者にしてなお、約束の地を見下ろすだけで、そこに入ることは許されなかった。発達段階にしたがって考えさせ、教えたい。たった一度のメリバの井戸における御言葉への真剣な聴従を怠ったことが、原因とされている。神の裁きの峻厳さ、指導者の責任の重さを見ることができる。しかし、他方、神は、このモーセ本人を懲らしめるためだけにそうなさったのではないであろう。モーセにとっても、(他ならない神ご自身にとっても)地上の約束の地より、天上の永遠の故郷に入ることこそ、最大の喜びであったではないか。いずれにしろ、神の祝福のなかで、彼の生涯は全うされたのである。さらにまた、神の民の救いの歴史は、一代で完成せずとも、受け継がれて行くのである。日本キリスト改革派教会の将来もまた、契約の子らに受け継がれてゆくであろう。そのために今、励みたい……。

## 「神の人モーセの死」

旧約聖書の申命記の最後の箇所にご書かれています。「イスラエルには、再びモーセのような預言者は現れなかった。」つまり、モーセさんは、旧約聖書のなかで、一番、すごい神さまの働きをした人だということです。こんな風に神さまに言われたモーセさんは、すばらしいですね。それもそのはずです。モーセさんは、エジプトの奴隷になっていた大勢のイスラエルの人々を、神さまの約束の地カナンへと連れ出した人だからです。この出来事は、イエスさまが、僕たち私たちにしてくださったこと、つまり、罪と死の奴隷になってしまっ、そのままであれば、天国などには決して入れない、惨めな、汚い心になっていた僕たち私たちを、地獄から天国へ、神さまと一緒にいてくださるところへ連れ出して下さった救いのみ業に比べられるほどのものだからです。つまり、モーセさんは、神さまの力によって、イエスさまを思い出させるようなすごいことをしたのです。

もともとモーセさんは、40歳まで、エジプトの王宮で過ごしました。その後、80歳まで、羊飼いで過ごしました。そして、80歳になって、イ

スラエルの人々を約束の地まで導くお働きをし始めました。しかしついに、今、120歳になったのです。けれども、まだまだ目もよく見えて、神さまのために生きる力は、まんまんです。

そして神さまは、そんなモーセさんに、ついに、ピスガという山に登らせて、約束の土地を見せて下さいました。モーセさんはどんなに、うれしかったことでしょうか。想像して下さい。40年間も荒れ野をさまよいながら、仲間たちから、数え切れないほど、文句を聞かされてきたのです。「モーセなんて、いんちきだ。神さまが俺たちを救うために、荒れ野に連れ出したのではなく、こんな嫌な場所で、殺すために連れ出したのだ。モーセについて行った俺たちが愚かだった、エジプトに戻ろう、帰ろう。」誰よりも約束の地を待ち望み、誰よりも約束の土地に入りたいと思っていたのは、モーセさんだったはず。そして、ついに今、モーセさんはその目で、約束の土地を見ているのです。すでに目の前にいるのです。どんなにうれしかったでしょう。どんなに、わくわくしたでしょう。

ところがどうでしょう。神さまは、このモーセさんに厳かに仰せになりました。「あなたは、そこに渡ってゆくことはできない。」

「エッ、何でそんなことになってしまうの」と思いませんか。「神さま、モーセさんがかわいそうではないですか。もうちょっとだけ、もうほんの少しだけ長生きさせてくださったら、モーセさんは喜んだはずなのに。」そんな風に考えるお友達はいませんか。昔、先生は、そんなことを考えました。

神さまは、なぜ、モーセさんが約束の地、カナンに入らせられないのかという理由を、お教えくださいました（民数記20：51-52）。それは、昔、カデシュの地のメリバの泉で、モーセさんは、一度、神さまの前に失敗したこと、罪を犯したことがあるのです（民数記20：1-13）。それは、こんなことでした。イスラエルの民がカデシュに滞在していたときのことで。そこには、大勢の人々に必要な飲み水がありません。ですから、彼らはモーセに文句を言いました。「どうして我々をこんな場所で殺そうとするのですか。エジプトのほうがよほど良かったのに。」モーセさんは、このような厳しい声を聞いた後で、神さまの幕屋の中で礼拝しました。すると、神さまは仰せになりました。「イスラエルの前で、岩に向かって水を出せと命じなさい。」ところがモーセさんは、そこで、いつものように杖をもって、その岩を二度打ったのです。すると、いつものようにその岩から、ピューっと水がほとばしりでした。そして、イスラエルの人々は、ワーッと大きな声をあげて、ごくごく水をおいしく飲んだのです。

さて、みんなの中で、「どうしてそのことが神さまの前に悪いことなの、罪を犯したことになるの？」と不思議に思うお友達もいるかもしれません。モーセさんは、どこで神さまの御言葉に背いたのでしょうか。モーセは、杖で岩を二度打ち

ました。注意してください。神さまがこのときモーセに仰せになったのは、岩を打つことではありませんでした。あるときは、確かに、杖で岩を打てとお命じになりました。そしてその通りになりました（出エジプト記17章）。しかし、ここでは、ただ言葉で言うだけでよかったのです、それ以外には、してはいけなかったのです。

「たったそれだけで？」と思うかもしれません。確かに、神さまは、モーセさんにとても厳しかったと思います。けれども、人々に神さまの御言葉を告げる人自身が、御言葉に鈍感で、不注意であってはいけないのです。この出来事は、実は、誰でも、神さまの御言葉は、心を込めて聴いて、その通りに従わなければならないことが示されているのです。

けれども、先生は、このようにも考えています。約束の土地に入ることもすばらしく、素敵です。でもモーセさんは、120歳ですね、もともとモーセさんにとって、もっともすばらしいことは、天国に入ることです。神さまも、天国へ迎え上げられることを望まれたのだと思います。

また、神さまは、カナンの土地を占領することは、120歳のモーセではなく、若い人たちに引き継がせられたのです。

わたしたちの教会も、今、牧師先生や日曜学校の先生たちが指導者として、神さまの御言葉に聴き従って、いろいろな奉仕をして、イエスキリストの教会を建てています。天国を目指して進んでいるのです。けれども、この神さまのお働きは、先生たちの世代で、完成できないかもしれません。それなら、この教会の明日、将来は、誰が引き継ぐのでしょうか。それは、僕たち私たちですね。モーセさんは、若い人たちに期待して、死んで行ったと思います。僕たち私たちも、この教会の一員として、天国を目指し、進み行くのです。

（相馬伸郎）

---

### 【今週の暗唱聖句】      ヘブライ人への手紙11章16節

ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。

だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥とささいません。

神は、彼らのために都を準備されていたからです。

---

**〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉**

1) 9/17にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 9/24の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……、教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみさんのために祈りましょう。

**〈分級では……半年ありがとうございました〉**

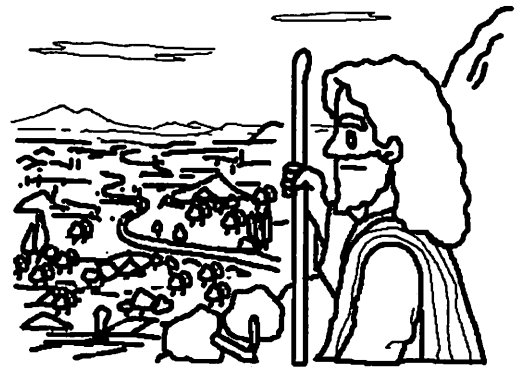
4月に始まった分級も半年が過ぎました。子供たちもすっかり大人になったことと思います。子供たちの成長を豊かに祝し、守ってくださっている神様に感謝します。分級だけでなく、いつもの生活の中で、子供たちの成長を祈っていただけと思っています。

私の担当分も今日が最後です。半年間ありがとうございました。みなさんの少しでもお役に立てたら幸いです。足らない部分の多い私の働きをお守りくださった神様に感謝します。

**〈分級のねらい〉**

今日のポイントは以下のイラストがすべてです。本教案誌作成にあたりイラストを担当くださった植田さんによるものですが、大きな神様の仕事を

やり遂げた、満足そうな表情が見て取れませんか。カナンの地に入ることができなかったモーセですが、神様に従い、神様の大きな守りの中で、その仕事をやり遂げたモーセは十分満足ではなかったのか？ と私は思っています。先週、神様に従って一步を踏み出すことを述べました。モーセの召命で述べましたように、モーセは最初の一步をなかなか踏み出すことができませんでした。何とか、リーダーとして一步を踏み出した後も多くの罵倒を受けました。苦しいことの連続だったでしょう。それでもなお、神様に従い、祈り、イスラエルの民を導きました。私たちもモーセのように神様に従い歩みたいと願っています。

**〈祈り〉**

神様、私たちもモーセさんのように神様に従い、歩むことができる子供にしてください。

**〈共通工作〉**

**目的：**みんなで紙芝居を作ろう！

族長時代から出エジプトまでの一連のストーリーを創世記から申命記までのお話の流れと神様の約束の実現をこどもたちと一緒に理解していくこと

**準備するもの：**紙、色鉛筆、くれよん（絵が描ける道具ならなんでもよい）

**作業手順：**その日のお話の終了後に一番印象に残ったところをそれぞれ絵に描いてもらう。描いた絵はとっておきます。最後の“モーセの死”の単元が終わった時点で、描かれた絵とぬりえ例の絵をすべて集めて、並べると紙芝居ができあがります。最後にみんなで作った紙芝居を使って、お話をしてもよいでしょう。

## 〈子どもたちに伝えたいこと〉

モーセが約束のカナンの地を目の前にして地上の生涯を終えたのは、モーセが神様から与えられた役割を果たし、神様の御許で休むことができたのだ、ということ。

神様は、今この世に生きている私たちにも役割を与えてくださる、ということ。

## 〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○モーセは、約束のカナンの地をみわたせる山に連れてこられ、自分がイスラエルの人たちをここまで連れてくることができたということを教えられました。そして、その後、モーセは約束の地に入ることなく、その山で死んで葬られました。どうして、モーセはこの山で天に召されたのでしょうか。

※モーセは、神様に文句ばかり言っているイスラエルの人たちをエジプトから脱出させ、カナンの地に入るところまで連れてきました。それはたいへんしんぼうと努力の要る仕事でしたが、モーセはそれをなしとげました。神様が命じられた仕事を最後までやりおせたのです。神様は、そのモーセの苦勞にこたえて、もうこれからは苦勞の無い、神様の許へ連れて行ってくだ

さったのです。

モーセがカナンに入れないことは、メリバの泉での失敗が原因とも言われるが、低学年には理解できない理不尽さではないかと思ひ、主の業をなしとげた凱旋ととらえてみました。

○私たちも、まだまだ若い(小さい)ですが、こうしてこの地上で生きているということは、神様から命じられた仕事があるからです。みなさんも、これから、神様が何をしなさいと言っておられるのか、神様にたずねながら大きくなっていってください。

※私(伊藤)自身は、この世にいるのは、主イエスが、付いて行きたいと願ったゲサラの人(悪霊を追い出してもらった人)に「神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい」と言って家にお返しになったように(ルカ8:26~39)、「主がして下さったこと」をまわりの人たちに話して行くことを命じられているからだと思っています。日曜学校の奉仕は、そのためのとても大きな道であると感じています。

## 〈ちいさなお祈り〉

○神様が私に何をしなさいと言っておられるのか「教えてください」とお祈りしましょう。

## 〈ねらい〉

信仰は自分だけ守って切って終わることではなく、次世代の人々の受け継がせることであることを、子供たちの心にも与える。

## 〈展開例〉

1. 今日、モーセさんが死ぬ話を聞きました。人が死ぬことは寂しいですね。皆さんの周りになたか愛する人が亡くなった経験をしたことがありますか。(話し合う)
2. 人はだれでも死にます。歳を取って死ぬ人もいれば、事故や病気で死ぬ人もいます。しかし、死ぬことは決して寂しい、悲しいことばかりではありません。
3. 死は、イエス様を信じてない人には悲しいことかも知れませんが、イエス様を信じている人には天国への希望があります。だから、わたしたちの死は希望があるのです。皆も、後で死んだ後復活して、一緒にイエス様を信じてきたお祖父さんやお祖母さんと出会える日を楽しみにしたいと思います。
4. しかし、人は死んでも残して置くもの、後の人

に継がせて置くものがあります。モーセは死んで後の人に何を継がせたと思いますか。

5. それは信仰でした。一緒にヨシュア記1章を読みましょう。
6. わたしたちの教会にもお祖父さんやお祖母さんがたくさんいます。そのお祖父さんとお祖母さんの大きな願いの一つは何だと思いますか。それは、ここにいる皆にイエス様を信じる信仰を伝えることです。そして、その信仰が皆さんを通して、またこれから生まれてくる人々にも伝えることです。
7. それは神様がわたしたちに与えてくださった命令です。わたしたちは神様に喜ばれることを覚えて、未来の教会を守っていく人々になりましょう。

## 〈お祈り〉

愛する神様。わたしたちに教会を与えてくださり、また信仰の先輩を与えてくださって感謝します。これからわたしたちが信仰を守り続けて、後の人にもそれを伝えることができるように助けてください。

## 〈今日のカテキズム〉

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問80が挙げられています。

問80 「御国を来らせたまえ」では、何を祈り願うのですか。

答 神さまの恵みの支配が 教会の中で確立され、教会を通して広げられ、ついにはイエスさまが再び来て完成してください、ということです。

☆モーセは偉大な指導者でしたが、モーセの時代だけでイスラエルの救いが完成したわけではありませんでした。モーセが約束の地に入るまで生きていたら、イスラエルの救出はモーセが成し遂げたこと、と人々は思ってしまったかもしれません。しかし、モーセ自身は約束の成就を最後まで見ることはできませんでした。道なかばにしてのモーセの死は、神さまが、モーセ自身にも、イスラエルの民にも、その目を、神さまご自身による救いの完成・成就へと向けさせ、待望させるきっかけとなる出来事となりました。

☆わたしたちは、主の祈りをいつも祈ることによって、神さまが救いを完成し、御国を来らせてくださることを待望している、ということを実感しているでしょうか。このことを、カテキズムで確認したいと思います。

## ハイデルベルク信仰問答

問123 第二の願いは何ですか。

答 「み国を来らせたまえ」です。  
すなわち、あなたがすべてのすべてとなられる御国の完成に至るまで、わたしたちがいよいよあなたにお従いできますよう、あなたの御言葉と聖霊とによって わたしたちを治めてください、あなたの教会を保ち進展させてください、あなたに逆らい立つ悪魔のわざ業やあらゆる力、あなたの聖な

る御言葉に反して考え出されるすべての邪悪な企てを滅ぼしてください、ということです。

## ウェストミンスター小教理問答

問102 第二の祈願では、私たちは何を祈り求めるのですか。

答 「み国をきたらせたまえ」という第二の祈願で私たちが祈る事は、サタン王国を滅ぼして下さるよう、恵みの王国を進展させ、私たち自身と他の人々をそこに入れ、その中に守って下さるよう、また栄光の王国を早く来らせて下さるよう、ということです。

☆次のカテキズムは、一步踏み込んだ内容です。  
問268、269に続く問答です。

## ジュネーヴ教会信仰問答

問270 そのことは、現在すでに行なわれておりませんか。

答 確かに部分的には行なわれております。しかしそれが絶えず成長し、ついにはまったきに至るまで進みゆくことをわれわれは願うのであります。これは審判の日になるであります。その日には、神のみが讃美せられ、被造物はことごとく神の偉大さの前にしたがえられ、神がすべてのことにおいてすべてとなられるのであります。

## 〈今週の聖書日課〉

日曜日 ヨシヤ1:6~9  
月曜日 ローマ8:23  
火曜日 詩編119:105  
水曜日 詩編143:10  
木曜日 ローマ16:20  
金曜日 黙示録12:10・11  
土曜日 黙示録22:20

## 第4課 感謝をもって祈る

## 1. 恵み深い主に感謝せよ

キリスト者にとって、祈りはもっぱら神に願うことであります。願いをささげるにあたって、自分の罪を告白すること、神の憐れみを感謝することが求められています。この枠組みについては『ウェストミンスター小教理問答』98および『同大教理問答』178に触れて見たとおりです。

詩編は、旧約の信徒たちの信仰と生活の全体像を映し出すものとして、貴重な宝です。神が主権をもってすべてを統治されることを信じる者はだれでも、自然と人間に施される神の恵みを感謝して、直ちに神を賛美することへと走り込みます。感謝と賛美の根拠は絶えることなく、わたしたちの目の前にあります。もし、神の恵みに対して、賛美することなしに放置するならば、それは「悪意の沈黙」である、とカルヴァンは言い放ちました（『綱要』3:20:28）。恐ろしい言葉です。

見えているはずであるのにしっかりと見ていないことが、たびたびあります。わたし自身、詩編104編を読んでいて、そのことを思い知らされました。ここには、自然の中に満ちあふれている創造主である神の恵みが細やかに描き出されています。創世記第1章の創造記事が詩的表現をとって立体的に浮かび上がってくるような思いがします。

自然と歴史の舞台に神の知恵と力とを読み取る者は、信仰の目をもって告白して言います——「主よ、御業はいかにおびただしいことか。／あなたはすべてを知恵によって成し遂げられた。／地はお造りになったものに満ちている」（24節）。これは、いわば総括的な表現であり、その背後には驚くばかりの細密描写があります。神の摂理は、細部にまで及んでいます。これを認める者は、口をつぐんだままではられません——「主に造られたものはすべて、主をたたえよ」（22節）。神の恵みに打たれる者は、感謝をもって、この恵みを告げ知らせるのです。

続く105編では、神の選びの民が、歴史の中で

変わる事のない神の誠実と真実とによって守られ、導かれている事実が、さまざまな事跡をたどる形で、詳細にわたって告白されています。その中心を成すのが、アブラハム契約を実現する神の誠実です——「主はとこしえに契約を御心に留められる……アブラハムと結ばれた契約／イサクに対する誓いを」（8～9節）。救いの歴史を推進する神は、ご自分の成し遂げられた驚くべき御業と奇跡のかずかずを心に留めるように、と求めておられます（5節）。「主に感謝をささげて御名を呼べ」（1節）との呼び掛けが、契約の民の頭上に響いています。

次の106編は、105編とセットになっています。神の不変の恵みと真実にもかかわらず、罪を重ね、神に反抗したイスラエルの悪行のかずかずが、具体的に列挙されています。しかし、それにもかかわらず、背きの民を顧み、契約を思い起こし、これを実現に至らせる神の誠実の勝利が、本編の中心点として輝いています（44～45節）。キーワードは、「主はなお」です（44節）。105:1「主に感謝をささげて御名を呼べ」は、106:1「恵み深い主に感謝せよ」と対応の関係にあります。

## 2. キリストにおける恵みの感謝

アブラハムに立てた聖なる契約を神は覚え、救いの角をダビデの家から起こし、そのことをもって、ご自分の民を訪れてくださいました。ザカリアが預言するとおりです（ルカ1:67～79）。高い所から訪れたあけぼのの光、すなわち、神が天から遣わしてくださった独り子の神、イエス・キリストによる恵みと救いを、福音の時代の信者は感謝をもって受け、神に賛美をささげます。個人でも、教会としても、わたしたちの祈りは、このキリストにおける恵みの感謝に満ちあふれています。

パウロとともに、「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方」に、わたしたちは感謝の祈りをささげ、この方に信頼を置きます（ローマ8:32）。「神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵み」を、わ



たしたちは心の限りたたえます（エフェソ1:6）。「キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになった」恵みへの感謝は尽きません（エフェソ5:26）。

罪の赦しによる救いが、わたしたちの感謝の主題であり続けます。ヘブライ人への手紙の著者は、大祭司であられるイエスが、ご自分を犠牲としてささげ、その血によって贖いの業を完成されたことを告げて言いました——「だから、イエスを通して賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえる唇の実を、絶えず神に献げましょう」（13:15）。詩編107:22「感謝のいけにえをささげ／御業を語り伝え、喜び歌え」は、ヘブライ13:15と響き合う関係にあります。

「何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい」とパウロは勧めました（フィリピ4:6）。感謝の根底には、主はわたしのために死んでくださったとの福音があります。感謝の支柱は、天上のキリストの仲保と執り成しへの信頼です。この信頼のあるところに、もろもろの思い煩いは絶やされます。

『ハイデルベルク信仰問答』第三部の表題「感謝について」は、1889年（明治22年）の邦訳では、「恩（めぐみ）を感じる」となっています。「感恩」は、恩をありがたく思うの意で、「感謝」と比べて、内容豊かな語に聞こえます。

### 3. 感謝を深めるための瞑想（めいそう）

旧約の教会は、神を「大いなる主、限りなく賛美される主」と呼んで礼拝しました（詩編48:2）。その礼拝の中で、契約の民は言いました——「神よ、神殿にあってわたしたちは／あなたの慈しみを思い描く」（10節）。新共同訳聖書がもつばら「慈しみ」と訳出したのは、神の契約のまことを指す語で、契約を立て、これを歴史の中で実行し、完遂する神の不変不動の誠実を言い表しています。契約の民の歴史の節目節目に、神の誠実は具体的な神の腕の働きとなって、現れ出しました。

「思い描く」と訳された語は、想像するの意ですが、新改訳が「思い巡らしました」と訳しているとおおり、瞑想を指しています。思い巡らすこと

は、心の中に秘めておくままに終わることはありません。瞑想は、神を崇める集会の中で、主の真実と救いを語り、神の誠実と真実とを隠さずに告げることへと昇りつめます（詩編40:11）。契約の民は、契約を果たしてこられた神の足跡を、あの出来事、この出来事の一つひとつに認め、なお一層、神への信頼を固くします。神が約束された助けを求める懇願は、この信頼の上に、より激しいものとなって立ち昇ります。「わたしの契約を彼に対して確かに守る」と断言された神は、「わたしの唇から出た言葉を変えることはない」と、厳かに告げ、「ダビデを裏切ることは決してない」と誓われました（詩編28:29、35、36）。祈りの中に瞑想を組み込んだダビデの例を挙げて、カルヴァンは、「瞑想が祈りの間に入れられることは決して無益でない」と記しています（『綱要』3:20:13）。瞑想をこらすところに、祈りの熱烈さが燃え上がります。

若い時から、「ほむべきかな 主のみめぐみ、今日まで旅路を 守りたまえり」と歌ってきました（『讚美歌』534。『讚美歌21』464を参照）。信仰生活のあの節目、この節目で、主なる神が力強く働いてくださったあのこと、このことを、摂理のみ手の業として深く瞑想するとき、賛美の声は一層高められます。わたしの正直な思いからすれば、「きょうまで」と歌うときに、これまでの一日一日を思い巡らすことができるようになったのは、70歳を超えてからのことでした。

「どんなことにも感謝しなさい」と、パウロは勧めています（テサロニケー5:18）。神の摂理の跡は、どの信徒の生涯にも深く刻み付けられています。感謝の根拠を、神は十分に差し出しておられます。わたしたちの魂が怠惰に陥ることがないように、神は鋭い針をもって突いてくださいます。

【宿題】 詩編145編ダビデの詩を読み、神の力強い御業についてのダビデの思いと受けとめ方を吟味しなさい。御業の「数々」、御業を「数え上げます」とある点に留意しなさい。詩編40:6「数知れない御計らい」も参照のこと。

（石丸 新）

## 第5課 希望をもって祈る

## 1. 瞑想のうちに神を待ち望む

「わたしの魂は沈黙して、ただ神に向かう」とダビデは神への信頼を告白して言いました(詩編62:2)。文語訳が、「黙してただ神を待つ」としたとおり、沈黙は、「待つ」という積極的な信仰の姿をまもっています。その積極性は、同じ2節の「神にわたしの救いがある」との確信の表明から明らかです。その確信は、3節でさらに詳しく言い表されています。

沈黙とは、何も言わない、何もしないことではありません。四字熟語の「沈思黙考」は、聖書では、神の驚くべきみ業の数々を深く考え、そこに啓示された神の不変不動の恵みに思いを沈め、その深みから神を賛美するに至る、生き生きしたあり方を指し示しています。キリスト教瞑想は、神信頼の告白と神賛美へと昇りつめる、信仰者の息遣いそのものです。その息遣いに伴うのが、身を乗り出すようにして神を待ち望む姿勢です。

2節で、「神にわたしの救いがある」と言って沈黙の根拠を明らかにしたダビデは、6節では、自分を沈黙へと奮い立たせて、「神にのみわたしは希望をおいている」と言いました。直訳すると「わたしの希望は、神から」となります。2節も直訳すれば、「わたしの救いは、神から」となります。この「神から」こそ、神の絶対主権の告白にほかなりません。この告白に基づいて、「わたしはあなたを待ち望みます」との言明と、「あなたが計らってくださるでしょう」との信頼の表明が、ダビデの口からほとばしり出たのです(詩編39:8、10)。

2節で、「わたしの魂は沈黙して」と言ったダビデは、6節で、「わたしの魂よ、沈黙して」と自分に呼び掛け、さらに9節では、「民よ」と呼び掛けて、契約共同体の堅持すべき神信頼を強く勧めています。新約の民である教会は、天から遣わされた独り子イエスを唯一の贖い主として受け入れ、キリストこそは、「永遠の救いの源」と告白します(ヘブライ5:9)。

自分の窮乏を意識し、へりくだりをもって神に祈り求めるときに、神がこれを聞き届けてくださるとの確信が、わたしたちの祈りの生活のいのちを成しています。神が時に適う助けを与えてくださるとの確信が、祈る者を勇気づけます。大胆さと希望は、祈りにおいて一つに織り合わされます。神の誠実と真実の実例から力をいただき、晴れやかな心をもって神に望みをおいたダビデを、わたしたちは模範としなければなりません。「きょうまで旅路を 守りたまえり」と歌う信徒の来し方には、神の不変の恵みと不動の愛の証拠が満ちています。

## 2. 張りつめた望み

詩編25編ダビデの詩は、信頼と希望の二重唱となっています。「あなたに望みをおく」という表現が、3節、5節、21節に用いられ、それがこの詩を美しく彩っています。詩編130編「都に上る歌」では、「わたしは主に望みをおき／わたしの魂は望みをおき」と歌われています(5節)。ほかの用例として、詩編27:14、37:34を挙げるができます。これらの個所に用いられている「待ち望む」の原語は、糸をよること、縄をなうことを原意としていて、極限まで引っ張っても切れることのない、緊張の極致を言い表しています。

戦時下の小学校で、手工(今の工作)の時間に模型飛行機を作ったことを思い起こします。動力となるゴムひもを、プロペラを回して巻き、切れる直前まで、できる限り多くのこぶをこしらえたものでした。同じ戦時下、旧制中学の野営訓練でテントを設営するときには、ロープに手の力をかけて、「張り張りにする」と言ったものでした。この張力が、上の個所で用いられている「待ち望む」の語の中心を成しています。この語の意味を告げるにあたって、英語の説教ならば、さしずめ、「ホープ(希望)はロープである」との語呂合わせを用いるところでしょう。

詩編25:5で、ダビデが「あなたはわたしを救ってくださる神。／絶えることなくあなたに望みをおいています」と歌うとき、そこには、祈りにお

ける持続と集中が言い表されています。「絶えることなく」は、口語訳では、「ひねもす」、すなわち一日中ということです。たとい逆境にあっても、神の介入をひたすら待ち望み、望み得ないときにも、なお待ち望んだダビデの身の構えを、詩編のあちこちに読み取ることができます。

詩編40:2で、「主にのみ、わたしは望みをおいていた」とダビデが歌う個所に用いられたのも、張力を指す語「待ち望む」です。「待った、わたしは待った」が、原文の言い回しで、そこには、決して中断することのない、持続の側面が浮き彫りにされています。張りつめた望みは、くずおれることのない忍耐と結ばれて、主に目を注ぐ人を支えます。パウロも、「絶えず祈りなさい」と勧めました(テサロニケー5:17)。「絶えず」は、「中断することなく」です。祈りの忍耐については、第8課で取り上げることとします。

主なる神は、とこしえの憐れみといつくしみとを思い起こし、現に働いてくださる契約の神であります(詩編25:6)。「主を畏れる人に／主は契約の奥義を悟らせてくださる」(同25:14)。悟らせてくださる道筋が、絶えることのない祈りです。「わたしはいつも主に目を注いでいます」とダビデは祈りの姿勢を明らかにしました(15節)。

### 3. 希望は決して裏切られない

詩編86編ダビデの詩は、「祈り」と題されています。祈りについて多くのことをわきまえることのできる適切なテキストとすることができます。窮乏感覚は、1節に明白です。「絶えることなくあなたを呼ぶわたし」(3節)と、ダビデが自分を位置づけるところに、集中と持続が示されています。わたしの祈りを聞き、わたしの声に耳を傾けてくださいと求める6節を両側から挟むような形で、5節では、主を呼ぶ者に豊かないつくしみを与えてくださる神の真実が明らかにされ、7節では、苦難の中で呼び求める者に必ず答えてくださる神の恵みの確かさが告白されています。

「希望」とは、答えられるとの確信をもって、

希<sup>が</sup>い望むことです。「期待」とは、神のみこころがなされるとの信仰をもって、期して待つことです。「祈りを聞いてくださる神よ」と呼んで、ダビデは神のもとにきました(詩編65:3)。この呼び名を、わたしたちも、祈りの唇にのぼらせたいたいものです。

忍耐強く主を待ち望むのが祈りであると言って、カルヴァンは次のとおり記しています——「神はわれわれの言うことを聞きあげたまわないときにも、しかも、われわれの祈りに応じる備えをして、好意をもっておられるため、かれの御言葉に依り頼む希望は決して裏切られない(『綱要』3:20:52)。祈りをやめることのないダビデに、神はご自分の時に応じて、豊かに答えてくださいました。第4課で見たとおり、「ダビデを裏切ることとは決してない」(詩編89:36)と誓われた神は、ダビデの子孫たちに、同じ誓いを果たされます。

わたしたちが祈りにおいて神の前に出るとき、心に固く信じているのは、神が常に手を差し伸べて、ご自分の民を助けてくださる、という確かな約束です。わたしたちの祈りは、神のもろもろの約束を既に得たと信じて、ささげるものであるとすることができます。祈りを聞いてくださる神は、祈りに答えてくださる神であります。神が答えてくださるのがあまりにも遅いと感ずるようなときでも、神はわたしたちの信仰が弱り果てることのないように支えていてくださいます。わたしたちの祈りが神のみ言葉に従うものである限り、神の唇から出た言葉は、すべて果たされます。

【宿題】 詩編86編を熟読し、祈りについて新しく示された点を挙げなさい。読むにあたって、少なくとも次の点に留意しなさい。

- ①「主よ」との呼び掛けが、11回なされている。
- ②祈る自分を、「僕」と位置づけている。「あなたのはしための子」とまで呼んでいる。
- ③「あなた」—「わたし」の命の関係が、生き生きと表現されている。(石丸 新)

## 第6課 祈りの姿勢

## 1. 膝をかかめる

ただ一人、主の預言者として残ったエリヤは、バアルの預言者450人を前にして、ひたすら、主なる神の力を祈り求めました。カルメル山の頂上で、「エリヤは地にうずくまり、顔を膝の間にうずめた」と、祈りの姿勢が描かれています（列王記上18:42）。主の僕として、へりくだりの限りを尽くし、ただ神の憐れみが天から現され、神の力が目に見える形で発動されることを、エリヤは求めました。歎願の姿が、ここにあります。膝の間に顔をうずめることによって、わたしたちの魂は一層の鋭さをもって神に向かい、神のふところに逃れることができます。そこでこそ、祈りは一層の光を放って燃え立ちます。

「膝をつく」という姿勢も、同じく、自分を低くして神をあがめる思いを言い表しています。ダニエルは、三週間にわたる嘆きの祈りを続けていましたが、人の子のような姿の者の手が自分に触れたのを意識して、「手と膝をついた」と言っています（ダニエル書10:10）。ひざまずいて伏し拝むことが、旧約の民の礼拝の姿でした。「もしわたしの名をもって呼ばれているわたしの民が、ひざまずいて祈り、わたしの顔を求め、悪の道を捨てて立ち帰るなら、わたしは天から耳を傾け、罪を赦し、彼らの大地をいやす」と、主はソロモンに告げられました（歴代志下7:14）。

断食し、粗布（あらぬの）をまとい、灰をかぶることも、歎願の祈りの姿でありました（ダニエル書9:3）。衣を裂き、泣くことも、へりくだりの祈りの典型でした（歴代志下34:27）。イスラエルの民の背信と悪事に心を痛めるエズラは、「衣とマントを裂き、髪の毛とひげをむしり、ほう然として座り込んだ」とあります（エズラ記9:3）。やがて身を起こし、ひざまずいて祈るエズラでありました。ある会議の席で、祈りの指名を受けたとき、何の意識もなく、眼鏡を外し、手に持ったまま祈りました。アメリカから参加していた牧師から、「日本人が祈るとき、眼鏡を外すのは、へ

りくだりのしるしか」と聞かれたのを思い起こします。

イエスのたとえ話に登場する徴税人は、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら祈って言いました——「神様、罪人のわたしを憐れんでください」（ルカ18:13）。最小限の単語を用いてなす悔い改めの祈りに伴うのは、良心の座である胸を打つという身振りでした。

## 2. 目を上げる

わたしが少年時代を過ごした、現韓国仁川（インチョン）市の牧師館子供部屋に、サムエルの油絵がかかっていました。セピア一色で描かれたもので、濃淡の巧みさが目に焼き付いていました。小学校1年生のとき、サムエルが座って、手を胸の前に合わせ、顔を45度ほど上に向け、目をぱちりと開けたまま祈っている姿に納得がいかず、父に、「サムエルさんは目を開けてお祈りをしている」と訴えたことがあります。昔のイスラエルの人は、立って、手を上げ、目を天に向けて祈ったことを、父は語ってくれましたが、すぐに納得したわけではなく、本当に理解できるようになったのは、自分で旧約聖書を読むようになってからのことでした。

エルサレムへの巡礼の旅路で、神の民は歌いました——「目を上げて、わたしはあなたを仰ぎます／天にいます方よ」「わたしたちは、神に、わたしたちの主を目を注ぎ／憐れみを待ちます」（詩編123:1～2）。それに続くのが、「わたしたちを憐れんでください。／主よ、わたしたちを憐れんでください」との懇願です（3節）。憐れみの源である神は、天からわたしたちに目を注いでいてくださいます。

自分の罪を認め、神に立ち帰る決意を言い表すにあたって、信仰の人は言いました——「天にいます神に向かって／両手を挙げ心も挙げて言おう。／わたしたちは背き逆らいました」（哀歌3:41～42）。目を上げ、手を上げるだけではありません。手を広げることも、祈りの姿勢の一つでした（エズラ記9:5）。手を伸ばして祈ることは、手を

広げることと並んで、罪の赦しの恵みを受け取る信仰の現れでした。信仰のゆえに、手は高く上げられます（詩編63:5、141:2）。

目を上げ、手を高く上げたままで、心がゆるんでいるはずはありません。目と手とともに、心を上げ、声をあげて叫ぶのが、わたしたちの祈りです。万が一にも、異教の神に向かって手を広げるようなことがあったとすれば、神はそれを探り出し、裁きを下されます（詩編44:21～22）。わたしたちの目は、天地を造られた主に向かって上げられます（詩編121:1～2）。愛するみ子をさえ惜しまずして与えてくださった神に、わたしたちの目は上げられます。

### 3. 心を挙げる

先に見た哀歌3:41「天にいます神に向かって／両手を上げ心も挙げて言おう」は、詩編143:6のダビデの言葉「あなたに向かって両手を広げ／渴いた大地のようなわたしの魂を／あなたに向けます」に、ぴったりと重ねられます。祈りにおいて、わたしたちの魂は神に向けて正しくセットされるだけではありません。わたしたちの理性と感情と意志は、一つに結ばれ、ふさわしく整えられ、高く挙げられます。この高さについて、カルヴァンは、「われわれの理性をそれ自身のむなしい尺度におさえることなく、神にふさわしい〔その求めたもう〕純粋さにまで高揚する、という意味である」と述べています（『綱要』3:20:4）。天への向きとともに、天への高さが求められていることに驚くばかりです。

「神は人間の精神のうちに、『精神を高く挙げるのでなければ、正しい祈りはない』ということ、生まれながらに植えつけたもうた」と、カルヴァンは言っています（『綱要』3:20:16）。自らの心のゆるみを覚えるたびに、心を挙げる修練へと自分を励まし、中断することなく祈る仕組みを考案しなければなりません。

テサロニケの信徒たちについて、使徒パウロは、彼らが「どのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、更に

また、どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったか」を知らされていることを感謝しています（テサロニケ一1:9～10）。祈りにおいて、わたしたちの心が高く挙げられるためには、復活して天の高きにいます栄光の主イエス・キリストを仰ぎ、このキリストを見つめ、このキリストが再び来られるのを待ち望まねばなりません。再臨待望の信仰が、わたしたちの祈りの熱意を燃え立たせます。このキリストにおいて、神の約束は「然り」となりました。「それで、わたしたちは神をたたえるため、この方を通して『アーメン』と唱えます」（コリント二1:20）。

もう一度、ダビデの言葉に思いを沈めましょう。詩編25編の冒頭で、「主よ、わたしの魂はあなたを仰ぎ望み」と、ダビデは言っています。文字どおりの訳では、「あなたに、主よ、わたしはわたしの魂を挙げます」となります。自分の窮乏と悲惨の認識から、主なる神に「魂を挙げる」という表現は、ダビデが好んで用いるところでした。ほかの例を見ますと、86:4「わたしの魂が慕うのは／主よ、あなたなのです」は、直訳すれば、「あなたに、わたしの主よ、わたしの魂を挙げます」となります。143:8「あなたに、わたしの魂は憧れているのです」は、文字通りには、「あなたに、わたしは、わたしの魂を挙げます」です。

25編でダビデの言うとおりに、主に向けて自分の魂を挙げること（1節）は、「わたしの目はいつも主に」（15節直訳）と呼応して、祈りにおける霊的集中を強く促しています。

【宿題】 主の祈りの「天にまします」についての諸教理問答の説明を比較しなさい。『ジュネーヴ教会信仰問答』265が次のとおり言っていることに留意しなさい——「……神の輝く尊厳を謙遜に拝するために、そしてまた一層堅い信頼を神におくために、われわれのもろもろの思いを高く上げることがわれわれが学ぶ目的からであります」。

カルヴァンの『綱要』3:20:40をも参照しなさい。（石丸 新）

# いのちのぱん

いのち ぱん  
「わたしが命のパンである。」(ヨハネによる福音書第6章35節)

にちようがっこうのおともだちへ お元気ですか？

君のためにつくったこの聖書日課「いのちのぱん」です。

「いのぱん」を、まいにち、使っていますか？

君の聖書は、今、どこにあるの？ エッ？、日曜学校のかばんのなかに入れっぱなし…？

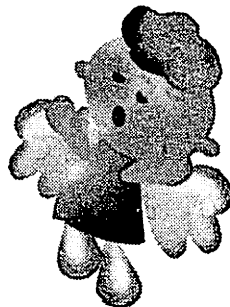
君は、神さまを信じているでしょう？ イエスさまのことが大好きでしょう？ すばらしいね！

イエスさまを愛することは、毎日、神さまのみことばを聞くこととひとつのことなのです。

かばんのなかに入っている聖書を、とけだして、食卓(テーブル)の上でよんでごらん。

じぶんの机があるお友達は、机の上ひろげてごらん。

神さまは、きみのために、今日も、話してくれます。



でも、毎日、ひらけなときもあるよね。





「いのぱん」は、そんな君の友達です。

全国にいる、おおぜいのお友達も、まいにち、いっしょのところを読んでるよ。

お父さんやお母さんといっしょに、そしてひとりで…。「いのぱん」を友達にしてね！

イエスさまの祝福が愛するあなたの上こゆたかにありますように！

# いのちのばん

<p>7月3日(月) ヨシユア記1章6節  <b>行く手に立ちはだかる者はない</b>          神さまは、あなたの行く先で、じゃまをする人はいないと約束されました。神さまが共にいて、行く先を守ってくださるからです。その神さまは、あなたと共にいてくださいます。</p> 	<p>7月6日(木) ヨシユア記1章7節  <b>右にも左にもそれではならない</b>          わたしたちが強く、雄々しく歩むには、まっすぐ進むための道しるべが必要で、それが律法です。神さまの御心が記された律法に従って、まっすぐに神さまの道を進みましょう。</p> 
<p>7月4日(火) ヨシユア記1章5節  <b>あなたを、見捨てることもない</b>          共にいると約束された神さまは、わたしたちを見捨てない方でもあります。人はわたしたちを見捨てても、神さまはわたしたちを見捨てることありませぬ。</p> 	<p>7月7日(金) ヨシユア記1章8節  <b>昼も夜も口ずさみ</b>          神さまの御心が記された律法に従って歩むとき、神さまはわたしたちを必ず祝福してくださいませぬ。いつも神さまの言葉を口ずさみ、その言葉に従って生きていきましょう。</p> 
<p>7月5日(水) ヨシユア記1章6節  <b>強く、雄々しくあれ</b>          わたしたちを見捨てることをしない神さまが、あなたと共にいて、助けてくださいます。恐いことや、心がくじけることに会っても、恐れずに、神さまを信じて進んでいきましょう。</p>	<p>7月8日(土) ヨシユア記1章8節  <b>どこに行っても、主は共にいる</b>          わたしたちがどんなにつらく、苦しいことに会っても、そこに神さまは共にいて守ってくださり、またたとえ神さまから離れることがあっても、そこにも神さまは共にいてくださいます。どこに行っても共にいてくださる神さまを信じましょう。</p>

# いのちのばん

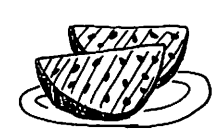
7月10日(月) ヨシユア記2章11節  
**主こそ、神であられる**  
 わたしたちが信じる神さまは、聖書や教会の中だけの神さまではなく、この地上を支配し、宇宙を導いておられる生ける主です。その神さまの大きな守りと支えの中で、今日も元気に過ごしていきましょう。

7月13日(木) ヨシユア記4章24節  
**主の御手の力強いことを**  
 葦の海の水を二つに分けた神さまは、ヨルダン川の水もせき止めて、神さまが生ける神であり、力ある方であることを、イスラエルの人々に見せられました。このように、わたしたちを守ってくださる神さまは、力強い、頼もしい神さまなのです。

7月11日(火) ヨシユア記3章5節  
**自分自身を聖別せよ**  
 聖別するとは、用途や役目が変わることで、神さまのためだけに使うということです。わたしたちも、自分の思いと心と、自分のすべてを神さまに献げていきましょう。



7月14日(金) ヨシユア記5章14節  
**わたしは主の軍の将軍である**  
 約束の地を得るための戦いが始まる前に、神さまは御使いの将軍をヨシユアに遣わされました。わたしたちには、目に見えない御使いによる守りと助けが与えられているのです。



7月12日(水) ヨシユア記3章10節  
**生ける神があなたたちの間に**  
 いよいよイスラエルの人々が約束の地に入ろうとしたとき、神さまが共にいて、彼らの間にいてくださると約束されました。生ける神さまは、あなたの中にもいてくださいます。



7月15日(土) ヨシユア記7章12節  
**滅ぼすべきものを一掃しないなら**  
 わたしたちの心の中から、滅ぼし尽くすべきものを取り除かないなら、「わたしはあなたたちと共にいない」と神さまは警告されます。わたしたちもこころして、自分の心から、罪を取り除いていきましょう。



# いのちのぼん

7月17日（月）ヨシュア記8章8節

## 主の言葉どおり行いなさい

一度は負けた戦いで、神さまの言われたとおりに戦うと、今度は勝つことができました。

勝利の秘訣は、神さまに従うことです。神さまの言葉どおりに生きていくことです。



7月20日（木）ヨシュア記10章14節

## 主はイスラエルのために戦われた

周りを敵に囲まれた、厳しい戦いでしたが、イスラエルは勝利することができました。それはイスラエルが強かったからではなくて、神さまが共にいて、イスラエルのために戦ってくださったからです。神さまは、あなたのためにも戦ってくださるのです。

7月18日（火）ヨシュア記9章14節

## 主の指示を求めなかった

アイとの戦いでは、神さまの言葉どおりに戦い、勝利することができました。しかし、ギブオンの人々については、神さまの指示を求めませんでした。わたしたちも、自分の勝手な判断で決めてしまうと、大きな失敗することになります。気をつけましょう。

7月21日（金）ヨシュア記13章1節

## 占領すべき土地は残っている

戦いに明け暮れたヨシュアも年老いました。しかし「占領すべき土地はまだたくさん残っている」と求められます。わたしたちにも、神さまに明け渡していくべきものが、まだ残っていないでしょうか。自分のすべてを、神さまに献げていきましょう。

7月19日（水）ヨシュア記10章8節

## 行く手にたちはだかる者はない

ギブオンの人々を救おうとしたヨシュアは、周りのすべての人々に取り囲まれ、劣勢でした。しかし神さまは、再び約束されます。「あなたの行く手にたちはだかる者はいない」と。そして神さまが共にいてくださったので、ヨシュアは戦いに勝利できました。

7月22日（土）ヨシュア記14章8節

## わたしは主に従いとおしました

ヨシュアとカレブは、神さまに従いとおしたので、ごほうびに、長生きすることができました。わたしたちも、最後まで、神さまに従いとおしていきましょう。



# いのちのばん

7月24日（月）ヨシュア記14章12節  
この山地をわたしにください

85歳となったカレブでしたが、神さまを信じて、なお元気でした。そして神さまが与えると約束された山地を、取りに出かけます。神さまを信じる人は、いつまでも若いのです。



7月27日（木）ヨシュア記21章45節  
恵みの約束はすべて実現した

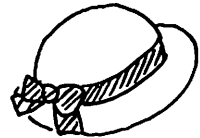
神さまが約束されたとおり、イスラエルに立ちはだかり、じゃまする人たちはいなかったのので、ついにイスラエルの人々は安らかに住めるようになります。神さまは約束を破ることなく、すべてを実現される方なのです。

7月25日（火）ヨシュア記17章13節  
徹底的に追い出すことはなかった

イスラエルは、偶像礼拝し悪いことばかりを行うカナンの人々を追い出さずして、わたしたちも中途半端に妥協して、罪を残したままにすると、それが後でわたしたちを誘惑する、わなとなることになります。罪は徹底的に除かなければなりません。

7月28日（金）ヨシュア記22章5節  
戒めを守って、主に仕えなさい

戦いを終えて自分の家に帰る人々に、ヨシュアは心を尽くして神さまに仕えることを勧めました。主を愛し、信頼して生きる  
とき、わたしたちの  
毎日は揺るがない  
ものとなるのです。



7月26日（水）ヨシュア記18章3節  
与えられた土地を取りにいくだけ

平地には強い人々が陣取り、山地は開墾しなければなりません。しかし、神さまが共にいて助けてくださいます。それを信じて取りにいけば、土地を得ることができます。大切なことは、この約束を信じて、従うことでした。取りにいくだけなのです。

7月29日（土）ヨシュア記23章11節  
心を込めて、主を愛しなさい

これまで神さまは、イスラエルのために戦ってくださいました。だから約束の地を得ることができました。その神さまを心を尽くして愛することが求められます。なぜなら神さまこそ、イスラエルを、そしてわたしたちを愛してくださっているからです。


# いのちのばん

<p>7月31日 (月) ヨシュア記24章15節 わたしの家は主に仕えます</p> <p>ヨシュアは、イスラエルの人々に、まことの神さまと偶像のどちらを選ぶかを問いました。たとえ多くの人が偶像を選んでも、わたしとわたしの家は主に仕えようと。わたしたちも主に仕えようと、神さまを選び取りましよう。</p>	<p>8月3日 (木) 士師記3章4節 聞き従うかどうかを知るため</p> <p>神さまはイスラエルに苦しみをもたせましたが、それは彼らが神さまに従うかどうかを知るためでした。わたしたちも、どんなときにも、神さまに聞き従っていきましょう。</p> 
<p>8月1日 (火) 士師記2章2節 わたしの声に聞き従わなかった</p> <p>主に仕えますと約束したイスラエルは、すぐに神さまから離れてしまいます。すると外から敵がやって来て、イスラエルを苦しめるようになります。神さまに聞き従わない結果でした。</p> 	<p>8月4日 (金) 士師記4章14節 主があなたに先立って行かれる</p> <p>モアブに苦しめられるイスラエルを救うために、バラクが立てられます。しかしバラクは気弱な青年でした。そこでデボラは、神さまが先立って戦いに出てくださいと約束し、励まします。神さまは、臆病なわたしたちとも共にいて、助けてくださるのです。</p>
<p>8月2日 (水) 士師記2章18節 うめく彼らを哀れに思われ</p> <p>外敵に苦しめられ、そこでうめくイスラエルを、神さまは見捨てることができません。哀れに思われた神さまは、助けを与えられました。それが士師(救助者)でした。神さまは、背くわたしたちをも見捨てない、憐れみの神さまなのです。</p>	<p>8月5日 (土) 士師記6章12節 勇者よ、主はあなたと共に</p> <p>ミディアンに苦しむイスラエルのために、ギデオンが立てられますが、ギデオンも臆病な青年でした。その彼が勇者と呼ばれるのは、彼自身が強いからではなくて、神さまと共にいてくださるからです。主が共におられる人が、勇者なのです。</p>


# いのちのばん

8月7日(月) 士師記6章15節  
**わたしは最も貧弱なもので**  
 イスラエルを救うために選ばれたのは、一番貧弱で年下のギデオンでした。神さまが用いられるのは、立派な人や強い人ではなく、臆病で弱い人です。しかしだからこそ、神さまに頼ることを知る人です。本当に強いのは、神さまを信じる人なのです。

8月10日(木) 士師記10章16節  
**主はイスラエルの苦しみが耐えられなくなった**  
 神さまを捨てたため、敵に苦しめられるイスラエルを見て、神さまの方が耐えられなくなります。神さまは、自分の罪に苦しむわたしたちを、深く憐れみ、罪にもかかわらず、救ってくださる憐れみの神なのです。

8月8日(火) 士師記7章2節  
**自分の手で救いを勝ち取ったと**  
 ギデオンはたった三百人だけで、敵を追い散らすことができました。それは彼らが強かったからではなく、神さまが戦って、勝利をくださったからでした。  
 自分の力では  


8月11日(金) 士師記11章27節  
**審判者である主が裁いてくださる**  
 土地を返せと、でたらめな言いがかかりをつけられて、アンモンから戦争がしかけられます。そのときエフタは、神さまが正しく裁いてくださると信じ、神さまにより頼みました。ひどいことを言われるとき、神さまがわたしたちを弁護してくださるのです。

8月9日(水) 士師記8章23節  
**主があなたたちを治められる**  
 イスラエルの人々が自分を王にしようとしたとき、ギデオンは断りました。なぜならイスラエルの王は、人間の王ではなくて、神さまだからでした。  
 わたしたちの王も神さまなのです。  


8月12日(土) 士師記15章19節  
**その水を飲んで元気を取り戻し**  
 サムソンは戦いに疲れ、のどが渇いて死にそうになります。しかし神さまは泉を与え、その水を飲んで、サムソンは元気を取り戻し、生き返ります。わたしたちにも、元気を取り戻す命の水をくださいます。命の水である主イエスを豊かにいただきましょう。

# いのちのばん

8月14日(月) ししき しょう せつ 士師記21章25節  
**自分の目に正しいとすることを**

このころのイスラエルは、それぞれ  
 到自己的目に正しいとすることを  
 行い、自分勝手に生きていました。そ  
 のため国は乱れ、争いが絶えませんで  
 した。自分勝手な生き方は、悲惨な  
 結果を生み出します。神さまを畏れ、  
 神さまに従って生きていきましょう。

8月17日(木) き しょう せつ ルツ記2章20節  
**慈しみを惜しまれない主が**

神さまを頼って帰ってきたナオミ  
 も、神さまが、どんな人にも慈し  
 めを惜しまれない方であることを信じ  
 ていました。神さまは、ナオミとル  
 ツのために、親切にしてくれるボア  
 ズを用いて、守ってくださるのでし  
 た。

8月15日(火) き しょう せつ ルツ記1章16節  
**あなたの神はわたしの神**

ルツは、お母さんのナオミの後につ  
 いて、イスラエルに行きます。しかし  
 それは、故郷とモアブの神を捨てるこ  
 とでした。ルツは、心からまことの神  
 さまを信じ、神さまに従って生きてい  
 こうと決心します。そのルツを、神さ  
 まも祝福してくださるのでした。

8月18日(金) き しょう せつ ルツ記3章10節  
**あなたに主の祝福があるように**

ルツに心を動かされたボアズは、  
 ルツを助けてあげたいと、神さまの  
 祝福を祈ります。わたしたちの幸せ  
 の源は、神さまにあります。神さま  
 の祝福があるところに、幸せもある  
 のです。互いの祝福を祈りあいま  
 しょう。

8月16日(水) き しょう せつ ルツ記2章12節  
**御翼のもとに逃れて来たあなたに**

ルツは、神さまの守りと祝福の御  
 翼のもとに、逃れてきました。それ  
 は心から神さまを信頼し、神さまに  
 頼って生きるということです。わた  
 したちも、神さまの守りと祝福の御  
 翼のもとにおおわれながら、生きて  
 いきましょう。

8月19日(土) き しょう せつ ルツ記4章14節  
**主はあなたを見捨てることなく**

モアブで苦勞したナオミとルツ  
 を、神さまは決して見捨てられるこ  
 となく、ボアズを通して幸せを与え  
 てくださいました。神さまは、わた  
 したちがどんなときにも、見捨てる  
 ことなく、守り抜いてくださる、恵  
 みの主です。

# いのちのばん

8月21日（月）サムエル上1章12節  
**あまりにも長く祈っているので**  
 ハンナは深く苦しんでいました。しかしその苦しみを、神さまの許に携え、神さまに祈りました。わたしたちは自分の苦しみや悩みを、どこに持って行くのでしょうか。神さまに訴え、祈っていきましょう。

8月22日（火）サムエル上1章18節  
**表情はもはや前のようではなく**  
 自分の悩みと苦しみを、神さまに祈ったハンナは、祈り終えたとき、晴れやかに立ち上がることができました。苦しみのすべてを神さまにお任せすれば、わたしたちも晴れやかに立ち上がらされていくのです。

8月23日（水）サムエル上2章12節  
**主を知ろうとしなかった**  
 エリの息子たちは、シロの神殿の中で生まれ育ちながら、神さまを信じようとはしませんでした。教会の中で育っても、心を開いて神さまを信じようとしないと、心が頑なになって神さまを信じることができなくなります。あなたはどうですか。

8月24日（木）サムエル上2章30節  
**悔る者をわたしは軽んじる**  
 神さまの近くにいなながら、神さまを信じようとしなないエリの息子たちへの裁きがくだされます。神さまをばかにする人は、神さまによって罰せられていきます。わたしたちは、心から神さまを敬い、畏れていきましょう。

8月25日（金）サムエル上3章10節  
**お話しください。聞いております**  
 神さまはご自分に忠実な働き人をお使いになります。それは才能があるとか、頭がよいということではなくて、いつも神さまの言葉を聞き、従う人のことです。わたしたちも、「お話しください。僕は聞いております」と、神さまに聞く人になりましょう。

8月26日（土）サムエル上7章3節  
**心を尽くして主に立ち帰るなら**  
 本気で神さまに帰るなら、神さまは、これまでの罪を赦して、神さまも帰って来てくださると約束されました。わたしたちも、神さまの許に、心を尽くして帰りましょう。



# いのちのばん

8月28日(月) サムエル上7章6節  
 水をくみ上げて主の御前に注ぎ

水を入れた器をひっくり返したら、水は元に戻りません。そのように、二度と元に戻らない決意で、イスラエルは神さまに帰る決心をし、それを表わしました。



8月31日(木) サムエル上10章9節  
 神はサウルの心を新たにされた

聖霊を注がれ、別人のようになったサウルは、心を新しくされます。聖霊によって心を新しくされた人が、神さまの働きをします。わたしたちも、聖霊によって、心を新しくしていただきます。

8月29日(火) サムエル上7章8節  
 どうか黙っていないでください

ペリシテの軍隊が攻めてきたとき、イスラエルの人々はサムエルが神さまに祈ることを願いました。自分たちの力や知恵ではなく、神さまによって助けられることを求め、その祈りは聞かれます。わたしたちも神さまの助けを求めていきましょう。

9月1日(金) サムエル上12章20節  
 今後はそれることなく主に従い

神さまをしりぞけるといふ罪を犯したイスラエルでしたが、これからは神さまに従って生きるようにと、赦されます。罪を犯しても、悔い改めて仕えるなら、神さまは赦してください。わたしたちも、心を尽くして仕えていきましょう。

8月30日(水) サムエル上10章6節  
 あなたは別人のようになる

サウルが、イスラエルの王に立てられます。そのサウルのために、神さまは聖霊を注がれ、サウルの心を新しくされます。別人のようになったサウルは、神さまの働きを果たすように変えられるのです。

9月2日(土) サムエル上12章22節  
 ご自分の民と決めておられる

イスラエルは、繰り返し神さまに背き、罪を犯す人々でしたが、それでも神さまはイスラエルを捨てることはなさいません。ご自分の民と決めてくださっているからでした。あなたも、その神さまの民の一人として、愛され、赦され、祝福されているのです。

# いのちのばん

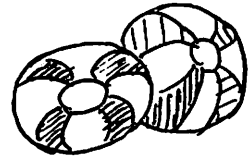
9月4日(月) サムエル上14章6節  
**主が勝利を得られるのに**

ヨナタンは心から神さまを信じる  
 青年で、神さまが勝利されるのに、  
 兵の数や人間の力ではないことを信  
 じていました。そ  
 こで神さまは、ヨ  
 ナタンに勝利を与  
 えられるのでした。



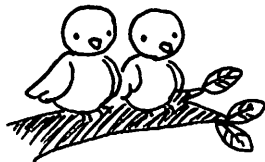
9月7日(木) サムエル上16章7節  
**主は心によって見る**

人は外見ばかりを見て判断します  
 が、神さまはわたしたちの心をご覧  
 になり、心によって評価されます。  
 わたしたちの心を見抜かれる神さ  
 まの前に、真実  
 に歩んでいきま  
 しょう。



9月5日(火) サムエル上15章22節  
**主の御声に聞き従うこと**

神さまが喜ばれるのは、見せかけ  
 のいけにえや、仰々しい礼拝ではな  
 くて、わたしたちが神さまに聞き従  
 うことです。  
 わたしたちの  
 礼拝はどうで  
 しょうか。

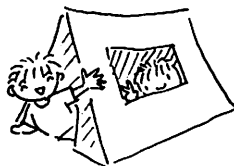


9月8日(金) サムエル上16章18節  
**まさに主が共におられる人です**

ダビデは、次の王として選ばれま  
 す。それは、純粋に神さまを信じ、  
 恐れ、従う素直な心の持ち主だった  
 からでした。誰の目にも、主が共に  
 おられると認められるほど、神さま  
 に祝福されると共に、そのように神  
 さまを信じている人なのでした。

9月6日(水) サムエル上15章29節  
**気が変わることはない**

わたしたちの信じる神さまは、人  
 間のように気が変わったり、約束し  
 たことを破るような方ではありません  
 ン。一度した約  
 束は、最後まで  
 は果たしてくださ  
 る方なのです。


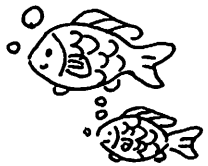


9月9日(土) サムエル上17章47節  
**剣や槍を必要とはされない**

ゴリアトを前に、誰一人立ち向か  
 う者はいません。ただダビデだけが、  
 立ち向かっていきます。神さまが救  
 いを与え、勝利をくださると信じて  
 いたダビデは、恐れませんでした。  
 神さまが戦われるとき、人間の力は  
 必要ないと信じていたからでした。



# いのちのばん

<p>9月11日（月）サムエル上18章14節  <small>かれ たたか しょうり おさ</small>  <b>彼はどの戦いでも勝利を取めた</b>  <small>かみ すく あた</small>          神さまが救いを与えられるとき、  <small>けん やり ひつよう しん</small>          剣や槍は必要ないと感じていたダビ  <small>てき か</small>          デは、いつも敵に勝つことができま  <small>しょうり ひけつ くれし</small>          した。ダビデの勝利の秘訣は、彼自  <small>しん ちから かみ とも</small>          身の力ではなくて、神さまが共にい          てくださったということです。それ          は、わたしたちも同じです。</p>	<p>9月14日（木）サムエル上23章17節  <small>お</small>  <b>王となるのはあなただ</b>  <small>お つづ ふ しゆう あ</small>          サウルに追われ続け、不自由な荒  <small>の どうぼうせいかつ つづ</small>          れ野での逃亡生活を続けるダビデ  <small>あ はげ</small>          に、ヨナタンが会って励まします。  <small>お</small>          「イスラエルの王となるのはあなた  <small>かみ くる</small>          だ」と。こうして神さまは、苦しむ  <small>はげ きぼう あた</small>          ダビデに励ましと希望を与えられる          のでした。</p>
<p>9月12日（火）サムエル上20章42節  <small>あいだ しゅ</small>  <b>間に、主がとこしえにおられる</b>  <small>こんど</small>          サウルのねたみをかったダビデ  <small>とうぼう しんゆう</small>          は、逃亡することになります。親友  <small>わか さい ふたひと し</small>          ヨナタンとの別れに際し、二人の子  <small>そん あいだ かみ ふたひと きすな</small>          孫の間に、神さまがいて、二人の絆  <small>むす ちか</small>          を結びつづけてくださることを誓い  <small>あ にんげん あいだ</small>          合います。人間の間をとりもってく  <small>かみ</small>          ださるのは、神さまなのです。</p>	<p>9月15日（金）サムエル上24章21節  <small>まえ かなら お</small>  <b>お前は必ず王となり</b>  <small>こんど</small>          今度は、サウル自身からも語られ  <small>まへ かなら お</small>          ます。「お前は必ず王となり、イス  <small>おうこく まえ て かくりつ</small>          ラエル王国はお前の手によって確立  <small>かみ</small>          する」と。神さま  <small>はげ</small>          はダビデに励まし  <small>あた ささ</small>          を与えて、支えら          れるのでした。</p> 
<p>9月13日（水）サムエル上23章10節  <small>しゅ たず</small>  <b>ダビデは主に尋ねた</b>  <small>お</small>          サウルに追われて、荒れ野をさま  <small>あ の</small>          ようダビデでしたが、そこでいつも  <small>い さき かみ たず したが</small>          行く先を神さまに尋ね、それに従っ  <small>ふじす</small>          ていきました。ダビデが無事に過ご  <small>じぶん はんたん</small>          せたのは、自分の判断ではなく、神  <small>たず ちと</small>          さまに尋ね求めていったからでし          た。</p>	<p>9月16日（土）サムエル上25章30節  <small>しゅ やくそく さいわ じょうじゅ</small>  <b>主が約束なされた幸いを成就し</b>  <small>くち とお</small>          アビガイルの口を通して、ダビ  <small>かなら お</small>          デは必ず王となることが約束され、  <small>やくそく</small>          こうしてダビデは神さまの約束を  <small>かみ やくそく</small>          信頼して、苦しい  <small>しんらい くる</small>          ひびを耐えること  <small>ひび た</small>          ができるようにさ          れていきました。</p> 

# いのちのパン

9月18日（月）サムエル上26章10節  
**主がサウルを打たれるだろう**

サウルを殺す機会がありながら、  
 ダビデは神さまを畏れて、逆らうこ  
 とはしません。むしろ神さまがサウ  
 ルを裁いてくださることを信頼しま  
 す。そしてご自分を信頼するダビデ  
 を、神さまも守ってくださるのでし  
 たら。

9月21日（木）サムエル下4章9節  
**苦難からわたしの命を救われた主**

多くの苦しみを経て、ダビデは神  
 さまが守ってくださったことを感謝  
 します。神さまは、苦難からわたし  
 たちの命を  
 救ってくだ  
 さん方なの  
 です。



9月19日（火）サムエル上28章18節  
**あなたは主の声を聞かず**

サウルが神さまからしりぞけられ  
 たのは、神さまの言葉に聞き従わず、  
 自分勝手に生きてきた  
 からでした。神さまに  
 従わない人生は、恐ろ  
 しい結果を招きます。  
 心していきましょう。



9月22日（金）サムエル下5章10節  
**万軍の神、主は彼と共におられた**

ダビデはイスラエルの王となりま  
 す。これまでの苦しい日々も、これ  
 からの王としての毎日にも、神さま  
 はダビデと共にいてくださり、祝福  
 されました。神が共にいてくださる  
 こと、これこそが本当の祝福、恵み  
 です。

9月20日（水）サムエル上30章23節  
**主が与えてくださったもの**

自分たちの町を略奪した敵を追い  
 かけて、奪われたものを取り返すこと  
 ができました。ダビデは、それが自分  
 の力ではなくて、神さまが与えてくだ  
 されたものだ感謝します。わたした  
 ちが持っているものも、みな神さまか  
 らいただいたものなのです。

9月23日（土）サムエル下6章21節  
**このわたしを選んで指導者とした**

王となったダビデは、神さまの前で  
 力の限り踊りました。他のだれでもな  
 い、この自分を選び、祝福してくださ  
 る神さまに、心から感謝を献げたので  
 す。わたしたちも、わたしたちを愛し、  
 祝福して下さる神さまを、心からほ  
 めたたえていきましょう。

# いのちのぼん

9月25日(月) サムエル下7章11節

## 主があなたのために家を興す

神さまの家(神殿)を建てようと  
考えたダビデのために、神さまがダ  
ビデの家(王朝)を興してください  
ます。神さまは、神  
さまを愛する者を愛  
し、豊かに祝福され  
るのです。



9月28日(木) サムエル下15章25節

## わたしが主の御心に適うならば

ダビデは、息子アブサロムの反乱  
で、エルサレムを逃げることになり  
ます。これからどうなるか分かりま  
せんが、ダビデは、これからのこと  
を神さまにお任せします。ダビデは、  
危機の中でも神さまを信頼し続けま  
した。

9月26日(火) サムエル下11章27節

## 主の御心に適わなかった

なにもかも恵まれたダビデの心に  
隙間が入ります。好きになった女性  
を手に入れるため、殺人を犯してし  
まうのです。それは神さまの御心に  
かないませんでした。わたしたちも、  
心の隙間に罪が入り込まないように、  
気をつけなければなりません。

9月29日(金) サムエル下22章2節

## 主はわたしの岩、砦、逃げ場

神さまをいつも信頼していたダ  
ビデに、神さまはいつも逃げ場と  
なったださり、ダビデをかまひ、  
守ってられました。  
わたしたちにとって  
も神さまは、確かな  
逃げ場なのです。



9月27日(水) サムエル下12章13節

## わたしは主に罪を犯した

ダビデはとんでもない罪を犯しま  
すが、それを悔い改めます。神さま  
は、心から悔い改める  
者を赦してくださいま  
す。わたしたちも、罪  
を犯したときには、素  
直におわびしましょう。



9月30日(土) サムエル下22章26節

## あなたの慈しみに生きる人に

神さまの慈しみを信頼し、それに  
より頼んで生きる人を、神さまは慈  
しみ、守ってくださいます。わた  
したちも神さまの  
慈しみから離れな  
いで生きていきま  
しょう。



## 2006年10～12月カリキュラム (第23号)

— 救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目 —

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 簡 所	暗 唱 聖 句	対 応 表
	単 元 の 目 標			
10月1日	洗礼を受ける主イエス	マタイ3:13-17	ガラテヤ3:26-27	
	罪人と等しくなられた主イエスを与えられている幸いを知ろう			
10月8日	荒野での誘惑	マタイ4:1-11	ヘブライ2:18	
	私たちのために誘惑に打ち勝たれた主イエスの恵みを知ろう			
10月15日	弟子の召命	マタイ4:18-22	マタイ4:19-20	45
	主イエスに召されて、主イエスの弟子とされた喜びと使命に生きよう			
10月22日	幸いの説教	マタイ5:1-12	マタイ5:3	
	心貧しい者の幸いとは何か。主イエスと共にある幸いに生きよう			
10月29日 宗教改革記念	思いわずらいからの解放	マタイ6:25-34	マタイ6:33	
	御父を信頼し、神の国を求めて、思いわずらいから解き放れて歩もう			
11月5日	人をさばくな	マタイ7:1-6	マタイ7:1	
	赦されて、私たちも赦す者として生きよう。互いに仲良くしよう			
11月12日	岩の上に家を建てる	マタイ7:24-29	マタイ7:24	55
	キリストの御言葉こそ人生の土台である。御言葉を行う人になろう			
11月19日	一羽の雀でさえ	マタイ10:26-31	マタイ10:30	
	神に価高く尊いものとして愛されている幸いを知ろう			
11月26日	重荷を負う者への招き	マタイ11:25-30	マタイ11:28	
	主イエスのもとにある平安に安らぎ、主イエスのくびきを共に負おう			
12月3日 アドベント	待降節・平和の主	イザヤ52:7-10	イザヤ52:7	
	平和の主の降誕を喜び、平和を告げる喜びに生きよう			
12月10日 アドベント	待降節・真の羊飼い	エゼキエル34:1-16	エゼキエル34:11	
	真の羊飼いを与えられ、真の羊飼いに養われることを喜ぼう			
12月17日 アドベント	待降節・大いなる光	イザヤ9:1-6	イザヤ9:1	
	大いなる光として来られた方のみもとに進み出よう			
12月24日 クリスマス	降誕祭・御子の降誕	ルカ2:1-7	ルカ2:6-7	
	へりくだって生まれ、飼い葉桶に寝かされたキリストを喜び祝おう			
12月31日 年末	少年イエス	ルカ2:41-52	ルカ2:52	
	へりくだられた神の子が御言葉に親しまれた。主イエスにならおう			

※「対応表」欄は、『神の救いの歴史』（日本基督改革派教会教育委員会発行、1999年）の該当する単元を示しています。

## 2006年度 年間カリキュラム

(2006年4月～2007年3月)

二年サイクルの聖書物語(救済史)と教会暦の併用カリキュラム

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所
2006年 21号	4月2日	進級式・レント	十字架のキリスト	マルコ15:21-32
	4月9日	受難週	葬られるキリスト	マルコ15:42-47
	4月16日	復活祭	キリストの復活	マルコ16:1-8
	4月23日		天地の創造	創世記1:1-31
	4月30日		人間の創造	創世記2:4-25
	5月7日		人間の墮落と救いの約束	創世記3:1-15
	5月14日	母の日	ノアの箱舟	創世記6:1-22
	5月21日		バベルの塔	創世記11:1-9
	5月28日		アブラハムの召命	創世記12:1-9
	6月4日	聖霊降臨祭	教会の誕生	使徒言行録2:1-13
	6月11日	花の日	アブラハムへの約束	創世記15:1-21
	6月18日	父の日	イサクの誕生と奉獻	創世記21:1-8, 22:1-19
	6月25日		ヤコブとエサウ	創世記27:18-29
	22号	7月2日		ヨセフの苦難
7月9日			ヨセフの勝利	創世記50:15-21
7月16日			モーセの誕生	出エジプト1:22-2:10
7月23日			モーセの召命	出エジプト3:1-14
7月30日			主の過ぎ越し	出エジプト12:1-32
8月6日			葦の海を渡る	出エジプト14:1-31
8月13日		(平和)	平和を創り出す	エフェソ2:14-22
8月20日			天からの食べ物	出エジプト16:1-36
8月27日			十戒を与えられる	出エジプト19:20-20:17
9月3日			金の子牛	出エジプト32:1-14
9月10日			幕屋づくりと礼拝	出エジプト40:17-38
9月17日		(18敬老の日)	カナン偵察	民数記14:1-10
9月24日			モーセの死	申命記34:1-12

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所
2006年 23号	10月1日		洗礼を受ける主イエス	マタイ3:13-17
	10月8日		荒れ野での誘惑	マタイ4:1-11
	10月15日		弟子の召命	マタイ4:18-22
	10月22日		幸いの説教	マタイ5:1-12
	10月29日	宗教改革記念日	思いわずらいからの解放	マタイ6:25-34
	11月5日		人をさばくな	マタイ7:1-6
	11月12日		岩の上に家を建てる	マタイ7:24-29
	11月19日		一羽の雀でさえ	マタイ10:26-31
	11月26日		重荷を負う者への招き	マタイ11:25-30
	12月3日	アドベント	待降節・平和の主	イザヤ52:7-10
	12月10日	アドベント	待降節・真の羊飼い	エゼキエル34:1-16
	12月17日	アドベント	待降節・大いなる光	イザヤ9:1-6
	12月24日	クリスマス	降誕祭・御子の降誕	ルカ2:1-7
	12月31日	年末	少年イエス	ルカ2:41-52
2007年 24号	1月7日	新年	種まきのたとえ	マタイ13:1-9, 18-23
	1月14日		5000人の給食	ヨハネ6:1-15
	1月21日		嵐を鎮める主	マタイ14:22-33
	1月28日		ペトロの信仰告白	マタイ16:13-20
	2月4日		山上の変貌	マタイ17:1-13
	2月11日	(信教の自由)	善いサマリア人	ルカ10:25-37
	2月18日		マルタとマリア	ルカ10:38-42
	2月25日	レント	見失った羊のたとえ	ルカ15:1-7
	3月4日	レント	放蕩息子のたとえ	ルカ15:11-32
	3月11日	レント	ザアカイの救い	ルカ19:1-10
	3月18日	レント	幼子の祝福	マタイ19:13-15
	3月25日	レント	金持ちの青年	マタイ19:16-30

### 〈執筆よりひとこと〉

- 半年間、本当にありがとうございました。本当に多くのことを考え、学ばせていただきました。改善ネタになりますので、問題点、改善アイデア、疑問などありましたら、東広島教会のHPからでもご連絡いただければ幸いです。(山口弘)
- 教案を作ることは私自身の信仰告白を刻むことでもあります。「大事なことをだれにでもわかる言葉で」告白していきたいと思っています。(伊藤治郎)
- 子どもたちが教会学校を楽しんでいることに感謝します。イエス様の愛によって生まれた子どもたちの素晴らしい成長を神様と共に喜びます。(申成日)
- この奉仕を通して、教理教育の学びを深めることができ感謝です。(赤石めぐみ)
- 今月号も「キリコお姉さん」「カイカ君」のために用いられますように。カイカ君が、しっかり成長する、友だちを誘う……そこに60周年以降の希望がありますね。「読者の声」をお気軽にお寄せ下さい！ 弊誌が教師の交わりの場ともなりますように。(相馬伸郎)
- 夏は様々な行事があり慌ただしいでしょうが、子どもたちがこれらを通して主から信仰の成長が与えられますように。(辻幸宏)

### 〈あとがき〉

- 今号では、教師の声を掲載することができました。皆様の声、教会での実践例などをお寄せいただけると、たいへん嬉しいです。
- 「いのちのパン」をお用いください。短い御言葉とお勧めです。自由にコピーして配布し、ぜひ家庭礼拝のためにお用いください。分級時にイラストに色を塗るなど、各教会で工夫して親しんでくださいますように。
- 今号にも、すてきなイラストを掲載することができました。イラスト、漫画など、積極的にお寄せくださると感謝です。
- 中部中会では、11月23日(木・休)に「教会学校教師研修会」を行います。今年度は、昨年度に続いて、「教師会の形成」を主題として学びの時を持つ予定です。ぜひご出席をお願いいたします。
- 契約の子どもたち、地域の子もたちを主に導く光栄なる奉仕に続けて励んで参りましょう。
- 副読本を刊行しました。中高生のためのテキストとして提供されていますが、どなたにも読んで益になるものであると確信します。ぜひお買い求めいただくようお願いいたします。ご注文は、教案誌と同じく名古屋岩の上传道所・相馬伸郎まで、お願いいたします。

### 〈購読の申し込み〉

『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。別冊『子どもカテキズム』(300円)、バックナンバーもあります(品切れの号もあり)。第2～16号は一部500円で販売しています。

名古屋岩の上传道所 相馬伸郎まで

〒458-0021 名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

---

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	弓矢健児 (新座志木教会牧師)
市川康則 (神戸改革派神学校教授)	片岡正雄 (坂戸教会牧師)
巻頭説教	望月信 (高蔵寺教会牧師)
風間義信 (江古田教会牧師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
教会学校・日曜学校訪問	分級展開例
尾張旭教会日曜学校教師会	幼稚科
教師会の学びのために	山口弘 (東広島伝道所日曜学校教師)
望月信 (高蔵寺教会牧師)	仲栄真里香 (沖縄聖書教会基督恩寵教會)
教師の声	植田秀子 (東広島伝道所)
弓矢容子 (名古屋岩の上伝道所日曜学校教師)	小学科下級
聖書研究	伊藤治郎 (四日市教会日曜学校教師)
木下裕也 (名古屋教会牧師)	小学科上級
杉山明 (中部中会引退教師)	申成日 (広島教会牧師)
辻幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	中学科
相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	赤石めぐみ (西神伝道所日曜学校教師)
坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)	成人科
吉田崇 (坂出飯山教会牧師)	石丸新 (東部中会引退教師)
山下朋彦 (平和の君伝道所宣教教師)	いのちのパン (子ども聖書日課)
カテキズム研究	三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)
小野静雄 (多治見教会牧師)	吉田櫻子 (稲毛海岸教会)
説教展開例	表紙イラスト
長田詠喜 (高松東教会牧師)	坂野知子 (松戸小金原教会日曜学校教師)
千ヶ崎基 (草加松原教会牧師)	本文イラスト
小野田雄二 (上野緑ヶ丘教会牧師)	新海敬造 (名古屋岩の上伝道所)

---

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師

---

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』

2006年7・8・9月号 (季刊)

第22号

2006年5月28日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ 〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価	900円 (本体価格)

---